
クリスタル・クロニクル

氷柱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスタル・クロニクル

【Nコード】

N0881V

【作者名】

氷柱

【あらすじ】

今年の夏で17才になる如月アズ。ようやく待ちに待った夏休みが始まるうとしていたその時、アズはこの世界と交わることのないもう一つの世界、「クリスタニウム」の神竜セピアノスにより異世界へ召喚される。

そこは、アズの住んでいる地球とは文化も風習も違い、何よりも世界の仕組みそのものが違っていた。空を舞う竜、大地を駆け回るケンタウロス、森に住まうエルフ達……。そして人と獣が掛け合わさったような姿を持つ獣人や高い知能を持つ獣達がそれぞれの生き方で、

町や村を築いて生活をしていた。

未知なる心の結晶「クリスタル」の力を加護に回るこの世界に人の心の闇が溢れてしまうとき、世界は破滅に向かう——神竜セピアノスは、静かに告げた。

己の心の中に眠る真の力が目覚めるとき、その想いは具現化し、闇をも浄化する武器となる。

世界の命を賭け、迫りくる混沌の影と戦うべく、アズは戦場へと身を投じていく——。

プロローグ

それは、この世界であるような、この世界ではないような、とても不思議な場所だった。

限りなく広がる美しい草原。なだらかな傾斜がゆったりと続いていて遠くまでは見えないが、果て無く続いているようには見えない不思議な空間。

空はなく、明るい乳白色色の光が優しくあたりを包んでいる。生き物の気配もない。動く影もない。虫も鳥も飛んでいない。

この空間に唯一在る物と言え、草原の中に悠然と佇む一本の大きな樹だけ。その樹は巨木と言っては過言ではないほどとても大きい。太く立派な幹にはコケや蔓が生え、その樹の年代を物語らせ、その幹から大きく四方八方に枝分かれた枝からは新緑の葉が風とともにさざめく。

圧巻。

樹の迫力はその一言に尽きる。しかし、もし人がこの樹を見れば「なつかしい」と思ってしまうかもしれない。

この樹は、この世界の生命の源なのだから。

そんな樹の元にゆっくりと上空から近づいてくる影があった。

それは影というにはあまりにも眩しく、そしてあまりにも美しい。

樹に近づくにつれ、影は光へと色を変え、そしてゆっくりと形を変えていく。

静かな羽音とともに樹の元へ降り立った光は、とても美しい白龍へと姿を変えていた。

鳥によく似た羽毛に包まれた3対の翼をゆっくりとたたみ、光の加減によって白銀にも純白にも見える体毛を風になびかせ、白龍はそつと樹を見上げる。何か物言いたげに黄金色の双眸を細めるも、長く息を吐き出し、白龍は体を丸めて樹の根本に寄り添う。

ついにこの時がやってきた。

もう年百年、この瞬間を待ち望んでいたことか。白龍はゆっくりと瞼を閉じていく。

樹にすり寄り、耳を澄ませる。

…とても暖かくて、息づく脈の音が静かに聞こえる。それは、これから肉体を離れ、精神だけでかの異世界へと飛び立つ白龍を暖かく包み込んでくれた。

…母なる世界樹よ。私に力を…

白龍の額に優しい碧い光が瞬き、白龍の精神はゆっくりとこの世界を離れていった。

プロローグ（後書き）

初めまして。小説初投稿になります、氷柱と申します。

現代よりもファンタジーな世界を愛してやまない妄想を文章に書き綴り、日々ちよつとずつ更新していけたらと思います^^

ド素人で指摘されることも多いと思いますが、誰かの目に留まり、感想なんかを頂けると励みになります…。

1 夢

風を切る音が妙に鮮明で、一瞬夢か現実がわからなくなる。

けれど、ぼんやりとした視界が次第に晴れてきて、目の前に広がる真っ青な空を見上げるたびに、これはいつもの夢だ、と理解する。

いつもいつも、この壮大な空の景色から夢は始まる。

鳥の翼によく似た、けれどどこことなく違って見える不思議な翼に風に乗せ、アズの跨っている生き物はゆっくりと飛行している。ここからだと言えは見えな。いつも見えないのだった。

遠くを見渡せば地平線が見える。それは、この下に海が広がっているということ。そして、空に浮かんでいる大きささまの形をした物体がいくつも浮かび、神殿のような、町のような物が建っていることがわかる。

夢なのに細かくよくできているな、と我ながら思ってしまう。

アズの跨っている生き物の首がふいにもたげられ、顔をあげて高く鳴いた。

くおおおおおお……ん

いくつもの音が重なり合ったような綺麗な鳴き声は、この夢が終わる合図。この生き物が鳴くとき、アズはいつも夢から目覚める。

その時だった。

——もうすぐだよ。

「え?」

いつもの違う展開に驚く。思わず聞き返すと、少年のような声がもう一度囁く。

もうすぐ会えるよ。

遠のく意識の中、アズは生き物に向かって手を伸ばす。

待って、行かないで……待って……

「待って！」

「きゃあっ！」

がばりと起き上がると、自分の叫んだ声とは別の声の主が驚いて仰け反った。

「……あれ？」

上半身を起こして手を伸ばしたまま数秒。
如月アズは放心したように呟いた。

「……あれ？ じゃないっ!!」

言われて初めてその人物に気づき、アズは伸ばしていた手を頭に持ってきてぼりぼりと掻いた。

「びっくりさせないでよお姉ちゃん! あーもうホントに心臓に悪い……」

「ごめんねユズ。あたし夢見てたみたい」

あはは、と寝ぼけ眼のまま笑うと、妹のユズは眉をひそめた。

「またあ? あのよくわからない生き物に乗って空飛んでる夢？」

「うん。……あれ? でもなんか今日のはいつものと違ってたような……うーん、なんだったかなあ……」

腕を組んでふうむと考える。

なんかいつもと違ってたのに、いざ起きて思い出そうとするともやもやしていて全然思い出せない。そもそもなんで「待つて」なんだっけ? なんで手伸ばしてたんだっけ?

「……うーん」

「考え事してる最中で悪いんだけどさ、あたしの格好見てなんか思うことない？」

「うーん？」

言われてユズを見ると、言わずと知れたセーラー服姿。アズとユズの通う東高校の制服だ。

結構レベルの高い高校で知られているけど、制服が可愛いからという理由で県外からも受験を希望する中学生が多いくらい人気で……って。

制服？

「っああー……っ……っ！っ！」

ベッドの布団を勢いよく剥いで、アズはあらん限りの声で叫んだ。

「やっと気がついたよ……ホントに運動できる以外は抜けてるんだから」

「悠長なこと言っていないで手伝って!……せ、せ、制服どこっ」

「クローゼットでしょ? その前にパジャマ脱いで。しっかりしてよホントにもう」

どたばたと部屋の中を走り回る姉に呆れて溜息をつき、ユズは腕をまくって姉のパジャマをひっぺがしにかかった。

2 声

「はあっ……」

通学鞆を持ったまま膝に手をつき、アズは乱れた息を吐き出して後ろを振り返る。

「ゆーずー！早く来ないと遅刻しちゃうよー！」

左手でぱたぱたと手を振れば、自分の遙か遠く、きつい上り坂のあたりでひいひい言って必死に上っているユズが恨めしそうに睨んでくる。

「この……薄情者っ……！自分の登校時間削ってでもお姉ちゃんの世話してたあたしの時間返せ……」

なにやらアズを呪っているかのような目つきだったので、冗談はこのくらいにしないと本当に嫌われてしまう。アズは苦笑して来た道を小走りで戻っていく。

年子である妹、ユズとはたった二人きりの家族。母はユズが生まれてすぐに他界。父は男手ひとつで2人を育ててくれたが、アズの東高校の入学を待たずに疲労で倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。

2人を良い高校へ、良い大学へ……その一心で働きに働き、父は2人に贅沢さえしなければ生活していけるだけのお金を残して亡くなった。――それが、何よりも悲しかった。

お金よりも、もっと家族として一緒にいる時間がほしかった。もつとたくさん愛情を注いでほしかった。けれど、それは今だから言えること。父が必死になって稼いでくれたお金は使わず、アズは本当に必要なった時にだけ使うと心に決めている。

今は親戚の経営している小さなアパートを借りてユズとバイトをしながら2人で暮らしている。贅沢はない。けれど幸せだった。

「だいじょうぶ？」

「あたしもお姉ちゃんみたいに運動できればいいのになあ……」

腰を折って尋ねれば、ユズは舗装道路にぺたんと座り込んでしまふ。

「運動できても勉強できないもん。ユズのほうが羨ましいよ」

「頭いいだけじゃ何も出来ないって。それに比べてお姉ちゃんは凄いいよね。ついこの間だって電車で痴漢に合ってた女の人助けるだけじゃなくて、逃げた男の人まで追いかけてひっ倒して捕まえちゃうんだから」

「でも友達に言ったら「女気ねえ〜!」とか笑われたよ?」

「女気なんかなくても警察から表彰してもらったんだから胸張ればいいじゃん」

それにもとからお姉ちゃんに女気なんてないしね、と言われる始末。……まあ確かに女気はほとんどないような気もしないでもない

……かな？

「まああたしは運動神経いいだけ取り柄ですから」

ふふん、と腰に手を当ててふんぞり返ってみると、「そう威張られるとなんか褒めなきゃよかったって後悔する」と半眼で睨まれた。

「風がきもちいいねー……」

山から吹いてくる風に、アズのセミロングの髪がさらさらと揺れる。坂の下を見下ろせば、何もない田舎だけど、のどかで、静かで、都会にはないものがたくさんある小さな町がある。

高校を卒業したら、この町を出て行かなければならない。

父は2人が大学まで行けるように、と言っていたが、アズは高校を卒業したら就職しようと考えている。これは、まだユズにも話していないこと。

この町は人口もそれほど多くないし、働き口がたくさんあるわけでもない。就職するならば市外か県外、と相談した進路の先生に言われた。

ユズに言ったらなんて言うかな……。

ちらっと座っているユズを盗み見する。――きつと、「あたしを置いて行くななんてお姉ちゃんの薄情者っ！」とか言うに違いない。

でも、せめてユズだけでも大学に行かせてあげたかった。アズよりも勉強が出来て、先生達からの人望も厚い。本人が大学へ行くことを望めば、アズは一年間一生懸命に働いて、お父さんのお金と合わせて大学へ行かせてあげようと心に決めていた。

あたしにもできること、あるよね……お父さん。

なんとなく父がいそうな空を仰いだ、そのときだった。

——アズ……

「――え？」

不意に呼ばれた気がして隣に座っているユズを見下ろす。

「どうしたの？」

「え、今呼んだよね？」

「ううん、あたし何も言っていないよ」

「……でも今」

――アズ

また聞こえた。

「え、ついに幻聴まで聞こえるようになったとか言わないでね？」

そわそわと辺りを見回しているアズに心配したような声をかけるも、ユズも耳を澄ます。……が、もちろん何も聞こえない。

「誰かの……たぶん女の人の声だ。あたしを呼んでるの」

「女の人ってだれ——」

ユズがアズに背を向けた瞬間だった。

突然ユズの話し声が遠のいていく。語尾がゆっくりと消えていき、そこでアズははっとする。

目の錯覚かと思った。

ユズだけじゃない。アズの視界に入っているすべての景色が乳白色に染まってぼやけていく。

「……え、やだっ——ユズ!」

あわてて妹の名を呼ぶも、もはやアズの声も届かなくなってしまったのか、ユズは振り返ることなく景色と一緒にぼやけて消えていく。

「ユズ!!」

必死に伸ばした自分の手ははっきりして見えるのに、目の前のユズは景色と一緒に becoming 乳白色に交じって……

「アズ」

凜とした女性の声を合図に目の前から消えてしまった。

2 声（後書き）

前置き長くてすみません；

異世界トリップは次か次のお話で行けると思います^^

どうぞお付き合い下さいませ。

3 狭間

アズは、ただ茫然と目の前の何もない空間を見つめていた。

まだ夢でも見ているのか、アズはとりあえず何も考えられなかったので、ベタに自分の頬を両手で抓ってみる。

「……痛い」

実際に夢の中で頬を抓ったことはないのもそれで本当に夢から覚めるのかわからないが、それでもしつかり痛みを感じる。目の前の景色はわからない。

「……」

両手を下ろし、途方に暮れる。何もしないままにいるのもいたたまれなくなり、とりあえず叫んでみようと思口を開いたその時だった。

「アズ」

「！」

突然背後で名前を呼ばれ、驚いて振り返る。

——振り返って、目の前の光景にさらに驚く。

「……」

開いた口が塞がらないとは、まさにこのこと。

目の前、アズの視界いっぱいに広がるととても大きな樹——いや、もはや視界に収まりきれないほどの巨木が、悠然と目の前に佇んでいる。

巨木の幹はびっしりと苔生し、地面からはい出た何本もの蔓が絡み付いている。両手をいっぱいに広げても人が何千人いても足りないくらいに太さで、こんな大きな樹があったことに対して信じられない気持ちだった。

そしてその樹に生えているたくさん葉は、空から降り注ぐ光を受け、淡く光っているように見える。

葉が光る樹があるなんて知らなかった……。

感激しながらも視線を下に持っていき……そこでアズは飛び上がった。

大きな樹の下に横たわる小さな真っ白な塊——小さいと言っても比較物が巨木しかないのでそういう表現になったが、ゆっくりと近づいてみるとそれは十分に大きかった。そして、それは体を丸めて眠っている鳥のような体毛をもつ生き物だった。

「鳥……?」

にしては体格が良すぎる。それによく見れば尻尾が付いているし、足も鳥のような足ではない。どちらかというと爬虫類系の骨格のよい足つき——。

足、翼、頭……と視線を持ってきたところで、その生き物の顔をまじまじと凝視。

そして、やっと理解した。

「……竜」

理解、とは言ってももちろんそれは空想の中の生き物。爬虫類のような顔、体格を持ち、背に翼を生やしている様は竜というよりドラゴンと表現した方が合っている気がする。

しかし、目の前の竜は広く一般的に知られている鱗に覆われた竜ではなく、長く真っ白な美しい体毛に身を包んでいた。あまり本やアニメの中でも見たことのない竜である。

それに、背には鳥によく似た形の翼が3対も畳まれている……果たしてこの生き物を竜と断言していいのか悪いのか。

そんな葛藤をしているとき、またあの声がした。

「突然の召喚を許してください、アズ……」

「！」

今度ははっきりと聞き取れた声は、アズのすぐ目の前——真っ白な竜の元から聞こえた。——否、竜とアズの間小さな光の珠が湧いてきた。声はその光から発せられている。

召喚……聞きなれない言葉に、内心身構える。

「……あなたがあたしを呼んでた人？」

「私の名はセピアノス——この世界を創造し、すべての生命を生み出した神、グラン・グレイフォスに代わり、この世界を護るもの」

人と呼ぶには違いがあるとは思ったものの、セピアノスと名乗る竜は特に訂正せずに話す。

この世界という言葉に突っかかりを覚え、アズは眉をひそめる。

「ここは地球？」

「いえ、ここは貴女の世界と私たちの世界との狭間にある、どちらでもない世界です」

「それは……異世界ってこと？」

「ええ。決して交わることのない、平行して存在する世界です」

ということは、今アズは俗にいう「異世界トリップ」をしていることになる。……もちろんそうすんなり理解できるほど冷静な性格ではない。これが本当に現実だというのなら、それを受け入れるために少し頭の中を整理しなければならない。

ユズのように頭がよければすんなりと現状を受け入れることができるのにと、こんな状況でも考えてしまう。

「……混乱してしまうのも無理はありません。しかし、どうか許してください。私たちの世界に残された最後の希望——貴女しか、いないのです」

「ちょ……ちよつと待って！急すぎて話が全然分からない！あたしが最後の希望ってどういうこと？あたしがセピアノスに召喚……された理由ってなに？」

「……すみません、アズ」

突然謝罪され、アズは混乱して首をかしげる。すると、ゆっくりとアズの視界に白いもやが漂い始める。

「順を追って説明している時間がありません。本当に申し訳なく思っています……ですが、これだけは伝えられます」

「え？時間がないって……っていうかこの霧みたいなのって」

「聞いてください、アズ」

「は、はいっ」

どんどん深くなっていく白い霧のようなもやにおどおどしていると、セピアノスに制される。慌てて気を付けの姿勢で向き直る。

「今、私の世界は人の心の闇が招いた混沌の影により、少しずつ蝕まれています。……もし世界に混沌の影が溢れてしまえば、私の世界「クリスタニウム」は破滅の一途を辿ります。その世界の生きとし生けるものすべてを巻き添えにして――」

「そんな……」

「貴女はこのセピアノスを選んだ、クリスタニウムを救える唯一無二の心の持ち主です。クリスタルの力を発揮すれば、影を切り裂き、人の心を取り戻すことが出来ましょう……」

もやは濃くなり、目の前にある巨木も竜のセピアノスも見えなくなる。そして、光のセピアノスでさえ見えなくなりつつある。

「私は貴女と共に行きましょう。……後は彼が案内してくれます」

目の前に漂っていた光のセピアノスがアズに近づき、そしてゆっ

くりと胸の中に吸い込まれていく。じんわりと胸が暖くなり、アズは心が何かで満たされていくのを感じた。

「私は貴女と共にあります、アズ——」

セピアノスのその言葉を最後に、アズの周りに空気が渦を巻き始める。

「……？」

不意に感じた一瞬の体の浮遊感。

「え？」

そして、

「へっ——」

地面をしっかりと踏んでいたはずの確かな感触が唐突に消えた。

「ごうっ！」

耳鳴りを引き起こしそうな豪風に掻っ攫われ、アズは理解した。

あの狭間の世界からそのクリスタニウムという世界にまた召喚されたことを。

そして、その召喚された場所が空の遥か上空であるということ。

4 ヴェール

拝啓、天国にいるお父さん、お母さんへ――。

この夏で17才になるはずだったアズがもしかしいたらもうすぐそちらへ行くことを、親不孝な娘を、どうかお許しください。

「いやあああああああ！！」

胸中で冗談にもないナレーションをしてみても、無償に死んでも死にきれなくなり、アズはあらん限りの声で叫んでいた。スカイダイビングだってやったことがないのに、生まれて初めてのダイビングがパラシュートもなしの初ダイブってどうなの！？誰もやったことないでしょ！？だって生きて帰って来ないもんね！！

というかこのままだと冗談ではなく本当に死んでしまう。遙か眼下に広がる美しい海は、今は遙か下でももう5分もしないうちに目前に迫ってくる。

やばい！これはマジでやばいってえええええ！！

落ちているせいで豪風しか聞こえないし、空を飛んでいる飛行機もなにも見えない。というか探せる状況ではない。風に揉みくちやにされて視界が目まぐるしく回るのだ。

っていうか！

「せつ、せぴっ……セピアノス！お願いだから助けてー！！」

アズと共に……とか言っておきながらこの状況でもなにもアクションが起こらないってどういうこと！？このままじゃホントに冗談抜きで死んでしまう。

海面に叩き付けられてバラバラになって死ぬなんて想像したくないし、絶対に嫌だ。

「ちょっと聞いてんの！？お願いだからうんとかすんとか言ってるー！！」

そうこう叫んでいるうちに海面がどんどん近づいてくる。なんとなくもう助けが来ないような気がして条件反射的に目をぎゅっと瞑った。

聞き覚えのある声が聞こえたのは、その時だった。

——呼んで。

「あっ」

目をぱつと開けて目前に広がる海を見る。しかし何もない。

「呼ぶって……何て!？」

——ヴェール

アズは一縷の望みをかけ、藁にもすがる思いで無我夢中でその名を叫んだ。

「ヴェールウーーーーー！！！」

海面が近づく——その海面の一部がふいに揺らぎ、アズは目を見開いた。

突然アズの眼下にある海面が盛大に水しぶきを上げ、ドオンツ！という轟音と共に何かが勢いよく飛び上がった。驚く間もなくあっと思ったときにはその背にへばり付く形で拾われ、ぐんぐんと上昇して空へと高く昇っていく。

「……っ」

声も出せずに呻いて、閉じていた目をうつすらと開く。背に顔を埋めていたので、目の前に飛び込んでくるのはその生き物の背と自分の手だった。

そっと、その背を撫でてみる。

まるでシルクのようなさらっとした、ひんやりと心地の良い手触りだった。体毛は長くもなく、短くもない、ふわっとした抱きつきたくなるような触感。

アズは耳鳴りのする頭を押さえ、ゆっくりと上半身を起こした。

「うわぁ……」

そして、目の前に広がる光景に感嘆の溜息を漏らす。

青く、どこまでも澄み渡る空と、マリンブルーの美しい海との最高のコントラストが果てしなく続く美しい景色。落ちていたときは景色を楽しむどころではなかったので気が付かなかったが、海は本当に綺麗だった。

自分を殺すかもしれないと思っていた海に、状況が違えばこんなに引き込まれるなんて……と、アズは思わず自嘲気味に笑ってしまった。

『なんで笑うの?』

不意に少年のような声に尋ねられ、アズは本能的に自分の跨っている生き物に顔を近づける。

「なんか信じられなくって」

あんなことがあった後だからか、自分でも驚くくらい平常心を保っている事がおかしくてまた笑う。

『俺が言葉を話して驚かないの?』

「うん。なんか慣れちゃった」

『適応早いね』

「ありがと」

『どういたしまして』

生き物はふいっと顔を正面に向ける。

アズは、先ほどからデジャヴを起こしている。この美しい景色、不思議な生き物に乗っての飛行、そして空に浮かんでいる大小様々な宙に浮いている建物のような物体……。

ここ最近アズが毎夜のように見続けていた、あの夢とまったく同じだった。

このことを予知していたのか、それとも正夢になってしまったのか。どちらにしろ、アズは夢で見たままの世界の中にいた。

「……ヴェールって、竜？」

時折ゆっくりと羽ばたく鳥のような翼を尻目に尋ねると、彼は少し拗ねたようにふんつと鼻から息を吐き出した。

『竜じゃなくて、セブンス・ドラゴン。自分で言うものなんだけど、世界でも超珍しい激レア種なの』

「へえー！ドラゴンなんだ！この世界じゃ普通に存在してるんだね」

『さらっと流してくれたね。……まあ別にいいけどさ』

むくれるヴェールの体毛をもう一度撫でる。

いくら撫でても全く飽きの来ない、最高の手触りだ。這いつくばって抱きしめたい衝動を堪え、アズは日の光の加減によって様々な色に変化する体毛をじっと観察する。

元は白っぽいような、ものすごく薄い紫色のような体毛なのに、光を受けて波のように時折虹色に輝く。

「体毛の色がきらきら虹みたいに光って綺麗……」

『それが俺の特徴だから。この体毛で光の屈折量を自分で調節して姿を景色に溶け込ますことができるのさ。すごいだろ？』

「ホント！？……あ、それか」

今思い起こせば、あの海面が揺らいだ時ヴェールがそこにいたということになる。納得して1人頷いた。

『アズの世界に竜族はいないんでしょ?』

「うん。想像上の生き物だよ。漫画とかアニメとか映画には出て来るけど」

凶悪だったり、主人公を助けてくれるパートナー的存在だったり。ドラゴンや竜は様々な形や役でたくさんの人々を魅了している。

『まん……? そっちの世界のことは全然わからないけど、こっちじや人と竜族全般は共生関係にあるね』

「へえ」

『野生の竜族は人だけじゃなくて他の種族ともあまり関わりたがらないから比較的凶暴なのが多い。まあ、別にテリトリーを荒らさなければ何もしてこないけど』

「ふうーん。……ね、ヴェールはどっち?」

『どっちだと思う?』

逆に聞かれ、アズは深く考えることもなく「共生関係」ときっぱり言い切った。

『なんでそう思うの?』

「あたしを助けてくれたから!」

『アズって単純』

呆れたように呟かれ、アズは思わずむっとする。

「違うの？」

『違うね。俺がなんで超珍しい激レア種なのかわからない？』

「え……んと、姿を消せるから？」

『正解。姿を消して人の前に姿を現さないから』

「なるほど」

そこまで理解して頷いて、「ん？」と首をかしげる。

そこまで人の目に付かないように行動するということは、もしかなくとも共生関係にある竜族ではないのだろうか？

「共生関係じゃないの？」

『別に人間のために何かしたいなんて思わないしね。むしろどうでもいい？』

「……えー。じゃあなんで助けてくれたの？」

むっつりとむくれて背中をべしべし叩くと、『痛いから！』と予想もしなかった反応が返ってくる。そんなに力を込めて叩いたわけじゃないので、竜という生き物は案外軟にできてるのかもと思った。

『アズを助けたのは、セピアノスにそう言われたから。アズのパートナーになって戦いの手助けをするようになって』

「セピアノスに!？」

驚いて身を乗り出すと、『ちよっ、落ちるから!』と慌てた様子のヴェール。今まで全く気にしなかったが、ヴェールはセピアノスに比べるとずいぶんと小柄だ。頭から尻尾の付け根まで、目測で大体2.5mほど。とても長い尻尾を入れれば4メートル弱だ。

アズ1人が乗るには十分だが、2人乗れるかは怪しいところだ。

『セピアノスはこの世界にとったら神様同然の存在。神竜なんて呼ばれてるしね。そんな凄い御方に頼みごとなんてされちゃったら断れないでしょ?』

あの大きな樹のある狭間の世界でセピアノスが言っていた「彼」とは、きつとヴェールのことなのだろう。案内人と言っていたが……。

「あたし、理由もきちんと説明されることもなくこの世界に飛ばされてきちゃったんですけど。これからどうすればいいんですかね?」

なんか世界を救ってと言われたような気もするが、どうやって?と半信半疑。なんとなくかしこまってヴェールに尋ねてみれば、

『え、クリスタル使えないの?』

……なんのこっちゃ。

「はい？」

首をかしげて聞き返せば、『いや、だからクリスタルだってば』。
……いや、だからそのくりすたるがわからないんだって。

『はあ……ホントに切羽詰ってたんだね、セピアノス』

「切羽詰ってたかはわかんないけど、なんか時間がないとかって言
ってた」

『うーん、俺説明とか好きじゃないし面倒なんだよね。……あそこ
連れてった方が手っ取り早いかな』

「あそこ？……どこ？」

『セピア・ガーデン』

ガーデン……庭？なんだか緑や花がたくさんありそうなイメージ
だ。アズは少しわくわくしてヴェールの背をぽんぽんと優しく叩い
た。

「そこに行けば色々教えてもらえるんだね？行こう行こう！」

『わかったからおとなしくしてよ。落っこちても拾いに行かないか
ら——』

唐突にヴェールが言葉を切った。首をもたげて左前方に注意を向

けている。

「ヴェール？」

不思議に思っ て声をかけると、真剣な声で返された。

『訂正』

「え？」

『もし落っ ちても拾っ てあげるから、落ちないようにしっ かり捕まっ ててよ』

何やら先ほどとは雰 囲気がまるで違 う。アズはヴェールの見据えている左前方に目をこらし、そこでゆっ くりとこちらに向かっ てくる3つの黒い点を視界に捉える。

「……なに？」

『まあ、俺たちをよく思っ てない連中、とだけは言えるね』

しっ かり捕まっ て、と2度目の忠告を受け、アズは訳の分からな いままヴェールの首にしっ かりと両腕で抱きつ いた。

5 謎の2人組

「つ、捕まったよ」

『……頼むから絞殺さないでよ?』

首に両手でぎゅっと捕まると苦しそうにそう言われた。どうもこの世界に来てからというもの、体の調子がおかしい。

『――さて、行きますか。口閉じてね』

「むっ――?」

返事をしようとした瞬間、口を閉じろと言った割には待つ気のないように突然翼を折りたたみ急降下した。すると、先ほどの黒い三つの点（竜に跨った人だとわかった）もヴェールを追いかけるように急降下してきた。

『ちっ……やっぱそうか』

憎々しげに舌打ちをし、ヴェールは翼をさらに折りたたんで降下のスピードを上げる。必死に首にしがみついているアズの眼下には海面が目前に迫っている。

「――!」

悲鳴を上げそうになったその時、ヴェールは盛大に水しぶきを上げて海面スレスレを飛行する。羽ばたきの風圧で飛沫が飛び散り、後を追ってきた竜たちの目つぶしにする。アズのところまで飛沫は

飛んでこないが、空を落ちていた時とは比べものにならないほどの風圧なのでどっちにしろ目なんかほとんど開けていられなかった。それでも必死に後ろを振り返ってみると、3頭いる内の1頭だけが徐々に距離を縮めつつある。

どうすんのヴェール!?

『だったらこうしてやる!』

胸中で叫んだアズの声にヴェールが答え、『掴まれよお!』という叫びと共に突然旋回した。

「!?!」

一気に距離を縮めてきた竜に乗っていた人物はまさか旋回してこちらに向かってくるとは思っていなかったのか、回転を加え遠心力を増幅させて繰り出されたヴェールの尻尾の一撃を避けることなくそのままモロに食らう。竜の甲高い悲鳴と共に、海に3度目の大きな水しぶきがあがった。

『どーだ、ド三流が! デカイからって俺に勝てると思うなよ!』

再び上空に舞い上がったヴェールが誇らしげに叫んだ。アズはあまりの急展開続きでくらくらと眩暈を起こしつつも、眼下に広がる白波を見下ろした。

「し、死んでないよね……?」

『人間は失神じゃない? 竜の方は知らないけど』

突き放したような冷たい言い方に思わず絶句していると、遠くから「ヒュー♪やるやるう」という男性の声が聞こえた。

振り向けば、そう遠くない場所に2頭の灰色の竜と2人の人が乗っていた。

「さっすが幻のセブンス・ドラゴン！ちっこい体躯ならではのスピードと機動力だねえ。ちっこいから成せる技！見事見事♪」

何やら無駄に「ちっこい」を強調して拍手をしている男性はにこにこやたら笑っている。その態度にか、それとも「ちっこい」という言葉にか、ヴェールが低く唸った。

男性は燃えるような赤い髪をしていて、前髪が長いのか、黒いヘアピン2本をクロスさせて留めている。後ろ髪は癖なのか、それともワックスか何かでそうさせているのか、ぴよんぴよんと無造作に跳ねているのが特徴的だった。

「滅多に拝めないだけのことはあるよな。なあ、ラフィエル？」

「……」

赤髪の男性が隣の竜に乗っている人物に同意を求めるが、黙ったままこちらをじっと凝視したまま口を開かない。何やら怪しげなコートに身を包んでおり、頭からすっぽりと覆われたフードのせいでその人の顔を見ることができなかった。

「で、あんたがセピアノスに選ばれた勇者様ってわけだ」

「！」

急に話が自分の方に向き、思わず身構えた。

「へえーえ、女の子。もつとごつい男かと思ってたけど、案外……ふーん」

「な、なんですか……」

何やら顎に手を当ててふむふむとアズの品定めを始める赤髪。若干引き気味に睨むと、今まで黙っていたフードの人物が何か気づいたように背後を振り返った。

「おい、レイズ」

ラファイエルという人物は、ハスキーだが声からして女性だと気づいた。

「ん？——あ、やっべ。来ちゃったよ」

レイズと呼ばれた赤髪の男は軽い調子でそう言うと、アズに向き直った。

「さすがに4対2じゃこっちが圧倒的不利。だからまた来るわ」

「は？」

「んじゃまたなー」

につこりと人のいい笑みを浮かべ、レイズは陽気にぱたぱたと手を振ってラファイエルと共に去って行った。

遠くなっていく2頭の竜の姿をなぜか見送り、アズはヴェールに尋ねた。

「……なんだったの？あの人たち」

『さあ』

……「さあ」ってこら。あの人たち見たとき明らかに知っているような口ぶりだったの知ってるんだぞ。

結局あの人たちが敵だったのかそうでないのかよくわからないまま去って行った。

『ほら、お迎えだ』

言われて顎で示された方を見ると、またしても3頭の竜がこちらへ飛んでくるのが見える。今度はなんだと内心身構えていると、『今度のが本命だから』とヴェール。

「……信じられない。本物のセブンス・ドラゴンだ」

先頭の赤い竜に乗っている人物が近づいてきての開口一番がこれだった。後ろに控えている2人も信じられないような物を見る目つきでヴェールを凝視している。……先ほどのレイズといい、この男の人達の驚きようと言い、本当にヴェールは珍しい竜なんだなと思った。

「そして君が……セイレーンか？」

青みかかった黒髪を後ろで結わえた紳士的な男性がアズを見て首をかしげる。

「……や、あたしは如月アズです」

数秒の間を置いて名を名乗ると、戸惑い顔の男性を差し置いて突然ヴェールが『ぶふっ!』と盛大に噴出した。

「ちょっ……なんで笑うの!? あたし何かおかしいこと言った!?!」

『おっ、おかしいも何も……ぶぶっあはははははは!』

「だからなんで笑うのー!?!」

ぱしっと叩くと『イタッ!』と悲鳴を上げるもひいひいと笑い続けるヴェール。なんで笑われてるのかもわからないまま、髪を結わえた男性までもが苦笑して肩をすくめた。

「ごめんよ、言い方が悪かった。……君がセピアノスに選ばれた勇者、でいいんだな?」

ヴェールを叩く手を止め、数秒考えて頷いた。

「勇者かどうかわかりませんが、確かにセピアノスに連れてこられました」

「それだけわかれば十分だ。――俺はゼノ。ゼノ・ブランフェール。セピア・ガーデンでクリスタルマスターを束ねる団長をやってる。よろしくな、キサラギ」

そう言っ、ゼノは右手を差し出そうとして「ここじゃ握手はできないな」と少年のように笑った。

たしかに今は双方竜に乗っている状況だ。アズもその笑顔に釣られて笑い、「よろしくお願いします」と頭を下げた。

「あ、あと、キサラギは姓です。名前がアズ」

「え？ そうなのか？ さすが異世界人、変わった名前だと思ったけど姓だったんだな」

やっぱりこの世界はファーストネームを先に名乗るようだ。アズも今度から「アズ・キサラギ」と言わないと「キサラギ」が名前だと思われるので、気を付けようと思った。

「それじゃあ、アズ。さっそくセピア・ガーデンに向かうでしょう。——お前たち、アレの回収を頼む」

「はっ」

ゼノが後ろに控えている2人の男性にそう指示を出す。

……「アレ」？

アズもゼノの指差す先を目で追うと、海面にぷかぷかと浮いている人と灰色の竜の姿……。

「あ……」

『完璧忘れてるし……』

先ほどヴェールが尻尾で叩き落とした竜と乗っていた人が、今の今まで忘れ去られて虚しく海面を漂っていたのだった。

6 入園

水面にぷかぷかと浮かんでいた人と竜をしっかりと回収し、アズとヴェールはゼノに案内されてセピア・ガーデンを目前にしていた。

「うわあー！何アレ！」

「あれがセピア・ガーデン。俺たちクリスタルマスターの本拠地だ」
ゼノの説明にアズのテンションは上がりに上がってヴェールの上で子供のようにはしゃいでいた。

もう目前に迫っているセピア・ガーデン。それは、海の遥か上、
天空に浮かぶ花の咲き乱れる緑の美しい庭だった。

どういう仕組みでそうなっているのかはわからないが、まるで大地をくり抜いてそのまま宙に浮かせたような見た目で、一番面積の広い所にはとても大きくて神秘的な神殿のような建物が建っていた。

「あの浮いている大地は浮島といって、まあ、見たまんまだな」

と、笑いながらゼノ。

神殿が建っている一番大きな浮島の周りにも小さな浮島が幾つも連なるようにくっ付いていて、まるで一つの国のように悠然と浮いている。

「あの水みたいなの、滝みないなものはなんですか？」

浮島の末端から海へ吸い込まれるようにして流れ落ちている滝を指差して尋ねると、ゼノは「ああ」と頷く。

「あれはガーデン内に流れる水が合流して川になったものだよ。大地と同じだ。雨が降って山に染み込み、それが川となり最後には海に還る。……それは空に浮かんでも一緒」

「へえ〜！」

感心して頷いていると、「ま、詳しく言うところとちょっと違うんだけど、それはまた順を追って、な」と付け足された。

うん、何事にも順番というものがある。アズはもう一つ頷いた。

そしてもう一つ気になるものが。

「あの周りを飛んでるたくさんさんの鳥みたいなものは全部竜ですか？」

「そう。この人間たちと共に暮らしている竜たちだ」

セピア・ガーデンの周りを縦横無尽に飛び回ったり、くり抜かれた浮島の地面がむき出しになっている所にある無数の穴の中に入り入ったりと、こうして見ていると竜たちは案外束縛されずに自由気ままに暮らしているようだ。

襲われたり噛みつかれたりしないのだろうか？

『しないよ。竜だってバカじゃないんだから』

アズの胸中の問いに、何故かヴェールが答えた。

「……思ったんだけどさ、なんであたしの心が読めるの？」

『シンクロしちゃってるから？俺たち無駄に相性いいみたいだし』

……そういうものなのか。

相性がいだけで心がシンクロしてしまうとは、プライバシーも何もあったもんじゃないとアズは少しだけげんなりした。

「？」

そんな2人のやりとりでゼノが怪訝な顔をしたが、正面を向いて指をさした。

「竜から降りてガーデン内に入るときは、基本はあそこから」

指差す方向を見れば、あの無数に開いている穴が目に入る。

「あれは竜たちの飼育室になっていて、人が竜に乗り降りするときもあそこが出入り口となる。……まあ、ちゃんとあそこを利用して出入りする奴の方が少ないとは言えるけどね」

「飼育室……」

『嫌な響き』

ぼそっと呟いたヴェールをぺしっと叩いて制し、アズは首をかしげた。

「みんなほとんど利用しないんですか？」

「自分の竜との付き合いが長い連中は、基本的に呼べば大抵は竜の方がすっ飛んで来てくれるからね。わざわざ下に行かなくても乗り

降りできるんだ」

「じゃあ、あんまり意味ないですね」

「……アズって痛いところ突いてくるね」

何気なく言ったことだったが、ゼノは胸を押さえて苦笑した。後ろの2人も顔を見合わせてくすくすと笑っている。

「竜と付き合い始めて間もない初心者たちはまだ竜との信頼度も低いから、ここで降りすることを勧めてる。……君らには必要ないかな？」

『ないね。俺たち相性ばっちりだから』

「そうか、なら安心だ。でもセピア・ガーデンは初入园だから説明を兼ねて、ね」

「はいっ！ よろしく願います」

ゼノは頷き、後ろに控えている2人に指で合図した。すると2人は仰々しく頭を下げて、人と竜を担いだまま上昇していき神殿の方へと消えていく。

「彼らには彼らの仕事があってね。これからあの男を尋問する」

「じ……尋問！？ 悪い人なんですか？」

くり抜かれた岩肌の穴を潜り抜け、ゼノの後に続いて地面に降り立つ。ヴェールの背から床に足をついたところでぎょっとして尋ね

ると、ゼノは目をぱちぱちと瞬き。

「……あれ、さっき2人組に声掛けられてなかった？」

「かけられました。勇者様か？って」

「それだけ？」

奥の方から駆けてきた男の人が、ゼノの乗っていた赤い竜の装甲やら鞍をてきぱきと取り外している所を見ながら考え、

「1人はレイズ、もう1人はラファイエルって……」

「ふーん」

ゼノは頭を掻き、溜息をついて腰に手を当てた。

「奴らはノワールの連中だ。ま、これも順を追って説明するけど……何事もなくてよかったよ、本当に」

「……？」

「あ、紹介が遅れた。こいつは俺の相棒のジンだ」

と、親指で赤い竜を指し、ゼノはにっこりと笑った。ヴェールの二倍はあろう大きな赤い鱗を持つ竜——ジンの顔を見てアズが「よろしくね」と笑うと、ふんつと熱風のような豪快な鼻息で返された。

「人に懐かない結構珍しい竜なんだ。バーニングドラゴン、別名、ぐれんかりゅう紅蓮火竜。俺に似て照れ屋な性格だからよろしくな」

「……………はあ」

どこら辺が？

紳士的な人だと思っていたが、なんだか冗談なのか本気なのかいまいち分かりにくい性格をしている。

人を見た目で判断しちゃダメ！とユズに言われたことを思い出す。

「別名とかあるんですね」

「ああ。特別な竜族にはみんな付いてる。ま、そこらへんは彼に教えてもらうんだな」

ジンの鞍を取り終えた男の人が続けてアズの隣に四つん這いで寝そべっているヴェールの元へと近づき、そこで不自然にビクッと動きを止めて、持っていた装甲具やら鞍やらをガチャガチャと派手な音を立てて落とす。

「わっ」

『……………？』

アズは音に驚いて声を上げ、ヴェールはなんだこいつとでも言いたげな顔で男の人をまじまじと凝視。ゼノは「あ……………言うの忘れてた」と思い出したように苦笑。

そのゼノを見て、アズはなんとなく理解した。

そういえばアズも忘れてたけど、ヴェールはこの世界じゃ幻の激レア種のセブンス・ドラゴン……………だった。

7 セピア・ガーデン

それからは、人々が嵐のようにアズの前に押し寄せてきた。

口々に何かを喚きたてたり、慌てふためいたり、手を掴んで拝まれたり、ぽけっと突っ立ってることしか出来ないくらい訳が分からなかった。

「落ち着け！いーから落ち着け、こらっ！」

遠くでゼノの声があるが、人々はゼノを次々と押しのけてアズの周りに群がっている。

……あんなに仰々しくお辞儀をされるような人だったのに、この差は一体何なんだろうか？

「おおっ、信じられない！この御方が本物のセイレーンか！？」

「異世界より召喚されし我らの救世主様か！？」

「まだ子供じゃないか！セピアノスは一体何をお考えなのだ！？」

「しかも女の子！変な格好！」

「やったー！この世界は救われるぞー！」

「握手っ、握手してくださいセイレーン！」

「そのお力を見せてください！」

「セイレーン！」

「……………」

もはや会話の成り立ちですら理解できなかった。
アズを崇め、敬う人がいれば、眉間に皺を寄せて抗議してくる人もいる。しかもセイレーンで……。

ゼノと会ったときもそう言われたことを思い出して返答に困っていた、その時だった。

ドゴオオオンッ!!

「!?!」

飼育室全体を揺るがす轟音と震動でアズを含めるその場にいた全員がよろけてすくみ上る。

「……いい加減にしろ」

低く唸るような声に、アズよりも先に状況を理解した人々が冷や汗を流しながらゆっくりとアズから離れていく。群がっていた人がいなくなったことによって出来た道の向こうに、青筋を浮かべた無表情のゼノが立っていた。

とても大ぶりな、青く美しい形状をした輝く弓を携えて。

「……え」

そして、そのゼノから1mほど離れた床に、大きくえぐれた穴が1つぽっかり空いていて、ぶすぶすと煙が上がっていた。先ほどの轟音の原因はゼノがああ弓を使って穴を開けた……のだろうか？

……普通、弓でコンクリートの床にあんな大きな穴が開くものなのだろうか？

「俺は忙しいんだ。話がしたいなら俺の仕事が終わってからにしろ。……分かったか？」

ドスの利いた声で牽制し、ギロツと鋭く睨めばその場にいた全員がこくこくと小刻みに頭を縦に振った。

「分かったら散れ」

その一言で、わらわらと急いで散っていく。

「……」

ぽかんと口を開けたまま散っていく人々を見送っていると、「ふう」とゼノが溜息をつき、アズに近づいてきた。

「気持ちわかるけど、もう少しソフトに歓迎してほしいもんだ。な、アズ？」

「はっ、はい……」

思わずびくつとして返事をする、「そんなに怖がらなくても」と渋い顔をされた。

「だ、だってギャップが激しいから……」

「リーダーって辛いよな。こうして心を鬼にして怒鳴らないといけないんだから。いやー、辛い辛い」

……言葉にまったく心が籠ってない。半眼でゼノに呆れた視線を送っていると、何やら奥からバタバタと走ってくる複数の足音。

ゼノにも聞こえたのか、「げ」とさらに渋い顔をした。

「ちょっと！一体何事なの！？」

奥から姿を現した金髪の背の高い女性が、開口一番に切羽詰ったような声を上げる。全力で走ってきたのか、息が切れている。

「ノワール！？それともシャドウ！？」

「……悪い、アリス。俺だ」

「……………は？」

たっぷりの間を置いてアリスと呼ばれた女性が形のいい口を開く。緩くふんわりとした金色の髪が、サラサラと肩から落ちた。

「いやー、ホントに驚かせて悪い！つい、な」

悪びれもせずにゼノが「あっはっはっは」と笑うと、アリスは息を正し、こめかみに手を当てて深く深く溜息をついた。

「貴方のつい、で、どれだけの人間を驚かせたと思ってるの？ 全く、呆れるにも程があるわ、ゼノ」

「だから悪いって」

アリスと共に走ってきた後ろの数人も安堵の溜息を漏らす。ゼノの開けた穴を見て状況を察してくれたのか、小言は言うものの深くは追及してこなかった。

「……ただでさえ皆ピリピリしてるっていうのに、ホントにもう……あら？」

そこでようやくアズに気が付いたようで、綺麗な碧眼の双眸とぱつちり目があった。思わず肩に力が入る。

「ゼノ……もしかしてこの子が？」

「ああ。セイレーンだ」

「——っ！」

ゼノが頷いたのを確認した途端、アズは訳の分からないまま感極まったアリスに熱いハグの嵐に合ったのだった。

＊＊

「ごめんなさいね、アズ。つい嬉しくて……」

「いえ。あの、全然気にしないでください」

恥ずかしそうに頬を赤らめてアリス。アズは手をぶんぶん振って、アリスの隣に並んで長い階段を上っている。

アリスのハグの嵐に合い、その後ろに控えていた数人にも握手を求められ、「話が進まない！」と再びゼノがキレる始末。落ち着きを取り戻したアリスの「園内を案内する」という申し出を有難く受け、仏頂面のゼノも加わり3人で階段を上っていた。

ちなみに竜は園内には入れない規定があるそうで、『一緒にいる！』と駄々をこね続けたヴェールをどうにかして宥めて飼育室に預けてきた。

『早く戻って来ないと暴れまくるからね。どうなっても知らないからね』

とかなんとか、とても不吉な事を言って小さな子供の様にいじけてしまった。きっと知らない場所に独りにされて寂しいのだろうと思ひ、「いつでも心読んでいいから」と言っようやく落ち着いた。

「私はアリス・ウィルソン。ここで副団長、兼クリスタルエンジンアをしているわ」

長い階段を上った先に、出口が見えた。アリスが先導して出口に立ち、アズに向き直ってにっこりと笑う。

「ようこそ、セピア・ガーデンへ！」

アリスの横に立ち、目の前に広がった光景に感嘆の溜息が漏れた。

足元から続く白い石畳がまっすぐ続く先に、白い大きな噴水、そしてそのさらに先には、ヴェールの背に乗って飛んでいるときに真っ先に目に飛び込んできた、あの白い大きな神殿が悠然と建っていた。

神殿に続くまでの道には15mほどの距離を置いてベンチが置かれ、たくさんの人が座って談笑したり、植わっている花々や樹を眺めていたりしている。

「うわあ……すごく綺麗！」

「ここには専属の庭師が何十人というから。毎日、いつでも手入れをしてこの庭を美しくしてくれているの」

「へえ、すごいですね！」

言われてよくよく見てみれば、ちらほらと樹や花に向かって鋏を入れている人が見受けられる。みんな御揃いの緑色のつなぎ姿だった。

「天空に浮かぶ園庭……なんかすごいロマンチック……ん？」

しばらく歩いたところで噴水に行き当たる。その噴水の中になに

かキラッと光るものを見つけ、アズはとことこと駆け寄って中を覗いてみた。

「どうした？アズ」

「あの、ここでキラキラ光っているものって何ですか？」

そう言って噴水の光っている所をゼノに分かるように指差せば、
「ああ」と頷いてアリスの腕を小突いた。

「クリスタルの説明頼む」

「……仕事しなさいよ」

アリスに半眼で睨まれるも、「俺の仕事は説明じゃないから」とにっこり笑って返される。そういえば先ほどからクリスタルマスターやら、クリスタルエンジニアやら、やたらと「クリスタル」に纏わる言葉が多い。

アリスがアズの隣に並び、「こほん」と小さく咳払いをした。

「これはクリスタル。この世界に加護を与え、この世界に決して欠かせない生命の源」

「生命の……源？」

「そう。私たちの世界には当たり前のように存在している魔力をもった秘石のことを、総称してクリスタルと呼んでいるの」

アズは、改めて噴水の中に輝いているクリスタルを見つめた。
魔力をもった秘石、湧き出る水……もしかして、と思った。

「この水は、このクリスタルが出してるんですか？」

「そう！察しがいいのね、アズ！」

ぱん、と手を打って嬉しそうにアリスが笑った。

「その通りよ。でも、この水だけじゃない。園内すべての水を湧き出させることも、この浮島を浮かせることが出来るのも、すべてクリスタルが在ってこそなのよ。この世界はクリスタルが在って成り立っているようなものだから」

「……」

そつと噴水の水に手を浸けてみると、ひんやりと心地いい清涼感が広がる。……とても小さな石から湧き出されているようには思えない冷たさだった。

「アズの世界にはないものでしょう？」

「はい。……というか、色々とあり得ないことばかりです。大地を浮かせられて、水まで出せるなんて、本当にお伽話や本の中のお話ですから」

「……貴女もそのクリスタルを持っている。って言ったら驚くかしら？」

いたずらな笑みを浮かべ、少女のようにくすつと笑うアリスを茫然と見上げ、「……え？」とアズは情けない声を出した。

「あたし、そんな大層なもの、持ってないです……」

「ぶふっ！」

突然ゼノに噴出され、アズはビクッとゼノを振り返った。

「や、ごめっ……別に笑うつもりは、あははは」

……しっかり笑ってるくせに笑うつもりはなかったと言われても、全然説得力はない。

「ゼノ、笑いすぎよ。この世界の事なにも知らないんだもの、アズに失礼だわ」

「うん、本当にごめん。気をつけるから、そんなに睨まないで」

「……別に睨んでません」

むくれて答えと、ゼノはぽんぽんとアズの頭を撫でた。

「君がこの世界の誰よりも大層なクリスタルを持っているのに気がついていない所がおかしくて笑ってしまったんだ、許してくれ」

「それ……どういことですか？」

ゼノではなくアリスを見上げて問うと、彼女は「立って話すのも何だし、座りましょうか？」とアズを近くのベンチに促した。

アズが腰を下ろしたのを確認し、アリスはその隣へ。ゼノはベンチの後ろに回り込んで、背もたれに腕を組んで寄りかかる。

「まずは、クリスタルについてよく知っておいてもらわないといけないわね」

そう切り出して、アリスはゆっくりと話し始めた。

8 クリスタル

「この世界に生きるすべての生き物は、皆自分の中に自分だけの心のクリスタルを持っているの」

静かに話すアリスの横顔を見ながら、アズは無意識に自分の胸に手を持って行った。

「生まれてから死んでしまうまで、人は生涯ずっとクリスタルと共に人生を歩んでいく。良いことも悪いことも、すべてクリスタルは思い出としてその身に様々な情報を刻んでいく。……良いことも、悪いことも、すべてね……」

そう言うのと、アリスは両手を自分の胸にそっと添え、続けた。

「良くも悪くも、強い心の持ち主だけが、こうして心から想いを抽出してクリスタルとして具現化させることができる」

と、突然アリスの胸から柔らかな光が溢れだし、アズは目を見開いた。アリスの差し出された両手のひらの上に青く透き通った拳大ほどの大きさのクリスタルが浮かび、ゆっくりと回りながら光り輝いている。

「……信じられない」

「こうしてクリスタルとして取り出し、何らかの形状に出来る人の事を一般にクリスタルマスターと呼んでいるわ」

アリスのクリスタルをまじまじと凝視して、あることに思い当た

ってゼノを振り仰ぐ。

「じゃあ、ゼノさんのさっきの弓……あれもクリスタルなんですか？」

「うん、ご名答」

あの青く輝く美しい弓はゼノの心のクリスタルだった。……アリスのクリスタルを見つめたまま、アズは尋ねてみた。

「あたしも……クリスタルを出せますか？」

「それは貴女次第ね、アズ」

きっぱりと切り返され、アズは思わず「うっ」と言葉に詰まってしまう。てっきり「大丈夫よ」と言ってくれるものだばかり思っていたのに。

「……とは言っても、セピアノスが選んでこの世界に連れてきた勇者様だもの。その点は大丈夫だと思うのだけれど」

「ま、何事も心の持ちようだな。いい方に考えれば、自ずと自分の本当の力を引き出せる時が来る」

「……そんなもんなんですか？」

「そんなものよ。誰だって、自分に秘められた本当の力に気づかないものだもの。今はまだ、焦らずにゆっくり行きましょう？」

ね？と首を傾げられ、アズは自分の膝頭に視線を落として「はい

……」と呟いた。

あれだけ「勇者様」だの「救世主」だの「セイレーン」だの言われた後だというのに、もしアズが自分のクリスタルの事すら知らなくて何もできないただの16歳の女の子だと知ったら、きっと皆は落胆するに違いない。

……そこまで考えてから、あ、そういえば。と顔を上げた。

「さっきから気になってたんですけど、セイレーンてなんですか？ここに来る前から気になってたんですけど」

ゼノに会ったときも、このセピア・ガーデンに来たときも、会う人会う人全員に言われた「セイレーン」。名前のようにも聞き取れるが……。

すると、出したときと同じようにクリスタルを胸の中に戻していたアリスが思い出したように「気になるわよね」と頷いた。

「セイレーンは、この世界で「聖なる女神」を意味する言葉であり、セピアノスと共にこの世界を救う救世主の呼び名でもある意味の深い名前なのよ。もちろん、貴女がそのセイレーンなんだけど」

「せ……聖なる女神だなんて大げさな。あたしは運動が得意なの、ただの女子高生です……」

恥ずかしさのあまりに頬を染めて顔の前で手を振ると、アリスとゼノがさも楽しそうに声を上げて笑った。

「ホント、貴女を見たときはびっくりしたわ。「まさかセイレーンがこんな幼い少女だなんて……」って。でも喜びの感情の方が何よりも強かったから、思わず抱きしめちゃったの。……プレッシャーをかけてしまったらごめんなさいね？」

「もう十分かかってます……。どうしよう、あたしこのままクリスタルも出せなかったら、世界を救うどころか何も出来ないです……」

「アズがそんなんじゃないな」

よっこらしよっ、と弾みをつけてゼノが立ち上がり、腕を上げて大きく伸びをした。柔らかな風がゼノの髪を撫で、サラサラとそよ風に舞う。

「クリスタルってのは、人の心そのものだ。想い方1つで善にもなるし、悪にもなる。自分の事が分からなくなって自分自身を見失うと、クリスタルはその輝きを徐々に失っていく」

ゼノの足元に黄色の小さなボールがコロコロと転がってきた。「あ、団長だー！ボールとってー！」と、遠くで2人の小さな男の子が手を振っている。

「難しく考えるから心は迷う」

アズとアリスが見守る中、ゼノは腰をかがめてひょいっとボールを拾い、大きく振りかぶった。

「難しく考えない単純でまっすぐな奴だけが、クリスタルの本当の力を引き出せる」

ぶんっ！と投げたボールは綺麗な弧を描いて、まっすぐ子供たちの方へと飛んでいく。風に翻弄されることなく、まっすぐ、まっすぐ……。

「あ」

両手を上げてスタンバイしていた男の子たちの頭上をあっさりと通り越し、ボールは少し離れた場所にテンテンと転がって行ってしまった。

「もー、強く投げすぎー！」

「団長下手っぴー！」

「やー、悪い！ごめんなー！」

ボールを追いかけながら男の子たち。ゼノは笑って謝っていた。

「――俺の言いたい事、わかったか？」

手を払いながら戻ってきたゼノに問われ、アズは顎に手をやって数秒考えてから、首をかしげて答えた。

「……単純に考えろ。って事ですか？」

「そ。世界を救える、救ってみせる！……とか勢い込めば、アズの心はできる！って思いこむ。それが大事」

「……まあ、例えはめっちゃくちゃだけど、いい線いってるわね」

アリスが頷くと、ゼノは「だろ？」と子供のように笑った。

「自分に自信を持つのは、アズ。貴女はセピアノスに選ばれて、セイレーンで、そしてこの世界の救世主。確かに世界の行く末を担っ

ていると考えると気持ちが重くなるだろうけど、でもそれって、逆に言えば貴女にしか出来ないことなの。他の誰でもない、貴女1人にしか出来ないこと。……それって、とてもすごいことだと思わない?」

「あたしにしか出来ないこと……?」

「そう、貴女にしか出来ないこと。貴女の代わりなんていないわ。この世界は貴女を必要としているの」

「……っ」

「必要としている」……アズの心に、じんわりとしたものが湧きあがってくる。

「あたし……なんだか出来るような気がしてきました」

真剣な表情でアリスとゼノを見上げると、2人は顔を見合わせてから満面の笑みで頷いてくれた。

「その調子よ、アズ!」

「君がその想いを強く望んだとき、クリスタルは必ず答えてくれる。心ってのはそういうもんだよ」

「はい!」

自分がセピアノスに選ばれた事には、絶対意味がある。出来ないと思ってしまう。それは現実になってしまう。

心の在り方で力が手に入るというのなら、アズは単純でもお人好

しだと言われても構わない。

——あたしにしか出来ないなら、あたしは絶対に世界を救えるんだ！

想うことが力になるこの世界で自分を信じられないようでは世界なんて救えっこない。

思い込むだけでも、何も考えないよりはマシだ。自分の心にそう言い聞かせ、アズは自分の胸の前で拳を強く握りしめた。

9 世界の事情

どうやらクリスタルは、この世界ではとても一般的に使用されているようで、アズの世界でいう「電気」と同じ役割を果たしているようだった。

アリスの話によれば、クリスタルは人の心から抽出されるものではなく、自然発生した天然のクリスタル「ピュアクリスタル」という秘石があるらしく、発生する場所によってそれぞれ秘められた力が違うのだそうだ。

例えば、アズが最初に見つけた噴水に取り付けられた水の湧き出るクリスタル。あれが俗に言う「ピュアクリスタル」というもので、川の深い所や湖、滝壺なんかには水草のように密生してひっそりと生えているのだそうだ。それを採取して、アリス達クリスタルエンジンアらが加工を施して噴水や貯水タンクの中に組み込む。そうすることで、このセピア・ガーデンのように浮島で水の手に入りにくい場所でも、安心して生活していけるのだった。

電気がなければ明かりもつかない、テレビも見れない、料理も作れない、と何も出来ないのと同じように、この世界の人々もクリスタルがない生活なんて考えられない、ということだった。

「街灯や室内の照明や何かは雷の発生しやすい場所に生えるライトクリスタル。ガスや火を起こすファイオクリスタルは熱い砂漠とかに。水を湧きあがらせるアクアクリスタルは、まあ、さっき言った通りの場所に生えるわ。他にも色々あるのだけれど、今挙げた3つのクリスタルがあれば地上で十分生活していけるわね」

食べ物の確保は保証できないけれど、とアリスはウィンクした。

人の手の届く所にあるピュアクリスタルは採取を繰り返すせいで純度が低いものばかりで、加工しないと使えないものがほとんどのようだ。加工なしで力を発揮できるほど高純度のピュアクリスタルが欲しければ、命をかけて竜族や獣族のテリトリー内に入らなければならぬ。……だが、一般人の生きて帰れる確率はほぼ皆無に等しいらしい。

「ま、それは一般人だったら。の話なんだけどな。俺たちクリスタルマスターだとか、クリスタル採取を目的として仕事してる獣人族とかになると話は別だ」

「獣人族」。また新しい言葉が出てきて、アズは「異世界っぽい！ファンタジーの世界だ！」と1人ではしゃいでいた。

ゼノ曰く、この世界には主にアズたち「人族」と「竜族」、そして少ない割合で「獣族^{けもの}」と「獣人族^{じゅうじん}」に分類されるという。もちろん他の部族もいるらしいのだが、それは滅多に姿を現さないので一括りにはせず呼称で呼んでいるものがほとんどだそう。

「獣族」と「獣人族」は名前が似ていてややこしいと思いきや、名前の通りにまったく別の生き物に分類されている。

「獣族」は知能が高く、独立した個々の文化を持つ頭のいい獣たち。アズの世界に例えるなら、狼やらライオンなんかを指す。つまり普通の動物たちだ（とは表現するものの、アズの世界という「普通」とはまた少し微妙に違う姿をしていたり、まったく見たことのない姿をしていたりする）。

そして「獣人族」は、人と獣が合わさった姿をしているのが最大の特徴。人の姿に近いのに、頭に猫の耳が、お尻に尻尾が生えている、いわゆる動物の擬人化と言われている姿だったり、見た目も顔

も狼なのに、人のように二足歩行で歩いて人の服を着て人の言葉を話す驚くような姿だったり様々。

まさに異世界！まさにファンタジー！……な世界だった。

「アリスさんがまだ見たことない部族っているんですか？」

と聞いた瞬間におでこに不意打ちのデコピンを食らい、「あうつ」と悲鳴を上げておでこを押さえた。

「さん付けはやめて頂戴。なんだか背中がむずむずするのよね」

おでこをさすりながら「す、すみません」と謝ると、アリスは笑ってくれた。

「私がまだ見たことのない部族は……そうね、エルフはまだ一度も見ることがないの」

「エルフ！？妖精ですか！」

驚いて聞くと、「そう、妖精」と頷くアリス。……なんでもいるなあ、この世界って。

「一括りにエルフって言っても、いろんな種類がいるらしいの。けれど、人の愚かな行いに見切って姿を消して以来、人前に姿を現さなくなったと言われているわ」

「愚かな……行為？」

「戦争とか争いとか、同じ部族で何度も傷つけあって、殺しあって……エルフが呆れるのも無理はないわね」

そう言って、アリスは自嘲気味に笑った。

＊＊

「ここがエントランス。唯一、一般人の立ち入りが許可されているフロアよ」

そう言って案内されたのは、白く大きな神殿の中にあるとても広いフロアだった。真っ白な大理石が床一面に広がり、目の前にフロントのようなカウンターがあり、そこに黄色い制服を着た男女がたくさんの人を相手に受け答えをしている。

そのフロントの両脇に、緩やかな螺旋を描いて2階、3階、4階と階段が続き、上を見上げれば上段はすべて吹き抜けになっていた。天井はガラス張りで、空がより近く感じられる。太陽の光もたくさん注ぎ込み、室内だというのにそこら辺に鉢植えや花瓶が置かれ、そして太い柱に絡み付くようにして、樹が太陽を目指してたくさんの葉を広げている。

人々のざわめきに心踊らせつつ、ゼノとアリスから離れないように気を付けながら後をついていく。目に入る人すべてが人族で、獣人族は見当たらない。

——と、思っていたその時だった。

「あー、いたいた。だーんちょー!」

向こうからハツラツとした声と共に、ぱたぱたと駆け寄ってくる足音。2人の影からひよこつと顔を出して覗いて、アズは自分の目を疑った。

「ユリア。今日もお仕事お疲れさん」

立ち止ったゼノの元に走ってきたのは、アズが探していた獣人族の女の子だった。——しかも、アズの世界でも有名なあの猫耳娘。跳ね癖のある髪に埋もれるように上部左右にぴよこんと生えた三毛の三角耳に、瞳孔が縦に割れた猫のような切れ目。両頬から伸びる計6本の髭と猫みたいな逆三角の小さな鼻に、お尻から突き出てふらふらと動き回るふわふわの尻尾……。

本物の猫娘キター!!

アズは興奮のあまり、胸中で叫びまくっていた。

「お世話様々。はい、団長にリノ婆からラブレターさ」

ユリアと呼ばれた三毛猫娘は肩から斜めに下げている赤い鞆から1枚の手紙を取り出し、ゼノに手渡した。

「げ。婆さんかよ。たまには顔出させて?」

「さあね。あたいは手紙と荷物を運ぶだけが仕事だから。受け取りのハンコちょうだい」

にこつと笑うと犬歯が露わになって、そこがまた猫らしかった。

「彼女はユリア。セピア・ガーデンで配達員をしているの」

ふむふむとアリスの説明に頷いていると、ふいにユリアと目が合う。途端に彼女の縦長の瞳孔がきゅっと細くなった。

「んな？もしかして新メンバー？」

とたとたと小走りで近寄ってきて、ぐいっと顔を近づけてくる。あまりの急接近に内心たじろぎながらも「アズです、よろしくお願いします」と笑って見せた。

「あたい、獣人族猫科のユリアさ。ふくん、アズってゆうの。ま、あたい人族じゃないけど仲良くしてよ」

そう言って、ユリアは屈託のない笑みを浮かべて手を差し出してきた。

「もちろん！あたしの方こそよろしくね、ユリア」

手を握り返すと、ユリアはなぜか驚いたような顔をする。アズが不思議に思って首をかしげると、ユリアは「アズって変わってんね」とまた笑う。

変わってる？あたしが？

「普通の人族は、あたいら獣人族なんて握手したがないもんさ。ま、あたいは特に気にしないけど、アズは獣人族平気なんだ？」

「平気とかっていうか……会うの初めてだし」

「またまた」。アズは冗談が下手だな」

ケタケタと可笑しそうに笑うユリアを困ったように見て、ゼノになんとなく視線を向ける。先ほどのようにアズの正体を明かしてしまえばこの場が大混乱になることは目に見えているからだ。

するとゼノはそれに察してくれたようで、ユリアの額を指で突いて話を逸らしてくれた。

「ほら、いつまで仕事サボってんだ。まだ渡しに行く手紙も荷物もあるんだろ？」

「んなっ。サボってないわ！これは立ち話！まったく失礼な……」

突かれた額を押さえ頬を膨らませてユリアが踵を返すと、ぶんぶんと上下に激しく揺れる尻尾が目に入る。

確か猫が怒った時の動作だったような……と、アズは思わず笑ってしまった。

「んじゃまたね、アズ。こんどはヘタレ団長がいない時ね」

「うん！またね、ユリア」

互いに手を振って挨拶を交わしあう後ろで「え、ヘタレって俺のこと？」とアリスに聞いているゼノの声が聞こえた。

＊＊

階段を上りながら、ふとユリアの言っていた言葉を思い出し、アズは先に上っているアリスに話しかけた。

「あの、さっきユリアが言ってたことって……本当なんですか？」

「え？——ああ、あの事？」

アリスは思い出したように頷き、アズの隣に並んで小さな声で話してくれた。

「人族と見た目が違ってしまっただけで謂れない差別を受けたり、偏見のせいで獣人族と関わりあいたくないと思う人はたくさんいるわ。……というか、その割合がほとんどと言ってしまえるのだけど」

アリスは深く溜息をつき、「酷い世の中よね……」と悲しい顔をした。

見た目が違うだけで獣人族を差別し、対等な立場として扱わないというのがこの世界の姿だとアリスは言った。それはアズの世界と何も変わらない、酷く醜い人の偏見が生み出した差別の世界だった。

現実世界も、この異世界も……世界は隔たれているけれど、内面は何も違いはないのだと思うと、アズは無償に切なくなった。

「ユリアは本当にいい子だし、とても仕事に熱心で積極的よ。セピア・ガーデンの中では差別をするような心の狭い人はいないから、

あの子やほかの獣人族の子達はとても可愛がられているわ。きちんと向き合って接している私たちだからこそ、あの子たちのいいところをたくさん見出せるの。……傍にいて初めて解ることばかりだわ」

「……」

それを理解できない人族で溢れているこの世界で、彼らはどんな気持ちで日々を生きているのだろうか。アズにはわからなかったが、ユリアのあの笑顔を思い出すたびに、ここでの暮らしは彼女にとつてとても幸せなものなんだろうと思えた。

——そう、思いたかった。

「……アズ？」

氣遣わしげにアリスに名前を呼ばれたその時、上の階からバタバタと慌ただしく降りてくる足音が聞こえてきた。何かと顔を上げたアズの視界に飛び込んできたのは黒い制服を着た若い男性で、ゼノとアリスを見て「み、見つけた……！」と息を切らせて近寄ってきた。

「団長、副団長……やっと見つけましたよ」

「どうした、何事だ？」

ただ事ではない雰囲気を感じたゼノが口を開くと、男性は耳元に手をやって何度か頷き、

「申し訳ありません、少々問題が発生致しまして……至急指令室までお越しいただけますか？」

ゼノとアリスは互いに頷きあい、アリスはアズに向き直って困った顔をした。

「ごめんなさいアズ。私たち急用が入ってしまったて……」

「あ、あたしは大丈夫です！2人の用が終わるまで1人で待ってられますし……」

慌てて手を振ると、先にいたゼノが階段を下ってアズの前に立ち、アズの左手を取った。

「？」

「本当はもう少し後に渡す予定だったんだけど、まあ急用が入ったからな」

そう言って、アズの左手中指に金色に輝く綺麗な指輪を嵌めてくれた。青く澄んだサファイアのような石が埋め込まれた、細かい模様がたくさん入っているととても美しい装飾が施されている指輪だった。

「これはセピア・ガーデンのクリスタルマスターの証だ。ガーデン内の全フロアを歩くためにはこれが必要になるし、身分証明書の役割も果たす。だから肌身離さず付けているように。分かったか？」

「あ……はい、ありがとうございます」

アズが頷くと、「たぶん1時間くらいかかるから、その間に好きなように探索してみな」と言われた。

「ごめんなさいね、アズ。また後で会いましょう」

「はい。いつてらっしゃい」

頬を撫でられ、くすぐったい思いで首をすくめる。2人は男性の後に続いて階段を上がって行き、アズは見えなくなるまでその場に立って2人を見送った。

……さて、どうしようか。

好きなように探索してみな、と言うことは、要は色んな所に言ってもいいと言うことだ。

指輪を嵌めていれば一般人の入れない所にも行けるということであズの心は高鳴り、わくわくとした思いで階段を上り始める。

やっぱりここは2階から順に見て回ろう。1時間でガーデン内をすべて見て回ることはできないだろうけど、時間の許す限り歩き回ってみるのもいいかも。

うきうきとした足取りで階段を上っていると、突然エントランスから女性の黄色い悲鳴が聞こえた。

「わっ……何？」

驚いて手すりから落ちないように身を乗り出して覗いてみると、アズが通ってきた玄関口から現れた3人の姿が目に入る。エントランスにいた人々がその3人の前に道を作る所を見ると、一般人でないことがわかる。

「男の人？」

ここからだと言顔がよく見えないが、輪郭や格好からして3人とも男性だと分かる。相当の外観をしているのか、一般女性からの黄色い悲鳴は止まない。それどころか崇拜する溜息すら聞き取れる。

……一体何者？

アズは階段の上からエントランスを見下ろしたまま、興味津々に3人の行方を目で追うのだった。

10 気配（前書き）

最近めっきり更新が遅くなってしまう……。

それでもちよこちよこ覗きに来て下さる方々がいてくれて、「ああ、頑張ろう」と言う気持ちになりました^^

氷柱、更新します！（笑

10 気配

「まあ、見て。御三方が今お帰りになったわ」

2階へ続く階段からエントランスを見下ろしていたアズの頭上から女性の声が聞こえてくる。見上げると、アズと同じように階段の手すりから身を乗り出してエントランスを見ている2人の黒い制服を来た女性が目に入る。

「本当だ。三日前から見かけないと思ったら3人一緒に任務へ出ていたのね」

「仲がよろしいのねえ。羨ましいわ」

うつとりとした表情で女性が溜息をつき、「さ、仕事に戻りましたよ」と連れ立って階段を上っていく。アズはそんな2人を黙って見送り、眼下にもう一度視線を落とす。

御三方……仲がよろしい……任務……？任務ってなんだろう？

「あれ？」

エントランスを見ても先ほどの3人がいないことによく気付き、アズはキョロキョロと探し回る。さっきまで下にいたのに一体どこに……。エントランスにいる人々は次第に散り始め、自分たちの用事を済ませようと動き始めていたが、数人の女性はこちらの方を見ている……。

……ん？なんでこっち見てるの？

「そんなに身を乗り出したら危ないよ？」

声をかけられたのはその時だった。

「え？……わっ！」

肩越しに振り返ってから、慌てて手すりから体を戻す。別に驚くことでもないのだが、アズはなんとなく恥ずかしくなってスカートのすそを払った。

目の前、というかアズのいる位置からすると下になるのだが、1階から上がって来た3人の少年がいた。

先頭に完璧なまでの無表情の金髪少年。アズから見てもとても綺麗な容姿をしていて、どこことなく中性的な顔をしている。右側の揉み上げがとても長いのが特徴的で、動くたびにサラサラと心地よく揺れている。

そしてその後ろに並んで、ツンツンとした黒髪の東洋系の顔立ちをした少年に、茶髪の優しそうな表情をした西洋系の顔立ちの少年。その2人もとても整った顔立ちをしており、その3人がさっきまでエントランスにいた3人組だとすぐに分かった。

「スカート穿いた女子がそんなに前かがみになるのは感心しねえな」

「……口、笑ってるから」

にやにやと笑う黒髪の少年を茶髪の少年が半眼で突っ込む。金髪の少年はさっきから金色の双眸でじっと睨むようにアズを見たまま口を開かない。

「あ、はは。すみません……」

なんとなく居心地が悪くなったので苦笑いをしながら謝ると、茶髪の少年が笑いながら前で出てきた。

「謝らなくていいよ、君は何も悪くないんだから。……この階にいるってことは、クリスタルマスターなの？」

その問いに数秒考えを巡らせて、「はい、一応……」とまた苦笑する。

正確にはまだクリスタルを出せないのでクリスタルマスターとは言えないのだが、また大騒ぎをされると困るのであえて濁す。

「へえ、じゃあ新入りだな。……俺、ジーク・アロッソン。19歳。気兼ねなく「ジーク」って呼んでくれ」

と、黒髪の少年——ジークがにこっと爽やかな笑みを浮かべて手を差し出す。

「アズ・キサラギです。……えっと、もうすぐ17歳になります」

「17！年下か。うん、いいな」

何が「いい」のかよくわからないが、「ジークの事は気にしないでいいからね」と茶髪の少年がジークをどかして手を差し出してくる。

「俺はウィル・ハドソン。18歳。アズって呼んでもいい？」

「はい！よろしく願います！」

ウィルの優しい笑顔で安心して握手を交わす。そしてなんとなく流れるにアズとジーク、そしてウィルの3人の視線が金髪の少年の所へと集まり、

「……………なぜ俺を見る？」

「いや、普通に考えてお前の番だろ？」

腕を組んで眉を寄せ、思い切り迷惑そうな顔をした金髪の少年。ジークが溜息混じりに少年の肩に手を回し、ぐいっと自分の方へ引き寄せてアズににっと笑って見せた。

「こいつ、俺の昔馴染みのクラウド・リオベルト。こんな親父くさいしゃべり方してっけど俺と同じ年な」

「おい」

「自己紹介くらいきちんとしなよ、クラウド。それだからいつまで経っても皆に怖がられるんだよ」

ウィルに窘められ、不機嫌そうだったクラウドの表情がさらにキツイものになる。

「余計なお世話だ。…………部屋に帰る」

「あ」

ぱっとジークの腕を振り払い、クラウドは不機嫌そうな表情のまま

まアズの横を素通りしてそのまま上の階へと姿を消してしまった。
思わず啞然としたまま見送っていると、ジークが笑いながら頬をぽりぽりと掻いた。

「悪いな、めっちゃくちや無愛想な奴で。でも根はすっげえいい奴なんだ、許してやってくれな」

「人見知りなだけだんだ。人に慣れるまでに時間がかかったちゃうんだ。ごめんねアズ」

「あたし全然気にしてないんで大丈夫です。……ちょっと驚きましただけ」

へへ、とアズが笑うと、2人も顔を見合せて笑った。

どうやらあの無愛想なクラウドは本当に悪い人ではないようで、ジークとウィルが庇うようにフォローをしているのがその証拠。アズはまだクラウドの事は何も知らないが、無表情で無愛想だけどそこまで悪い気にはならなかった。

アズ1人がクラウドに嫌われているようならもちろん話は別だが。

「ガーデン内の案内は一通り終わってんの？」

頭の後ろで手を組んでジークが尋ねる。

「まだ途中です。ゼノとアリスに案内してもらってたんですけど、2階に上がる途中で黒い制服を着た男の人が……なんだっけ？ 指令室……に来てほしいって言ってる」

思い出しながら答えているアズの顔を見て、ジークとウィルは2

人して怪訝な顔をする。

「団長と副団長自ら案内？」

「2人が一緒になんて……アズって何者？」

「へ？」

そう言われても答えようがない。アズは返答に困って顎に手をやった。

……失言だっただろうか。あの2人がわざわざ新メンバーに園内を案内して回るなんてことは普通はしないようだし、言ってしまった後だから言い繕うのもなんだか逆に怪しまれてしまうだろうし……。

む、と変な唸り声を上げながら考えあぐねているアズを見て、ジークとウィルは肩をすくめて「ま、深くは追及しないけど」と言ってくれた。

「案内が途中なら、俺らが引き継いでやるけど」

な？とジークがウィルに笑いかけると、「うん、いいよ」とウィルも笑う。

「え、でも2人は任務帰りだって」

「別に3日くらいの任務じゃ疲れないって。俺たちタフだしな」

「ジークは無駄がつくくらいタフ過ぎるけどね。どっちかっていう

とクラウドスのが繊細な感じがするよ。俺は」

「そうかあ？……ま、せっかく歳の近い後輩が入ったんだ。気合入れて案内してやるよ」

「ありがとうございます！」

頭を下げてお礼を言うと、ウィルがくすくすと笑って「敬語やめてよ」と笑った。

「なんだが歳近い子に敬語使われると距離が遠くなる感じがするんだよね。なんていうの？他人行儀みたいな」

「ああー！それわかる！俺も敬語嫌いだ。年上に使うのは別にいいけど自分が使われるのぜってーヤダ！……ってことで今から敬語なし！」

びしっと指を指され、アズは目を白黒させながらも「は……じゃなくて、うん」としどろもどろに頷いた。年上に敬語なしとか結構歯がゆいものがある。アズはできるだけ気にしないように、自然になるように努めた。

「ゼノとアリスは1時間くらいで戻るって言ってたんだ。その間にここら辺を見て回ろうと思って……」

「ふうん。じゃあ手堅く2階から攻めようぜ」

ジークが先だって階段を上り、2階を指差した。

「1階は一般人が立ち入れる唯一のエントランスで、俺たちクリス

タルマスターの玄関でもある。で、2階からが多目的フロアになんだけど、まあ色々ありすぎるな、ここは」

「この神殿は全部で4階。1階がエントランス。一般の人はここで様々な依頼をクリスタルマスターに出せることが出来て、俺たちはそこで大きな任務から軽い仕事なんかを受けられる。2階が食堂や修練場、図書館や談話室とかがある多目的フロア。3階がクリスタルマスターや庭師、ここで働いている職員の人たちの部屋があるプライベートフロアで、4階が会議室や指令室、資料室とか研究室、任務に関わる仕事が出来るビジネスフロア。……大雑把に説明するとこんなもんかな」

「色々あるんだね」

大雑把に、とは言うものの、アズは右から左に聞き逃さないようにするので精いっぱいだった。外から見たときから大きな神殿だと思っただけだが、これだけ広いならまだ他にも施設はあるのだろう。この神殿以外にも、この大きな浮島に密接してくっついていて小さな浮島もいくつかあったのを覚えている。

「んで、ここ以外にも色々あって――」

先頭に立って説明しながら歩いているジークの背中を見ていたその時、不意に嫌な気配を感じてアズは足を止めた。ジークの声が遠ざかり、耳に入らなくなる。

「……アズ？」

立ち止ったアズを不思議に思ったウィルが後ろで同じように立ち止る。アズはそれに答えられず、今も感じ続けている異質な気配におびえて辺りを見回した。

どこからともなくじわじわと広がっている気配——それは、とても冷たくて思わず身震いしたくなるような感覚。その気配がゆっくりと広がる度に肌が泡立ち、鳥肌が止まらない。

なに、この嫌な感じ……。

自分の肩を抱きしめて震え続けているアズに2人は戸惑いの表情を浮かべ、ウィルがアズの肩にそっと手を置いた。

「大丈夫？ 寒いのか？」

「風邪か？ だったら医務室に連れてった方がいいんじゃないか？」

だがアズは首を何度も横に振る。これは風邪とかとは全然違う。

「ふ……2人は何も感じないのか？」

「感じる？……なんか感じるか？」

ジークがウィルに尋ねると、怪訝な顔をしながらウィルは首を横に振る。

……どうやらアズにしかこの気配を感じ取れていないようだった。そうこうしている間にもじわじわと気配が広がっていくのが手に取るようにわかる。

自分にしかわからないせいで酷く焦りを感じる。なにか嫌な事が起こりそうで……。

耳を劈くような警報がセピア・ガーデン内に鳴り響いたのは、その時だった。

「な、なに!？」

大きな音に驚いて肩をすくませる。アズとは対照的にジークとウィルは驚く様子はなかったが、顔つきがさっと険しいものへと変わる。どうやらただ事ではないようだ。

『緊急事態発生! 緊急事態発生! ガーデン内数か所にシャドウの存在を確認! ガーデン内にいるすべてのクリスタルマスターは直ちにシャドウの排除に向かえ! 非戦闘員及び一般人は速やかにエントランスの中央に展開される結界に避難せよ! 繰り返し……』

天井に付いている白い大きなスピーカーから切羽詰ったような男性の声。アズはそれを見上げ、胸に手をやった。

「シャドウ……」

ここに来てから何度が聞いた名前。影という意味だろうか、排除

ということは人に危害を加える生き物なのか、それ以外なのか……。

「(影……混沌の……?)」

アズはふと、セピアノスが言っていた言葉を思い出していた。混沌の影が溢れてしまうと、世界は破滅の一途を辿る、と。

ぼんやりとそんなことを考えていると、ウィルにぐっと肩を掴まれて我に返る。はっとしてウィルを見ると真剣な顔つきでアズを見ていた。

「アズ、今の放送聞こえたよね？」

「あ、う……うん」

「アズはまだ新米だし、今無理に戦うのは酷だと思う。だからアズは一般の人たちと一緒にエントランスに降りて結界の中で待ってていいね？」

有無を言わさぬ物言いに返す言葉もなく、アズは黙って頷いた。今すぐに戦えるわけでもなく、居てももちろん足手まといになってしまうだけ。

アズが頷くのを確認してウィルはジークの隣に立った。

「俺たちは3階に行こう。まだ非戦闘員が逃げ切れてないとまずいから」

「おう。——アズ、くれぐれもすっ転ぶなよ！」

「転ばないよ！ あたしこれでも運動神経だけはいいいんだから！」

ムキになるアズに笑って手を振り、2人は凄い速さで3階へと駆け上がっていった。アズはそれを最後まで見送らず、自分も踵を返して階段を一気に駆け降りた。

今の自分に出来ることは、とにかく邪魔にならないように避難する他ない。……悔しくないと言え、もちろん嘘になる。アズはセピアノスに選ばれたこの世界を救うセイレーンだと言うのに……。

「……っ」

アズは何もできないことへの怒りと悔しさに歯を食いしばり、階段を駆け下りていった。

11 シャドウ

先ほどの放送があつてから、ガーデン内にはけたたましい警報音が鳴り響いていた。階段を下りながらちらりとエントランスを見ると、全員が広いエントランスの中央にどんどん集まっている。

「今から結界を展開します！この結界は人族や獣人族、獣族であれば展開していても出入りは出来ますので落ち着いて集まってください！」

受付をしていた黄色い制服を着た人たちが一般人の人に呼び掛けている。よく見ると手になにかクリスタルのような物を掲げており、数十人ずつの間隔で一般人の周りに一人ずつ立っている。

全員が手に持っているクリスタルを頭上に掲げると足元から光が迸り、人と人を繋ぐように繋がって光の円を描いていく。そしてそのまま円が浮かび上がり、一瞬にして複雑な細かい模様が刻み込まれ、ドーム型に膨れ上がって優しい光と共に人々を包み込む。

もうこの世界にも慣れたつもりでいたが、あまりにもアズにとっては非現実的なことが起こったのでエントランスに気を取られてしまい、目の前をすっかり見ていなかったアズがはっと我に返った時には遅かった。

「「きゃあっ！」」

どんっ！と鈍い音がぶつかり合い、アズは反動で後ろに倒れそうになった。しかし持ち前の運動神経の良さと鋭い反射神経のおかげでとっさに手すりを掴んで難を逃れ、ぶつかってしまった相手の腕もがっしりと掴んでどうにか持ちこたえる。しかし、何か紙の束の

ような物がバサバサと階段と床一面に散らばってしまった。

ぶつかってしまった相手は無事だったので、とりあえずは安堵して深く息を吐き出した。

「すみません、前を見ていなくて……大丈夫ですか？」

腕を掴んだまま尋ねると、相手の少女はぼかんとした表情のままずれていた眼鏡をくいと上げてゆっくりと体勢を戻した。見たところアズと近い年齢だろうか、ゆるゆると癖のある長い髪を後ろで束ね、襟足をサイドにほんの少し残して前に流している。とても大人びた雰囲気を持つ少女だった。

「こ、こちらこそすみませんでした……。とてもすごい反射神経をお持ちなんですネ」

もう一度眼鏡をくいと直し、少女はまだ驚いた表情のまま口を開く。アズはつい照れて頭を掻いた。

「運動神経と反射神経いいことだけが取り柄なもので……」

と言っている最中に先ほどぶつかったときに散らばってしまった大量の紙が目に入り、アズは「あーっ！」と悲鳴を上げた。

「す、すみません！紙こんなになっちゃって……！」

「え？あ。大丈夫ですよ！」

慌てて屈み、階段に散乱している紙を拾うと、少女も床に散らばっている紙を拾い始める。表になっている紙に記されたものを見て、

アズは首をかしげた。

「これ……楽譜？」

「そうです、楽譜なんです」

アズは音楽があまり、というか全くの不得意で、音符も記号もろくに読めない。低音の「ド」はおたまじゃくし（とユズの前で言ったら爆笑されてしまった）に横に一本線が入っているので分かるのだが、他の音は全然わからなかった。

そんな音符がこれでもかというほどびっしりと記された楽譜を全部広い終え、少女に差し出した。

「音楽をやっている人なんですか？」

「趣味で……ちょっと。あ、申し遅れました。私はハンナ・ディオールと言います」

はにかみながら、ハンナは頭を下げた。

音楽のことで悩みでもあるのだろうか、ハンナがとても寂しそうな顔をしたのをアズは見逃さなかった。それがなぜか心に引っ掛かる。

「……あたしはアズ・キサラギです。一応クリスタルマスターなんですけど、色々あって避難する途中で……」

と言ったところで、ハンナが大事そうに胸に抱えている楽譜を持った手が目に入る。その左手の中指に光る指輪を見つけて瞬きをした。

「あ……」

ハンナもアズの言いたい事に気がついたのか、左手を動かして苦笑した。

「私も一応クリスタルマスターなんです。……とは言っても、何の役にも立たない落ちこぼれなんですけど」

「落ちこぼれ……?」

言っている意味がよくわからなくて首を傾げると、「そこのお2人! 早くこちらへ!」という男性の声。暗い表情で項垂れていたハンナの手を掴み、アズは結界へと連れて行った。

「えっ……あの、アズ?」

「一緒だね」

「え?」

「あたしも落ちこぼれなんだ。得意なのは体を動かすことだけ。それ以外は得意じゃないし、出来ないこともいっぱい。クリスタルも出せないし、皆に迷惑かけるだけ。——あたしたち、一緒だね」

肩越しに振り返ってにこっと笑うと、手を引かれるままだったハンナはぽかんとした表情になる。

「今はとりあえず避難しょ? それからでもいいでしょ?」

にこつと笑うと、暗い表情だったハンナの顔に少しだけ明るさが戻ってきた。

＊＊

「くっそ、一体どこに……！」

長い廊下をひたすら走りながらゼノは舌打ちをして辺りを見回す。緊急事態の警報が鳴り続けてもう5分以上経つ。早く見つけなければ。

「逃げ足の速い奴め」

罵った所で耳元にある無線機が鳴り、ゼノは「見つかったか？」と鋭く尋ねた。

『いいえ。残念ながら見つかったはいないわ。それに、シャドウが次から次へと湧いて出てきてあちこちで乱闘騒ぎよ』

「早く媒体を見つけないと洒落にならねえな、こりゃ……」

世界一安全であるはずこのセピア・ガーデンにシャドウが現れる

なんて、世界の不信感を煽ってしまうだけじゃなく一般人を巻き込んでしまっただけじゃなく、クリスタルマスターの名折れだ。なんとしてでも見つけ出さなければ。

『媒体もいいけれど、その大元も見つけて懲らしめてくれないと困る——きゃあっ!』

「アリス!？」

無線機の向こうでアリスの悲鳴が起こり、ゼノは足を止めて耳に無線機を押し付けた。

「おい!アリス!」

『だ……大丈夫よ、こっちには手練れのクリスタルマスターが居るから。急に飛びついてくるから驚いちゃっただけ』

「……頼むから驚かせんなよ」

『あら、心配してくれてるの?嬉しいけれど、私の心配なんていいから早く媒体とノワールを見つけて欲しいわね』

「分かってる。……けど、これだけのシャドウがいるってことは、もしかしたら媒体もそれなりにいるのかもしれないな」

『……可能性としては大きいけれど、それだったらすぐにでも見つかるはずでしょう?』

「そうなんだが……どうもシャドウたちの動きが読めなくてな。何を命令されたのかは知らないが、目的を持って動いているようには見

えない」

『……あるいは、目的を見失っている、とかね』

アリスの意味深な言葉にゼノは眉をひそめ、視線を床に落とす。

もしかしたら、と嫌な予感がよぎった。

＊＊

「ええっ！？ シャドウを知らないんですか！？」

結界の境界線ギリギリに2人で立って数分が過ぎた。周りの人々が怯えたような表情で囁きあう度に聞き取れる「シャドウ」という名前についてハンナに尋ねると、信じられないというような反応が返ってきた。

「うん、詳しくは知らない」

「信じられません……」

信じられないと言われても、知らないものは知らない。アズはち

よっただけムキになり、頬を膨らませた。

「シャドウってことは影なんですよ？それくらいわかるよ」

「え、まあ、影と言えば影なんですけど……なんの影かまでは知らない？」

「……うん、まあ」

言われて俯く。するとハンナが慌てたように「すみません」と謝った。

「知らないものは知りませんよね。どういう所で暮らしていたかはわかりませんが、きっとシャドウなんて現れないような人族が集まる街だったんでしょうね」

羨ましいです、と、ハンナはとても悲しそうな顔をする。

「えっと、シャドウはですね、人の心の闇から生み出される、闇が具現化した存在なんです」

「闇？」

「はい。喜怒哀楽に例えるなら、負の感情、と言えます。怒り、悲しみ、憎しみ、嫉妬……そんな負の感情が人の心の中で大きくなっていくと、その人の心のクリスタルに大きな隙間が生まれてしまうんです。そのままではシャドウが生まれるなんて事にはならないんですけど、その人の心に付け込んで心の隙間を無理やり押し開ける人たちがいるせいで、そこから闇が溢れだしてシャドウになってしまっているんです」

そこまで聞いて、ふと思当たる名前が出てくる。
シャドウと同じく、ゼノの口から聞いた名前――。

「……ノワール？」

「あ、知ってるんですか？」

「名前だけ……どういう人たちなのかわかんなくて」

首を振って答えると、ハンナは「もちろん悪い人たちですよ」と怒った表情になる。

「ノワールは、自分たちの心のクリスタル以外にも、異例に所持しているある特殊なクリスタルを持っているんです。それはブレイクリスタルと言って、人の心に直接干渉出来るという、使い方によってはとても恐ろしい力を秘めたクリスタルです」

そしてもちろん、ノワールはその力を悪用しているのだとハンナは言った。

「ブレイクリスタルの力を使って、心に隙間が開いている人に言葉巧みに囁きかけ、その人の心を見守るにします。そしてその隙間を無理やりこじ開け、そこからシャドウを生み出すんです」

「一体なんのために？」

「――このクリスタニウムを壊すために、らしいです」

ハンナが声を潜めて囁くように言った。

何もかもセピアノスの言っていた通りだった。

セピアノスが言っていた「混沌の影」がそのシャドウで、溢れださないようにするためにクリスタルマスターがいる。シャドウを放っておけば増え続け、溢れ返って世界が崩壊する――。

そこまではわかるのだが、どうも「溢れかえる」の意味を理解するのに苦しむ。どこからどこまでが「溢れて」しまうのか、臨界点はどこなのか。

ハンナに聞いてみても、困惑した顔で首を振られただけだった。

「それは……考えたこともないです。ただシャドウが世界に溢れれば、よくないことが起こるとしか」

「そっか……。じゃあさ、そのシャドウを出している人を見つけてどうにかすればシャドウは消えるの？」

「はい。ノワールに心を開かれてしまった人達を「媒体」と言い、クリスタルマスターの力でその媒体の心の隙間を閉じることが出来ます。そうして初めてシャドウを倒せることになります。いくらシャドウ単体を攻撃して消滅させても、シャドウが溢れている元をどうにかしないと……」

「なるほど。うん、理屈は分かったよ。要は、今このガーデン内にノワールとその媒体がいるってことだね？」

「そうなります……。けど、実はそれが一番問題なんです」

「？」

「今このガーデン内にノワールがいること自体おかしいんです。このセピア・ガーデンの周りには特殊な結界が張られています、ブレイクリスタルを持つノワールやシャドウは絶対に入れない仕組みになっています。……それなのに、一体どこから」

「……」

腕を組んで考えるハンナを見ていられず、アズは思わず目を逸らした。

思い当たる節があったからだ。

「きっと今頃みんなでノワールを探していると思うのですが……」

「――！」

目を逸らしたその先に何か見えたような気がして、アズは目を見開いた。ここからまっすぐ見える、壁と螺旋階段の下の方……。

日の光の届かないその暗く沈んだ陰に紛れるように、ゆっくりと床から這い出てくる真っ赤な二つの小さな光が、はっきりと見えた。

「……アズ？どうしたんです？」

アズの様子がおかしいことに気付いたのか、ハンナが首を傾げてアズの見ている方に振り向いた途端、耳を塞ぎたくなるような甲高い女性の悲鳴がエントランスに響き渡った。

「しゃ……シャドウだ！シャドウが来たぞ！」

1人の男性が叫ぶと、それに呼応するかのようにどよめきと悲鳴が次々に巻き起こる。みんながシャドウから少しでも離れようと一斉に反対側へ詰め寄り、「痛い！」とか「押さないで！」という悲鳴がいくつも上がった。

「……っ」

ぞわりぞわりと床から這い込めてくるシャドウは、本当に「影」だった。

人の形をしているようにも見えるが、それは到底人とは程遠い姿をしている。身長はアズよりも低いが、腕と見て取れる部分は恐ろしく長い。頭部はとても小さく、目はなく赤い2つの光がぼんやりと光っている。床に垂れ下がった腕を引きずりながら歩いてくる姿はホラー映画よりもリアルでとても気味が悪い。

体もうっすらと透けて見えるが、やはり影。向こう側の景色をそのままに、日にあたると余計に薄くなって見える。それでも赤く輝く目の光だけは妙に爛々としており、それがまた背筋を凍らせる。

「おかしいです……どうして襲ってこないの？」

「え？」

悪寒を押さえながら聞き返すと、ハンナはシャドウを指差す。

「シャドウは媒体の想いによって動く影です。心を無理やり開かれてしまった媒体は自我を失ってノワールの操り人形になり、ノワールに命令されたことをそのままシャドウに伝え、シャドウはそれに従って動くものなんですけど……今のシャドウは、なんだか動きが鈍いというか、何かを探しているというか……」

「探している……って——」

そこまで口に出して、アズはハンナからゆっくりとシャドウへ視線を向ける。

たぶん、シャドウが探しているのは「セイレーン」だ。

今この騒ぎを起こしている張本人であるノワールは、海の上でヴェールの尾によって叩き落とされたあの男の人で、その人は尋問をするために今セピア・ガーデンに連れて来られているはず。

「……逃げたんだ」

ぼそりと呟いて、ゼノとアリスが指令室に呼ばれた理由がようやくわかった。

ノワールの男はアズを「セイレーン」だと思っている。それは間違っていないが、今のアズは「セイレーン」としての力を発揮できていない普通の人間だ。恐らく相手はそれを知らず、「セイレーン」としてのアズを探すようシャドウに命令をしたに違いない。

そしているはずのないセイレーンを探して、シャドウは見つけることができずにああして彷徨っている。

「（ああ、これって結構まずいんじゃないのかな……）」

ゆっくりと、しかし確実に歩み寄ってくるシャドウと真っ向から対峙して、アズは引きつった笑みを浮かべた。

何がまずいかって、なんだか先ほどから胸のあたりがじんわりと熱を持ち始めているのだ。これはセピアノスの精神がアズの中に入ってきた、あの温かさと全く同じもの。

……あれだけ助けを求めた時には一切無反応だったのに、今になって覚醒を始めたのか。アズの心臓は耳元に聞こえるくらい大きく脈打っていて、次第に息が荒くなる。じわじわと胸が熱くなる。

——……アズ

セピアノスの声が聞こえた瞬間胸がカッと熱くなり、それと同時にふらふらと歩いていたシャドウがびくつと体を強張らせる。驚いて目を見開くと、シャドウの口と思しき場所に亀裂が入り、目と同じ真っ赤な色をした口腔をがばあっと開け、

「キキヤアアアアアアアッ！」

金属と金属をこすり合わせたような悪寒の走る鳴き声を上げ、一気に飛びかかってきた。

12 心の闇

シャドウ出現による緊急事態宣言がされてから10分――。
ところ変わって、ここ飼育室でも人々の混乱と不安に満ちた声で
埋め尽くされていた。

神殿内とこの飼育室で流された放送は違い、神殿では一般人・及び非戦闘員の避難場所はエントランスとされているが、飼育室内ではそこに結界が張られることになっている。

「(どうなっちゃうんだろうか……)」

そして、その結界の境界線際に立つ青年、竜専門調教師兼世話係りであるウィード・ザクネルは、なぜか鞍を胸に抱えてオロオロしていた。

人は地震や災害に見舞われた時などパニックに陥るとき、どんなに必要な無い物でもその時持っていた物を持って逃げてしまう場合がある。彼の場合が取り外していた最中の鞍なのであって、今必要がないと分かっているにもかかわらず抱えて結界に転がり込んだ。

その鞍を胸に抱きかかえ、ウィードは深々と溜息を漏らした。

人の慌てふためく様子に圧されてか、それとも本能的に感じ取っているのか。繋がれている竜たちも落ち着かない様子で動き回っている。

その中で特にウロウロとあっちへ行ったりこっちへ行ったりと自由に動き回る竜は鎖に繋がれておらず、結界の周りをぐるぐると周

り、そしてウィードの目の前で止まってはイライラ。
なぜなら鎖で繋いでよいのか悪いのか、ウィードの判断がつか
なかった為である。

『あー！なんだってこんな時に限ってシャドウなんだよ、もう！』

先ほどから何回目かになるセリフを叫んでは、その竜——確か名前はヴェール、と言っただろうか。イライラとまた飼育室内をのっしのっしと4足歩行で歩き回るのだった。

この世界で一番珍しく、発見例はないと言っても良いほどの幻の竜が今、ウィードの目の前にいた。

艶やかで見るものすべてを感嘆させる美しい毛並を持つ、激レア種のセブンスドラゴン。日の光に当たると体毛が虹のように7色に輝くことからこの名前が付けられた。実際に見たことはないが、その体毛で光を屈折させ自分の姿を景色の中に溶け込ませることができそうさ。

一般的に知られている竜族や特別な環境で生きている竜族なんかもそうだが、竜族は人の言葉を理解できるし話すこともできるが、だからと言って進んで人族の言葉を話したりしない。付き合いが長かったり、人との絆を深めると、シンクロと言う一種のテレパシー能力で意思疎通をして相手の脳に直接話しかけてくるものなのだが、先ほどからこのセブンスドラゴンはオープンに独り言を言いまくっている。それはもう言いたい放題に、まるで自分の小言を聞いてほしいように。もちろんそれに気づいて驚いているのはウィードだけではないようで、周りの人々からも興味深げな視線を向けられている。……本人（いや、本竜？）はその視線に気づいているのかいないのか、まったく気にすることなく歩き回っている。

他の竜族では見たことのない翼を持ち、ウィードの知る限りでは

一番小柄だと思える体軀は、それでも十分に筋肉がついており、立派に成人していると思われる。……仕事柄竜に関わる人が多いので、ついつい観察に夢中になってしまう。しかもあのセブンスドラゴンだ。今じっくり見ておかなければ次はいつ見ることができるのやら……。

「……はっ」

自分の食い入るような視線に気がついたのか、ヴェールとぼつちりと目があつて我に返る。目を細めてこちらを見つめるヴェールに若干ビビりながらも見つめあっていることに感激していると、

『それ』

ふいにヴェールが言葉を発した。しかも自分に対して。

……だが「それ」と言われて、ウィードの視線は自然と自分の抱えている鞍にいく。ヴェールも鞍の事を言っているようで、のっしのっしと近づいてきた。

『お前の持つてるそれ、クリスタル付いてる』

「え？ あ、はい。ついてます」

とっさに竜族相手に敬語になってしまったが、ウィードは構わず続けた。

「さっき帰っていらしたロージーさんの愛竜の鞍を取っていて――」

『それ俺に付けて』

「は？」

何を言うのかと聞き返すと、ヴェールはもう一度、今度ははっきりと『それを俺に付けてって言うてんの』と繰り返した。

『今アズとシンクロ切れちゃってるんだよね。……まったく何やってんだか、シンクロ切れるくらい動揺されてたんじゃこっちも落ちていてられないっての。俺生身のままじゃあの忌々しい結界越えられないんだよね。だからその「クリアクリスタル」が付いてる鞍俺に付けて』

ぬっと顔を結界ギリギリに近づけて首を傾げるヴェール。ウィードは持っている鞍に視線を落として「でも、俺……」と口ごもると、

『セイレーンが死んじゃってもいいわけ？』

その一言で、その場が一気にどよめいた。

『……別にあんたがさっさと鞍取り付けてさえくれればいいんだけどさ、ちんたらしているとホントにアズ殺されちゃうよ。ようやく現れた救世主を見殺しにしたら、あんたは世界中の生き物に呪われながら死んでい——』

「わかりました！ 付けさせて頂きます！」

ヴェールの言葉を最後まで聞くことなくウィードはぱつと拳手をして遮った。自分の所有している鞍ではないので考えあぐねていたのだが、そこまで言われてしまうと「人様の物だから付けていいのかわからない」などとは言えない。

『うむ、よろしい。じゃあ付けて』

「はっ、はい！」

この結界には竜族は入ることはおろか、触れることもできない。
ヴェールは境界線ギリギリに腰を下ろして付けろと目で言った。

『もしシャドウが来ても俺が蹴散らしてやるからとつと結界から
出てさっさと鞍付けて。ちんたらしていると食っちゃうよ』

「はいいい！」

酷い言われ様である。声は幼い少年のようにあどけないのだが、
話し方が酷く雑というか、乱暴というか。それに加えて碧い目が爛
々と光っており、「食っちゃうよ」はあながち冗談ではなさそうだ
ったのでウィードは急いで鞍を取り付けにかかった。

『一体どうなってんのさ。いつからここはシャドウがうろつく危な
い場所になっちゃったの？』

鞍のベルトを腹の下に通している所でそう問われ、ウィードは手
を休めずに返した。

「いえ、シャドウが現れたのは今日が初めてです。俺もここに勤め
させてもらってだいぶ経ちますけど、こんなこと今までなかったし
聞いたこともないですね」

『ふうーん』

「でも、シャドウが現れるってことはノワールもいるってことです

よね。一体どうやって侵入したのかな？俺はそっちのが気になるなあ……」

興味本位でそんなことを言ってみると、ウィードの視界に入っているヴェールの尾の先端がぴくりと動いた。不思議に思うも特に気にすることなく作業を続ける。

「例え結界の力を相殺できるクリアクリスタルを持っていたとしても、ブレイクリスタルを持っている限りは拒絶反応が出て入れないはずだし……でもでも、もしかしたらこのセピア・ガーデンにノワールの一員が先に潜伏してて、仲間を招き入れたっていう可能性も考えられますよね。――ヴェールさんはどう思います？」

『うーん、俺竜族だからそこんとこよく分かんないなあ』

……なんだか急に棒読み口調になったような。

ウィードが訝しげに瞬きをすると『終わった？』と聞かれた。頷いて鞍をぽんぽんと叩くと、ヴェールは待ってましたとばかりに腰を上げる。

『よおーし、これでようやくアズンところに行けるってもんだ。うん、ご苦労様。お前名前は？』

「えっ？あ、ウィード・ザクネルです」

反射的に気をつけの姿勢で答えると、ヴェールはふむふむと何度か頷いた。

『うん、ウィードね。覚えた。んじゃ行ってくる』

と、いつてらっしゃいと言おうとしたウィードの前から離れていき、そして翼を広げて一気に走り出した。

「き、気をつけて下さいね！」

後姿に向かってそう叫ぶと『自分の心配してろー』と返ってきた。なんとも素直じゃないが、ちらりとこちらを振り返って笑ってくれたような気がしてウィードは自然と顔が綻び、ゲートから空中へ飛び出して上空へ飛んでいくセブンスドラゴンを見えなくなるまで見送っていた。

＊＊

「きゃああっ！」

物凄い速さで飛びかかってきたシャドウが結界に体当たりをしてきたせいですぐ目の前の結界に激しい火花が飛び散り、電気のような光とバチバチという音に身を竦ませて悲鳴を上げる。その場にいる全員も次々と悲鳴を上げて、更に反対側へ押し合いながら必死に逃げようとする。

「アズ！」

ハンナに名前を呼ばれて腕を引っ張られ、結界付近から引き離される。

バチンという弾けるような音に続き、「ギイっ！」とシャドウが悲鳴を上げて結界から弾き飛ばされる。床にべしゃりと叩きつけられたシャドウはそれでもすぐに起き上がり、再び猛烈な体当たりを繰り返してきた。その度に火花と光が絶えず飛び散る。

人々の悲鳴を背に、アズは茫然とその場に立ち尽くしていた。

……明らかに自分が狙われている。

「アズ！？だいじょう——きゃあっ！」

背後で聞こえたハンナの悲鳴にはっと我に返る。しかし、

「あっ——」

振り返ろうとした瞬間、ドンッと背中を乱暴に押されて視界がぶれる。そのまま結界をすり抜けて尻餅をつき、わけの分からないまま茫然と相手を見上げた。

「……」

見たことのない男性だった。

目は暗く沈んだような虚ろな瞳をしていて、視点が定まっていな
い。頭もふらふらと左右に揺れていてとても正気であるようには見
えない。どうやらハンナもその男性に突き飛ばされたようでアズと
同じように尻餅について男性を見上げていた。

「見つけた」

また背後で声。ハスキーな男性の声に振り向くと、突然アズの周囲を囲むように床が黒ずみ、そこからシャドウが三体ぬつと這い出てくる。驚いて立ち上がると、いつの間にかアズの目の前に黒い服を着た男が立っていた。

「全然見つからないと思ったらこんな所で縮こまってたのかよ。おまけにクリスタルも出せないなんて……どうりで探しても見つからないはずだぜ」

首を振りながら深々と溜息をつく男になんともなく見覚えがある。アズは目を細めて男を凝視し——思い出した。

「海の上であっけなくヴェールに叩き落とされたノワール！」

「あっけなくねえ！お前の竜がチート過ぎるだけだろ！？」

びしっと指を指して叫ぶと、血相を変えて叫びかえすノワール。登場してすぐに叩き落とされたせいで中々思い出せなかったが、たしかあの灰色の竜に乗っていた男に間違いない。

「ったく。お前の竜のせいで散々だぜ。頭がくらくらするわ、海面に叩き付けられた背中が腫れて痛いわ、服は濡れるわ薄情者のレイズとラフィエルには置いて行かれるわ……。思い出しただけでもすっげえムカつくけど、そのおかげでこうして敵の本拠地に潜入できたわけだし良しとしてやる」

黒い前髪をかき上げて男が不敵に笑った。左手を差し出して指を

鳴らすと、床から更にシャドウが三体這い出てくる。アズは竦み上がって一歩後ろへ下がった。

「あの時の礼を今ここで返してやるよ、セイレーンモドキが」

途端に周囲でどよめきが起こる。背後で人々の喜びと不安と安堵の声が聞こえてくる。

「アズ……セイレーンだったの？」

ハンナの驚いたような声も聞こえ、アズは下唇を噛みしめて男を睨んだ。

……この男、確信犯だ。アズがクリスタルを出せないことを知ってて囁けている。

「そんな怖い顔すんなよ、セイレーンモドキ。悔しかったらクリスタルを出して反撃でもしてみろよ。——ほらっ！」

「!？」

男が手を横に薙ぐと、それを合図にシャドウが一斉に飛びかかってきた。顔を背けそうになって踏みとどまり、アズはキッとシャドウを睨み据えて覚悟を決めた——そっちがその気なら、あたしだってやってやる！

「——はあっ！」

腰の回転を加えて力いっぱい回し蹴りを繰り出すと、確実な手がたえ。実態のないはずのシャドウを思い切り蹴り飛ばしてアズは床に手をついた。

「は……はあああああ！？なにそれ！？そんなの有りかよ！」

相手にとっても予想外の出来事だったらしく、なんだか泣きそうな顔で叫ばれた。

……実際、アズ自身も絶対に蹴り飛ばせないと思っていたので、「あれ……蹴れた」とぼかんとした顔で呟いてしまった。

「ちいっ！おい、もつと出せ！」

……と、感動していたのもつかの間、男が叫ぶと更に増えて床からシャドウが湧いて現れた。「げ」と顔をしかめていると、背後でハンナの声が聞こえた。

「アズ！この人が媒体です！」

ぱつと振り返ると、ハンナは先ほど突き飛ばされた、あの正気でない男性を指差していた。

そういえば、心をこじ開けられた人はノワールの操り人形になって、クリスタルマスターでしか心を閉じることができないと言っていたような……。でも今のアズはまだクリスタルを出せないし心の閉じ方なんて分からなかった。

胸は熱く火照っているのに、まったくクリスタルを出せそうにない。セピアノスの声もいつの間にか消えてしまっている。

「ハンナ！その人の心閉じれる？」

「えっ……」

途端にハンナの顔に影が落ちる。アズが首を傾げると、

「私……ダメなんです……私じゃ出来ないんです！」

「ハンナ……？」

何か理由があるのだろう。ハンナは拳をぎゅっと握りしめ、俯いたまま続けた。

「私のクリスタルは何の役にも立たないんです！人を助けることも、人を癒すことも……戦うことだって出来ません！」

「へえ……」

背後で男が笑ったような気がして、アズは再び男に向き直る。

「いつまで持つか？こっちは無限に湧き出るシャドウ。そっちは……まあ、たかが知れてるけど」

そうこうしている間にも、アズと男の周囲に次々とシャドウが湧いて出てくる。いくらアズの蹴りが通用すると言っても数が違いすぎる。圧倒的にこちらが不利だった。

電車に出没する痴漢男や自分の足で逃げる窃盗犯とは違うのだ。このままだと本当に殺されてしまうかもしれない。

「（まだダメなの？……セピアノス）」

自分に何が足りないのか。それがクリスタルを出せない原因なのか。

——良くも悪くも、強い心の持ち主だけが、こうして心から想いを抽出してクリスタルとして具現化させることができる……。

アリスの言葉が脳裏に浮かぶ。

……強い心。

それはどういった意味で強いのか。

またはどういった想いで心が強くなるのか。

「(……ダメ、分からないよ)」

拳をぎゅっと握りしめ、アズは悔しくて男を睨むことしかできない。

「増援来られても困るし、そろそろ世界のために消えてもらおうか？ セイレーンモドキ」

男の顔に勝ち誇ったような笑みが浮かぶ。右手を高く頭上へ掲げ、

「——さあ、絶望しろ」

腕を振り下ろそうとした、その時だった。

「――!?」

何かを感じ取ったのか、男ははっと頭上を見上げるとその場から一氣に後ろに後退した。

瞬間、

ズドオオオンッ!!

上から何かが物凄い速さで落ちていて、さっきまで男の立っていた場所に突き刺さる。大理石が粉々に碎け、破片が辺り一面に盛大に飛び散る。アズは顔を腕で覆ってどうにか堪え、閉じていた目を開けて――目を見開いた。

「やり過ぎだクラウド! もっとスマートに出来ないのかよ!？」

「あいつの顔見てスマートになんか出来るか」

噴煙を振り払うようにぶん、と腕を振り、姿を現したのはクラウド・リオベルト。後に続いてジークも上から降ってきたが、着地するなりガミガミとクラウドに言い寄る。

当の本人は鬱陶しそうに顔をしかめ、自身の身長の2倍はあろう巨大な大剣を軽々と持ち上げて肩に担いで吐息した。……青く輝くその大剣は細かい所まで不思議な模様が彫られており、太く厳つい外観を柔らかく、尚且つ美しいものに魅せている。

あれが、クラウドの心が具現化したクリスタル……。なんて大きくて存在感があるんだろう。見ているだけで圧倒されてしまう。

言葉も出せずに突っ立っていると、男がクラウドに「ちっ」と盛大に舌打ちをする。

「一番見たくもねえ面したガキに合うとはなあ。俺もとことんツイてないぜ」

「それは良かったな、ゾイス。お前のその悪運もここまでだ。今日こそ監獄送りにしてやる」

男——ゾイスは、「はっ」と蔑むように鼻で笑った。

「顔とスペックが良いからってしゃしゃるなよ、小僧が。今日は盛大なイベントがあんだよ。お前なんかイチイチ構ってられっか！——やっちまえ！」

一斉に飛びかかってくるシャドウを睨み据え、クラウドは肩に担いでいた大剣をゆっくりと持ち上げる。そして、

「くだらない」

両手で柄を掴んで一閃。飛びかかってきたシャドウを一刀両断して、クラウドは吐き捨てた。

「ただのシャドウで俺を倒せると思ってるのか？」

床に叩き付けられたシャドウは反動で宙に浮きあがり、苦しげな

悲鳴を上げて霧のように霧散して消えてしまった。

しかし、シャドウを倒されてしまったというのにゾイスは顔色一つ変えずに首を振った。

「あー、怖い怖い。さすがはセピア・ガーデン屈指のエリートマスター様だ、マジで恐れ入ったぜ。……結界の中で縮こまってる役に立たない小娘とは大違いだな」

「！」

ゾイスがニヤリと笑って指差した先には床に座り込んだままのハンナの姿があった。ビクツと肩をすくめて胸の前で手を握り、カタカタと小さく震えている。

「あ……わ、わたし……」

睨むようなクラウドスの視線にたじろいでハンナが口を開くが、言葉にならない。そんなハンナを見下すようにクラウドスが見下ろし、冷たく言い放った。

「そこで何をしている？ お前はクリスタルマスターだろうが、ハンナ・デイオール」

「あ、う……」

「そこにいていいのは一般人と非戦闘員だけだ。お前はそのどちらでもない。何故クリスタルマスターとしての義務を果たさない？」

「……」

「ハンナ……」

今にも泣きそうなハンナの傍に腰を落として、ジークはなんとも言えない顔をする。そんなハンナにたたみ掛けるようにゾイスが口を開いた。

「別に気にしなくていいんだぜ。弱くて役に立たないならそこでじっと待ってればいいんだからなあ。なんでお前みたいなのがクリスタルマスターになれたんだか。不思議でしょうがないね」

「ちょっと!」

さすがに黙って聞いていられず、アズは睨み合うゾイスとクラウドの間に割って入った。途端にクラウドに怪訝な顔をされる。

「……何故結界の外にいる?」

……まさかとは思ってたけどコイツ、あたしの存在に気づいてなかった?
アズは半眼でクラウドを睨むのもそこそこに、ゾイスに向き直って人差し指をびしっと突きつけた。

「あんたはあたしに用があるんでしょ? ハンナも他の一般人の人たちもみんな関係ない!」

「クリスタルも出せない奴が何を偉そうに。お前の相手なんて後でいくらでもしてやるっての」

呆れたような顔でそう言われて「うっ」と言葉に詰まると、足元に突然影が広がったことに気づかず、反応が遅れてしまった。

「アズ、下！」

ジークの叫ぶ声と共にシャドウが足元に湧き上がり、長い手足に体を拘束されて身動きが取れなくなった。体に密着するシャドウは身震いするくらいに冷たく、ぞわぞわと鳥肌が止まらない。

「別にシャドウでお前らクリスタルマスターを倒せるなんて思っちゃいない。お前らの足止めは「そいつ」で充分だろ」

ニヤリと意地悪い笑みを浮かべ、ゾイスがずっと右の手のひらをクラウスに向かって差し出した。するとそこに赤黒いもやを纏った小さなクリスタルが現れる。

「お前に感謝するぜ、小僧。おかげでクリスタルマスターを手駒にできた」

「……！ ジーク！ 離れろ！」

クラウドが血相を変えてジークに向き直るが、ジークはすでにハンナから距離を取って結界の外に避難していた。……愕然とした表情で目を見開き、ハンナを凝視していた。

俯いたままだったハンナが、ゆっくりと立ち上がる。

「さあ、お前の本当の力を奴らに見せてやれ」

眩くようなゾイスの声に促され、俯いていたハンナの顔が正面を向く。

虚ろで空虚な瞳が赤く輝き、真っ直ぐにクラウドを見据える。

「ハンナ……」

もう声も届かないのだろうか。ハンナは虚ろな表情のまま自分の胸にそっと手を当て、

「――奏でて。ファルシオン・ハーブ幻想の豎琴」

静かな、けれどはつきりと聞き取れるくらい大きな声で、呟いた。

12 心の闇（後書き）

ようやく更新できました。

12話目にしてやっとここまでできた……。

次のお話でアズの本領が発揮される！……はず^^；笑

13 覚醒

『やっぱりゼノの言うとおり。ゾイスの奴、どうやらエントランス付近に隠れて張り込んでみたい。今ウィルから連絡があったの』

「……ったく。ホントいやらしい奴だな。……リオン、そっちの状況を簡潔に説明してくれ」

指令室から資料室へ向かう途中。

ゼノは自身のクリスタルである巨大な弓——ホーリーアロー聖なる追弓を出現させたまま足早に廊下を歩いていった。アリスや他のメンバーがいる指令室にもシャドウは居たが、アリスの言うとおり、手練れのクリスタルマスターがいたので問題なかった。

セピア・ガーデンのすべての管理を国から任されている団長足る者、ガーデン内の隅々まで状況を把握しておく必要がある。……今の状況が状況だけに、だからこそ冷静に対処しなければならない。

エントランスには今、尋問し損ねたノワールの1人——ゾイスがクラウドと対峙しているという報告が入っている。その場には結界に避難している大勢の一般人と非戦闘員がいるのだが……結界内にいたとしても安心はできない。

そして何より、そこにはアズがいる。

まだクリスタルを出せないであろう彼女は、不幸にもゾイスの標的になってしまった。クリスタルが出せないと分かれば、奴は嬉々としてセイレーンであるアズを殺しかねない。

それでもクラウドがゾイスと対峙しているならば、まだ勝機はあ

る。

ゼノは自分にそう言い聞かせ、最後の確認先である監獄塔の看守長に連絡を取っていた。

『こっちはまったく問題ないね。なにせあたしと姉さんが居るんだもの。……あ、でもちょこつとだけ問題が』

「なんだ？」

『……この騒ぎに乗じて逃げ出した脱獄者が今まさに姉さんに殺されちゃいそうなんだけど、止めた方がいい？』

「当たり前だ！即刻止めろ！」

血相を変えて通信機に向かって怒鳴ると『だよね、あははは……』という疲れたような返答が返ってくる。ゼノも眉間に手を当てて深く溜息。

怒鳴っておきながらも、あんな狂氣的な姉をもっているリオンに
つい同情してしまう。

今更ながら、そういうばりオンの声の後ろで何かを鞭打つような音と甲高い女性の笑う声が聞こえていたような……。思い直して身震いした。

『姉さん！殺しちゃ駄目だってば！それ以上やったら本当に死んじやうから！』

『えー？だあーいじようぶよお。このくらいじゃ死なないわよ、タ

フだものねえ？』

リオンの声の向こうに、くぐもって聞こえるもう一つの声。猫なで声のような、甘ったるいようなその話し方の後に、鞭打つ音と男性の断末魔のような悲鳴。――ゼノは顔をしかめてイヤホンを耳から遠ざけた。

『あれだけ脱獄しちゃだーめ？って言ったのにい。先に約束破ったこの豚野郎がいけないのよお？』

そう言っ、また鞭打つ音と男性の断末魔のような悲鳴が一緒になって聞こえてくる。

本日何度目になるかも分からないほどついた溜息をまた漏らし、ゼノはイヤホンを耳に付け直したところで突然通信機にノイズが混じった。

『――ノ、ゼノ、ゼノ！聞こえる？応答してちょうだい！』

アリスの切羽詰ったような声が横から割り込む。驚いて「どうした！？」と答えると、信じられない話が入ってきた。

『たった今エントランスにいるジークから連絡があつて……ハンナがつ……ハンナがゾイスに心を開かれてしまったつて！』

「なっ……！」

『あの子のクリスタルを悪用されてしまつては不味いわ！ゼノ――』

「ああ、分かつてる！」

アリスの話最後まで聞くことなく、ゼノは全力で走り出す。

前々からハンナの様子がおかしいということに気づいていながらも何もしてやれなかった自分に責任がある。ゼノはギリツと歯を噛みしめた。

自分自身に、そして自分のクリスタルに存在価値を見出せないでいたハンナー——もしかしたら、このガーデン内で一番の潜在能力を秘めているかもしれないというのに、彼女は自分自身の居場所を見つけれないでいた。

「（間に合ってくれ——！）」

あまりにも走ることに必死だったせいで、窓の外を横切った影に気づけなかった。

＊＊

それは、とても悲しくて、辛くて、苦しくなるような音だった。

虚ろな表情のまま、ハンナは自身のクリスタル——フアルシオンハープ幻想の豎琴を

具現化させて静かに弦を弾いている。細く色白の指に弾かれるたび、ファルシオンハープ幻想の豎琴はアズの心を沈み込ませるような悲しい旋律を奏で、戦意を奪っていく。

ゼノやクラウドスのクリスタルはあんなにも優しげな青い輝きを放っていたというのに、ハンナの心のクリスタルは赤黒いもやを纏っている闇のような紫色になってしまった。これが、あのブレイクリスタルのせいだということは明らかだった。

音楽や楽器をほとんど知らないアズでも教科書の中なら見たことはある弦楽器――ハープ。ファルシオンハープ幻想の豎琴は片手で持って弦を弾くタイプのものではなく、椅子に座って奏するという大きめのハープの形をしていた。種類や名前は全然分からないが、全長は目測で120、130センチほど。椅子とハープがくっ付いていて、ハンナが腰かけている椅子もクリスタルの一部のようなだった。

「いい音出してくれるじゃねえか。見直したぜ」

聞き入るように目を閉じていたゾイスがうつとりとした口調で呟く。アズはハンナの奏でる音色にくらくらしながらゾイスを視界の横に捉える。

「こんなことならもっと早く口説くんだったな。？お前にはノワールの方が向いてる？ってな」

「何をくだらないことを……」

床に座り込んでしまったクラウドスが苦しげに呻く。見れば、クラウドスとジークだけでなく、ゾイスと媒体以外のすべての人々が床に座り込んでしまっている。床に手について項垂れている人、俯せに

倒れこんで悶えている人、啜り泣いている人……。アズでさえも苦しくてうまく息ができない。

これが、ハンナのクリスタルの力……？

「くだらないことなんてねえさ。こんなに人の心を驚掴みにできるんだ、相当のもんだろ？」

ゾイスがくっくつと嬉しそうに笑うと、ふいに頭上に影が落ちる。アズが驚いて見上げると、ガラス張りの天井に黒い影がもう一度横切り――、

耳を劈くような轟音と共に派手な音を立てて盛大に割れた。

「!？」

「お、来た来た」

アズと同じように天井を見上げていたゾイスが嬉しそうに笑う。飛散したガラスの破片が降って来ない場所に移動させられて見ていると、ヴェールに叩き落とされたあの灰色の竜が風圧を巻き起こしながらゾイスの目の前に降り立つ。

竜は鎌首をもたげ、アズを見るなり鋭い牙をむき出して「グルルル……」と唸り声を上げた。

「そう急ぐな、ギルネ。こいつを上に乗んだらお前の好きにさせてやる」

ぞっとするような事を言われて目を見開く。ゾイスはアズに絡み

付いているシャドウに顎でしゃくって「乗せろ」と合図。途端に体を軽々と持ち上げられ、竜の背中に乗せられた。

「おっと。忘れてた」

竜に乗る途中の体勢のままゾイスが床にへばってクリスタルが消えてしまったクラウドに顔だけ向け、ヒラヒラと手を振った。

「お前らはそこで這いつくばって世界の終りを見てるといい。殺す所を見せられなくて残念だけど、ギルネの事を考えると室内より外の方がいいんでね。悪いな」

まったく悪いと思っていけない口ぶりでそう言い、竜に乗り込んで飛び上がる。

「アズ……」

床に項垂れていたジークが苦しげに呟く。飛び立った竜はぐんぐん上に上り、無残に割れてしまった天井ガラスの穴をぐり抜けて外へ出た。

暖かい風が、アズの頬を優しく撫でる。

この展開はなんなんだろう？

異世界へ来てすぐにあたしは殺されてしまうのだろうか。

いつもと変わらない青い空を仰ぎ、あまりにも非現実的な展開にアズは胸中で吐息した。

なんだかとても変な感じがする。本当に自分は死ぬのかとか、これは夢なんじゃないのか、とか。

世界はいつもと何も変わらないのに、自分は本当に死ぬのだろうか。殺されるのだろうか。

——それは、なんだか間違っているような気がして。

「よし、離せ」

シャドウの拘束が緩んだかと思うと背中を強く押され、

「ひゃっ——！」

竜から突き落とされて一転、奇跡的にもそんなに高い位置ではなかったのかうまく着地できた。

「ホントにお前、ただの女子高生かよ」

疑わしげに問われても言い返さず、アズは立ちあがって周りを見渡した。

白い床——というのは違って、手すりや椅子が設置されていることから、ここはセピア・ガーデン本殿の屋上だと思われる。ガラス天井は屋上だとガラス床になっていたらしい。……今は跡形もなく割れてしまっているけれど。

「眺めが良くて最後のひと時を過ごすにはもってこいだろ？ よーく拝んどけよ、この醜くて腐りきった汚らしい世界をな」

竜が降り立ち、その背からゾイスがひらりと滑り降りる。

「グルルル……」

「ん？　そうか、待ち切れないか。――じゃあ始めるか」

竜の背をぼんぼんと叩き、ゾイスはニヤリと笑った。

「恨むならお前を選んだセピアノスを恨みな、セイレーン」

そして、ゾイスが竜をばん！と力強く叩いた。それを待っていたかのように竜は雄々しい雄たけびを上げて、地を蹴り一気に突進してきた。大きく開かれた口の中には鋭い牙がびっしりと生えている。

「――っ！」

いくらアズでもあの巨体を避けることはできない。しかし避けなければ確実に食い殺されてしまう――。

意を決して身を屈めた、その時だった。

『ちよおつと待ったあああああああああー！！！！』

聞き覚えのある声がどこからともなく聞こえ、アズだけでなくゾイスも一緒になってぱつと辺りを見回す。

瞬間、

「ガアアアアアッ！！」

「ギルネ！？」

竜が悲鳴を上げながら体当たりでも食らったように突然真横に吹っ飛び、アズの視界から消えてしまった。驚いて2、3秒放心してから竜の吹っ飛んだ方を見ると、鱗が擦れて摩擦が起き、白い大理石に灰色の線を引いて10メートルほどの所で伸びている竜の姿があった。

「は……？」

ゾイスは完全に理解できていないようだが、アズには分かっていた。こんな時、アズを助けてくれる相棒は――、

『ド三流が！今度こそ完全に再起不能にしてやる！』

アズの目の前の景色が揺らめき、ヴェールが姿を現した。翼を大きく広げてアズの傍に歩み寄ると、とても不機嫌そうに口を開いた。

『勝手にシンクロ切らないでよね。まったく何してんだか』

「あたしのせいじゃないよ」

むっつりむくれて答えると、『ま、それもそうだ』と言ってることがよくわからない返答。窮地で助けに来てくれたヴェールに思わず顔が綻ぶと、『ま、無事そうで何より』とヴェールもそっぽを向いてそんなことを言った。

「っ！また出やがったな、セブンスドラゴンが」

『やっぱお前か。竜が三流なら飼い主も三流だな』

はっ、と鼻であざ笑うと、ゾイスの顔が見る見るうちに真っ赤になっっていく。

「んだとコラァ！……おいギルネ、いつまで伸びてんだ！？リベンジかませ！」

ゾイスが叫ぶと伸びていたギルネが首を振りながらのっそりと起き上がる。『ちっ、タフな奴』とヴェールが舌打ちをするも、確かに耐久性が高い。ぴんぴんしている、というほどでもないが、これと言って深くダメージを与えられた様子でもない。

『あいつは俺が行く。アズはアズで頑張って』

「え？」

『……もう大丈夫でしょ？何があったんだか知らないけど、アズの心、すごく変わった』

「……」

ギルネが翼を広げて飛び立ったのを合図に、ヴェールも地を蹴って高く空へ舞い上がった。

空で激しくぶつかり合う2頭の竜を見上げ、アズはそっと胸に手を当てる。

先ほどからいろいろと考えていた。

クリスタルの事、心の強さの事、想いの事、……そして、ハンナの事。

どういう事情があっただかは分からない。けれど、ハンナはノワールに心の隙を作ってしまうくらいに追い込まれていた。

自分は役に立たないと、誰も救えないと自分で自分の心に蓋をして、誰にも話せないでいたのだろうか。

そこを付け込まれて、ハンナの心は無理やり開けられてしまった。

ハンナが人々を苦しめる音色を奏でている様を見て、こんなの絶対に間違っていると思った。

こんなの、ハンナがしたがつっていたことじゃない――。

――アズ

目を閉じると、頭の中で囁くようなセピアノスの声が聞こえた。
胸がじんわりと暖かくなる。

――その想いが、貴女の力となる

胸の前で右手をゆっくりと握りしめる。

今、心の底からハンナを助けたい、力になりたい、と思っている。

「これが――」

この想いが。

？誰かを助けたい？と思う、この想いが。

——貴女の方となるのです

「——うん。行こう、セピアノス」

——今の貴女なら大丈夫……。共に、行きましょう

ずっと目を開け、目の前にいるゾイスをまっすぐに見据え、

「天翔あまかける——戦場ヴァルキリアの女神」

胸からの溢れんばかりの光に包まれ、アズは両手を広げて空を仰いだ。

大丈夫、あたしなら出来る。絶対に救える。

想いが力に変わるこの世界なら、絶対にあたしは負けない。

誰かを助け、守り、癒せるだけの力があれば、どんな人だって必

ず助けられる。

助けてみせる――。

＊＊

眼下に広がる光景に、思わず言葉を失った。

エントランスに張られている結界の中で人々が地にひれ伏し、苦しそうに悶え苦しんでいる。あのクラウスやジークでさえも戦意を失ってしまったようで、クリスタルは消えてしまっていた。

4階にいるゼノでさえ、どうにか耐えていられる状態だった。

「ハンナ……」

結界の境界線の手前で、滅多にゼノたちの前に出すことがなかった彼女のクリスタル、幻想のファンタジック堅琴を奏で、人々の心を音色で奪っていく。

今すぐにも駆けつきたい衝動を必死で押さえ、屋上から溢れる光に導かれるまま一気に階段を駆け上がって屋上に出た。

ドアを開け放って前につんのめりながらどうにか踏みとどまって目の当たりにした光景に、ゼノはただ目を見開くばかり。

セピア・ガーデンを包み込むほどに溢れていた光が一気に凝縮し、弾けて光の粒子となって空に舞い上がる。その光のあった場所に、1人の少女が佇んでいた。

3対の、美しくも神々しい純白の翼をその背に生やして。

「……」

言葉が出ない。というか、どう言葉に表しているのかわからない。ゼノは固まったまま覚醒したアズを見つめた。

「……んだよ、こんな時に覚醒するって……そんなの有るかよ」

引きつった笑みを浮かべているゾイスが呟く。

その声が聞こえたのか、閉じられていたアズの目が開かれた。

竜のように瞳孔が縦に割れた、おうごんいろ黄金色に輝く瞳。

以前一度だけ見たセピアノスの双眸とまったく同じだった。

「——ちっ！」

ゾイスが盛大に舌打ちをして胸に手を当てる。しかし間髪入れずにアズが動き、腕をクロスさせて背に生えている1対の翼に手を当て——掴んで引き抜いた。

光と共に引き抜かれた翼は双剣へと姿を変え、アズの両手に収まる。

翼を象った装飾が美しい、とても長い双剣だった。

「——くだ降せ！」

ゾイスの胸から赤い光が輝き、目の前に巨大な斧として具現化した。柄を掴んで振りかぶり、双剣を構えて一気に距離を詰めてきたアズに向かって勢いよく振り下ろす。

しかし、アズは双剣を目の前でクロスさせて振り下ろされた斧を

見事に受け止める。

「「え!？」」

ゾイスとゼノがそろって驚きの声を上げ、振り下ろした張本人は焦った表情で斧に体重を加えてさらに押し付ける。しかしアズはびくともせず、黄金色の双眸を細め、細い腕に力を入れてゾイスの斧を力で弾き返した。

「おわっ！」

弾かれた斧に体を持って行かれたせいで後ろにたたらを踏んで隙だらけになったゾイスの鳩尾に、アズは見ているゼノが恐ろしくなるくらいの無表情で何の躊躇なく鋭い蹴りを食らわせた。

声にならない詰まった悲鳴をあげ、ゾイスは5、6メートルほど吹っ飛んで大理石に叩き付けられた。気絶したのか、吹っ飛ばされた拍子に手放した斧が赤い光と共に消え失せた。

「……」

あまりにもあっけない終わり方だった。

あんな細い腕のどこに、大人の男をも弾き返す力があるのか。

アズはしばらく気絶しているゾイスを無表情で見下ろしていたが、双剣を翼に戻すと踵を返してガラス床の方へと歩いていく。ゼノに気づいているのかいないのか定かではないが、アズはこちらを一度も見ることなく翼を広げてガラス床から飛び降りてゼノの視界から消えてしまった。

あれが、アズのクリスタルの力――。

速さも力強さも耐久性も、何もかもがずば抜けて高すぎる。それに、あの翼……1対が双剣になったということは、他の2対の翼も何らかの形状に変わるかもしれない。

強すぎる力は体に何らかの影響を及ぼしかねない――。

セイレーンとしての覚醒を喜ぶべきなのに、とても樂觀視できない。

「……」

顎に手を当ててそんなことを考えていると、何やら頭上から大きなものが降ってくるような「ヒュルルルル……」という風を切る音が聞こえて、

「ん？」

と空を仰いだ瞬間、ゼノは頭上から降ってくる黒い影がどんどん大きくなっていく様に顔を真っ青にし、

「どわあああああっ！」

全力で緊急回避した。

ずどおおんっ！という屋上を揺るがすほどの震動と共に大理石を粉々に吹き飛ばし、落ちてきたそれを見て愕然。ゾイスと共にセピア・ガーデンに連れてきたゾイスの愛竜、ギルネだった。

『ありや。下にいたの？よく生きてたね』

みつともなく尻餅をついたまま空を見上げると、風圧を巻き上げながらゆっくりとヴェールが降りてきた。体中に細かな傷があることから、ギルネと戦っていたことが見て取れる。ゼノは立ち上がるのもそこそこにヴェールに駆け寄って――彼の顔を見てぎょっとした。

口の周りに、べっとりと大量の血がこびりついていた。

「お前こそ怪我しているじゃないか！」

『こんなの怪我のうちに入らないし、ほとんどが返り血だから。噛みつきまくってたらこんなになっちゃった』

ふとギルネを見れば、体のあちこちで鱗が無残にも剥がされ、肉も食いちぎられている。だから口が血まみれだったのか。

「殺したのか？」

『いや？殺すとアズがうるさいと思ってとどめは刺してないよ。……それよりアズは？』

キョロキョロと辺りを見回してヴェール。

ゼノは割れているガラス床を指差し、「降りて行った」と付け足した。

『ふうん……。ま、俺の出番はここまでかな』

「お前は知ってたのか？アズの覚醒が近いって」

『まあね。セピアノスの気配が大きくなってたからそうじゃないか

なつて。さすがは俺の相棒だよね』

「……はは、そうだな」

苦笑して、ゼノはガラス床を見つめる。

あとは、ハンナの心を取り戻すだけ――。

「……う、げほっ」

後ろでゾイスが動く気配がし、ゼノは静かに聖なる追弓^{ホーリーアロー}を具現化させた。

14 一難去って

視界いっぱい広がる大理石の床と、床に手をついている自分の腕。……この腕は、いつからこんなにも無力になってしまったのか。自分自身に幻滅して、クラウドは歯を食いしばった。

クラウドの目の前、幻想のファルシオンハーブ豎琴を奏でているハンナの顔を下から見上げ、思わず目を逸らす。……自分の失言が招いた結果に、どうしようもなく居た堪れない悔しい思いが胸を突く。

「クラウドス……やべえよ、どうにかしねえと」

床に這いつくばったジークが苦しげに呻くも、完全に体が言うことをきかないようだ。クラウド自身も幻想のファルシオンハーブ豎琴の旋律に毒され、立ち上がることはおろか体を起こすこともできない。

これが、心を解き放たれたハンナのクリスタルの力。

初めて任務を共にしたときは、あんなにも無力で頼りない存在だったというのに……。

頭上に輝かしい光が現れたのは、その時だった。

「……？」

ぎこちない動作でどうにか首を動かして頭上を見上げ——目を見開く。

ジークも同じような表情になった。

空から、天使が舞い降りたかと思った。

大袈裟な表現かもしれないが、彼女の姿はまさに天使をも思わせる美しい3対の白い翼をその背に生やしていた。その黄金色に輝く瞳を悲しげに伏せ、降り注ぐ日の光と共にゆっくりと降りてきた。

それを目の当たりにした人々の口から、感嘆とも崇拜とも取れる溜息がそこかしこで上がる。

結界の周りを徘徊していたシャドウが反応し、ぞろぞろと彼女の前へと集まっていく。しかしシャドウなどに構うことなく、地に降り立った彼女は迷いのない足取りでまっすぐハンナと媒体の元へと向かていく。

シャドウも飛び掛かることなく、光を恐れるように一定の距離を開けてアズの後ろを恨めしそうにぞぞぞ、とついていく。

「――！」

近づいてくる気配に気づいたのか、目を開けて虚ろな表情のまま

顔を上げ——目を見開いた。表情のなかったハンナの顔に、見る見るうちに恐怖とも畏怖とも取れる影が刻み込まれていく。小刻みに顔を振り、ハンナは目に涙を貯めてアズを見上げた。

「ハンナ……」

アズが悲しげに問いかけると、彼女は首を振り続けた。

「あ……あたし、こんなことしたくないの……やりたくないの……なのに体が言うことをきいてくれないの……あたしの体なのに……みんなをこんなに苦しめて……」

すると、それを聞いたアズの顔から悲しげな表情が消え、とても嬉しそうに微笑んでハンナの前に片膝を付いて彼女を見上げた。

「やっぱり！あたしは絶対にそう思ってたよ。ハンナはこんなことしたくないはずだ、これがハンナの本当の力な訳がない——って。ゾイスが言ってた事、信じたくなかったの」

だから、ハンナを信じてよかった。

アズはそういうと、もう一度嬉しそうに微笑んだ。

「う……」

途端にハンナの目から大粒の涙がボロボロと零れ落ちる。いつの

間にか幻想の豎琴を奏でる指も動きを止めていて、自分の体に力が戻りつつあることを実感する。

「……」

こんなことがあるのだろうか。

クリスタルマスターがノワールによって心をこじ開けられてしまふという事例は前にもあった。短時間だったとはいえ、ノワールに操られて完全に自我を失っていたというのに、何故ハンナは理性を保っているのだろうか。アズが現れるまでは人形の如くただ黙って幻想の豎琴を奏でただけだというのに。

アズは、彼女にとって自我を取り戻せるほどかけがえのない存在なのか。

あるいは、クラウドが思っていた以上にハンナの心は強かったのか。

「辛いよね？ すぐ元に戻してあげる」

そう言うと、アズはすっと立ち上がり、左手でハンナの胸の前に、右手で媒体の胸の前にそれぞれ手のひらを差し出す。するとそこへ小さな光が集中して、光の線となって両者の胸を突きぬけた。

ハンナと媒体の背から、赤黒いもやが溢れるように流れ出て、霧のように霧散して消えて行った。

媒体だった男性が意識を手放して倒れこむ所をジークが抱き留め、安堵の溜息。結界の外を徘徊していたシャドウたちも媒体がいなくなったことでこちらにも霧散して消えて行った。

ハンナも一瞬だけふらついたが、なんとか耐えて幻想の豎琴ファルシオンハープに寄りかかって深く息をはきだした。赤黒いもやを払ったことによって、幻想の豎琴が本来の姿を取り戻す。

「ふう……」

役目を終えたことで気が緩んだのか、疲れたように息をつくとアズの背に生えていた翼が光の粒子となって消えた。崩れるように床に座り込み、額の汗をぬぐう。

「なんかずつごく体がだるいや」

「きつと、長い時間具現化することに慣れてないせいですね」

だいぶ落ち着きを取り戻したハンナが言う。そして、何かを思いついたようにアズを、そして自分やジーク、周りにいる人々を順番に見回し、

「今ならちゃんと出来るかも……」

と独りごちた。

ハンナの指がそつと、幻想の豎琴ファルシオンハープの透き通るような透明の弦に触れる。

♪……………♪……………

指が弦を弾くたび、光の粒子と共に音が舞い踊る。力強いのに、華やかで気品に満ち溢れているハープの音色は、聞いているだけでも心が落ち着いてくる。それに加えてクリスタルとしての力が発揮されているので、奏者の想いが音に乗ってクラウドたちを優しく包み込む。

「すごい……綺麗な音」

ハンナの椅子にもたれ、アズは目を閉じて音に聞き入る。

「クラウドス、無事か？」

見上げると、ジークが疲れたような笑みを浮かべてこちらを見下ろしていた。体力が戻ったのか、今更ながらにジークが立っていることに気づく。一般人の中にも、立ち上がったたり歩き回ったりしている人々が見受けられる。

「今回はハンナにやられちゃったなあ」

「……そうだな」

両腕を高く上げて伸びをするジークに続き、クラウドも天井を仰いで深く息を吐いた。すると、視界の端、4階から屋上へ続く螺旋階段の上に、見知った人物を発見した。

「……師匠？」

「ん？……あー、ホントだ。ゼノ団長じゃん」

手すりに体を預け、しばらくハンナの演奏に聞き入っていたゼノ

がふっと目を開けてこちらを見下ろし、クラウドとジークに気づいてにこっと笑って手を振ってきた。――その後ろに、黒い影のそりと動く。

「後ろにいるのってジン――じゃあないよな、あのサイズは」

ゼノの相棒、バーニングドラゴンのジンよりもずっと小柄なそれは竜だったが、種類が分からない。鳥のような翼をたたみ、なにやら不機嫌そうに長い尾をぶんぶんとかちこちに振り回している。それにゼノがほんの少し迷惑そうに顔をしかめつつまた笑うのだった。

「クラウドス、ほら、見てみるよ」

ジークに袖を引っ張られて振り返ると、ハンナの椅子にもたれ掛って幸せそうな表情のまま寝息を立てているアズの姿が目に入る。ハンナもどことなく楽しそうにそんな寝顔を見つめ、演奏を続けるのだった。

『緊急事態宣言を解除します。緊急事態宣言を解除します。園内に紛れ込んでいたノワールの排除を確認。医療関係者は、すみやかに一般人の容体を確認してください。クリスタルマスターは園内を見回ったのち、指令室へ報告。……繰り返す……』

エントランスに、緊急事態宣言解除のアナウンスが流れる。それを聞いて結界を解除し、非戦闘員が近くにいる一般人の傍に寄り、互いに声を掛け合った。

幸い怪我人もなく、力を取り戻したハンナの幻想のファルシオンハーブ豎琴の力によって気力を取り戻し、どうにか事なきを得た。

数人の医療班がハンナとアズの周りに集まり、腰をかがめ、幸せそうな顔をして寝息を立てている彼女を見て微笑ましげに笑い合うのだった。

＊＊

暖かい空気に頬を撫でられ、アズはゆっくりと目を開けた。

真っ先に視界に飛び込んできた大きな樹を見上げ、2、3回瞬き

をする。乳白色色の光が照らす空間に、どこまでも続いているように見える草原。春のような暖かい風……。

そして、自分の隣に悠然と座っている、とても大きな白い竜。

「セピアノス」

呼びかけると、セピアノスは目を細めてそれに応えてくれた。初めて会ったときは丸くなって寝ている姿をしていたので、こうして起きている姿を見るのはとても新鮮だ。「大きい」ではなく、セピアノスは「とても大きい」竜だった。地に伏せるように座り、長い首を蛇のようにもたげており、小さいアズを静かに見下ろしている。角と言える角は生えていないものの、角のような突起物は頭部にちよこちよこと左右対象に生えていて、長い真っ白な体毛が風に撫ぜられてサラサラと美しくなびく。

「私の姿が珍しいですか？」

じっと見つめていたせいか、どこことなくすぐったそうに首を傾げてセピアノスが言った。

「うん。初めて会ったとき寝てたでしょ？だからこんなに大きいなんて思わなかったの」

笑ってそう答えると、ゆっくりとセピアノスの顔が近づいてきた。見ているだけでも吸い込まれてしまいそうなのでも綺麗な黄金の瞳を

細め、セピアノスは首を傾げる。

「これは貴女の夢の中であって、狭間の世界ではありません。だから私はこうして自分の姿を本来の形にして見せることができるのです」

「……あ、そうか。セピアノスの体は……」

「そう。狭間の世界に置いてきました。今の私は精神だけの存在なのであって、肉体はありませんから」

「……辛くない？」

思わずそう尋ねると、セピアノスの顔が離れていく。そして大きな樹を見上げ、小さく首を振った。

「辛くない、と言えば嘘になります。けれど、一時的とは言え、肉体を捨てなければ次元を超えることはできなかった……。これは避けることのできない選択でしたから」

「……」

「どうかそんな顔をしないでください、アズ。私はその時をずっと待ち望んでいたのです。肉体を捨てても次元を渡り、セイレーンをクリスタニウムへ導くことを……。貴女は私を恨みこそすれ、憐れむ必要などないのですよ」

「恨むだなんて……。あたしはセピアノスを恨んだりなんかしないよ」

アズはサクサクと草を踏みしめて歩きだし、セピアノスの前足の辺りによつこらしよと腰を下ろした。首を上に向けてセピアノスを見上げているとどうにも首が攣ってきてしまう。ゴロンと寝ころび、アズを見下ろすセピアノスを逆さまに見つめた。

「そりゃ、ホントは元の世界が恋しいよ？ユズも、学校の先生も、友達も、叔母さんも、心配してるかもしれない。……でもさ、セピアノスはあたしじゃなきゃダメだって言ってくれた」

「ええ。貴女でなければ駄目なんです」

「それが、何よりも嬉しくて。あたしって周りを見ないっていうか、目の前の事に必死になり過ぎちゃうっていうか……必要とされればどこまでもやり通したいって思っちゃうんだ。その人の想いに応えたい一心で」

「はい」

「だからさ、あたしに出来ることだったら、何でもやりたいなって思ってる……。世界を救えるかなんて分からないけど、できること一歩ずつやっていきたいな」

「貴女は世界を救いました」

「……へ？」

きょとんとしてセピアノスを凝視する。世界を救ったって……。あれ？あたしの役目はもう終わり？

「アズは、世界と言われて何を思い浮かべますか？」

……しかしセピアノスにそう問われ、アズは首を傾げて「うーん」と唸った。

世界と言われても、地球儀や社会科の教科書で見たような大陸の形でしか浮かんでこない。

「一言に世界と言っても、思い浮かぶ世界の形は人それぞれ。貴女にとっての世界とは、本の中に記された絵や図のように見えますか？」

「……うん」

正直に頷くと、セピアノスは「ふふ」と声に出して笑った。

「貴女は正直者ですね、アズ」

「……それは、どうもありがとうございます」

どういたしまして、とセピアノスが返すと、こう続けた。

「人は、海や大陸を象った模型を見て、それが世界だと判断しがちです。けれど、本当の世界は私たちのとても身近なところに在る――。そう、私のすぐ足元にも」

「……。……え、あたし……。？」

「そう。貴女を含める、クリスタニウムに生きるすべての生き物――それらが寄り集まって、クリスタニウムという一つの世界となる。『1人は全て。全ては1人』。貴女はハンナという世界の一部を救

ったのですよ、アズ」

「……世界の一部。人が……」

1人は全て。全ては1人。

どこかで聞いたことがあるような言葉。

「世界が混沌の影に吞まれるとき、世界は破滅へ向かう——の世界
つて、クリスタニウムの全ての生き物の事を指してるの？」

「ええ。しかし、混沌の影を呼び寄せてしまっているのはあくまで
ブレイクリスタルを使っているノワールです。そして、その根源も
……」

「……ノワールの他にもまだ何かいるの？」

「この世界で誰よりも世界を呪い、誰よりも世界の破滅を願う者——
真に世界を救うためには、その根源を断ち切らねばなりません」

……♪……♪……

「あ……この音」

「どうやら時間のようですね」

聞き覚えのある音色に体を起こすと、セピアノスも首をもたげて仰いだ。

「また会える？」

見上げて問い掛けると、セピアノスは大きく頷いた。

「夢の中でならいつでも会えます。……貴女と私は、一つの体を分かち合う共同体。またしばらく眠りにつきますが、私はいつでも貴女と共にあります。必要になれば、いつでも力を貸しましょう」

——また夢の中で会いましょう……アズ

.....

「ん……」

小さく呻いて、ゆっくりと目を開けた。何度か瞬きを繰り返し、アズはのそのそと上半身を起こす。

「アズ！もう体の具合は大丈夫です？」

横を見ると、サイドテーブルの椅子に腰かけて幻想の豎琴を具現化させているハンナが微笑んでアズを見ていた。

どうやらここは病室のようで、小さな個室にアズの寝ているシングルのベッドとサイドテーブル以外は何もない小さな個室だった。

「ハンナのハープのおかげですっかり元気！体もう怠くないよ」

「よかったです！」

とても嬉しそうに笑って、ハンナは幻想の豎琴を自分の体に戻してアズのすぐ近くまで椅子を持ってきた。

「さっきまでクラウドくんも居たんですけど……仕事をすって行ってしまいました」

「クラウドが？」

「はい。……わざわざ謝りに来てくれて」

目を伏せて、苦笑気味にハンナが言った。

「私がノワールに心を開かれましたったのを、自分の失言のせいだ、すまなかった。って……。元々自分に自信がなかったから、クラウドくんのせいじゃないよって言っても、首を振るばかりで」

「……そっか」

頷いて、アズは俯いているハンナの顔を覗き込んで笑った。

「でももう大丈夫だよ。だって、本当のハンナの力は皆を癒すすごい力を持ってるってちゃんとわかったんだから！これからは自分に自信を持ってクリスタルマスターとして胸張って仕事できるもんね！」

「……はい！アズが私を信じてくれたから、助けてくれたから……私は私になれたんです。ありがとう、アズ」

「へへ、なんか照れちゃうな……」

まっすぐ見つめられてお礼を言われると、どうにもむず痒い。

けれど、それも悪くないと思えるのは、ハンナの笑顔が本当に心から笑えているからだとわかったからで、アズも嬉しくなって笑い返した。

上辺だけじゃない、本当のハンナの笑顔。それは、どんな感謝状や御礼金なんかよりも、アズにとってはずっとずっと価値のあるもの。

これが、世界を救うということ。

「おっ。目覚めたのか、アズ」

病室のスライドドアが開き、ゼノとアリスが揃って病室に入ってきた。

「ゼノ、アリス！来てくれたんですか？」

「ああ。たまたま通りがかったついでにね」

アズから向かって右側の窓際に回り込み、ベッドに腰掛けてゼノ。しかし、サイドテーブルに果物が入った籠を置いてハンナの隣に腰かけたアリスが意地悪い笑みを浮かべて、

「仕事なんども抜け出してアズの病室を覗きに行ってた人がよく言うわね」

「えっ!？」

「……それを今ここで言うか？」

驚いて声を上げると、肩を落としてゼノが半眼でアリスを睨む。

「だって本当の事でしょう？素直じゃないんだから」

「こういう時はクールに決めるべきなんだよ、団長の立場からして！」

「心配してた、って言えばいいだけじゃない。皆そうなんだからね、ハンナ？」

「はい！」

女性同士で笑いあうところを見やり、ゼノは深々と溜息をついてからアズに笑いかけた。

「すごかったぞ？アズのクリスタル。まるで小さなセピアノスを見ているようだった」

「セピアノスをイメージしたんです。あの3対の翼にもそれぞれ役割を持たせて、用途に応じて臨機応変に戦えたらなって」

「アズが降りてきた時、空から天使が降りてきたと思いました！」

「そんな大げさな……」

苦笑して頬をぼりぼりと搔くと、「リングでいいかしら？」と果

物ナイフを持っているアリスに問われ、笑顔で頷いて返した。

「あいにく副団長としての義務があったから指令室を離れるわけには行かなかったけれど、私もぜひこの目で見てみたかったわ」

シャリシャリととても綺麗にリンゴの皮を剥いているアリスの指の動きを観察しつつ、思い立ったことを言った。

「今ここで具現化しますか？」

「「駄目!」「」」

瞬間、3人にすごい剣幕で止められた。ぎよっとしてベッドの上で縮こまると、3人はわたわたと、

「いくらセイレーンでも、初心者が連続でクリスタルを具現化させるもんじゃない! 心と体にどれだけの負担がかかると思ってるんだ?」

「ましてやセピアノスの力が宿ったクリスタルなのよ? 大きな力に心が潰されてしまったら生ける屍になってしまうわ!」

「そんなの嫌です! お願いだから無茶しないでください!」

「……………えっと」

ゼノとアリスは目を見開いてアズに詰め寄り、ハンナに至っては手で顔を覆い泣き出す始末。

…………え、そんなにクリスタルって出しちゃいけないもんなの?

「全ての生き物がクリスタルを持っているにも関わらず、クリスタルを具現化してクリスタルマスターになれる人が少ない訳はそこにあるのよ」

「難しいってことですか？」

聞くと、ゼノが腕を組んで頷いた。

「ただ難しいだけじゃない。その人の素質も、クリスタルとの相性も関わってくるし、もっと言うと天性的なものもあると言っている。もちろん後天性なものでクリスタルを具現化させる者がほとんどだが、生まれ持った才能を成長していく段階で心の中で育てなければならぬ。例で言うならクラウド、ハンナが天性的な才能の持ち主だ」

「ハンナ？」

ちらっとハンナを見ると、少しだけ頬を染めて「恥ずかしい話です……」と俯いた。

「生まれ持った才能は開花させなければ意味がない。ただの宝の持ち腐れになってしまふ。心と体が成長していく過程の中で、その才能をどう芽生えさせるかがポイントになる。……ハンナの場合は、もっと早くに気を配っていてやれたら、と思うよ」

「そんな……私の心が弱かったから」

ふるふると頭を振って、ハンナがゼノを見た。しかし、ゼノは意

味深な視線をアリスに送る。

「私たちが揃ってここに来たのは、アズのお見舞いだけじゃないのよ。ハンナ」

「え？」

きよとんとしてアリスを見るハンナに、彼女は可愛らしくウィンクをして見せた。

「貴方のその幻想のファルシオンハープの力を見込んでお願い申し上げるわ。そのハープの音色で、セピア・ガーデンに訪れた人々や、任務に疲れて帰ってきたクリスタルマスター達の心を癒してあげられないかしら？」

「――！」

と、胸元から取り出された小さなクリスタルをチラつかせ、アリスが綺麗に笑った。

「貴女が作って貴女が奏でてくれた曲を録音させてほしいの。もちろん私お手製の録音機能満載のオリジナルクリスタルだから、貴女の力をそのまま反映させるためだけにちよつと改造はしてあるけれど。……どう？ ぜひ力を貸してくれないかしら？」

「も、もちろんです！――いえ、むしろぜひ私にやらせてください！」

目を輝かせて勢い込むハンナを見て、アズとゼノは顔を合わせて笑いあった。まだ会って間もないが、あんなに嬉しそうに顔を輝か

せているハンナを見るのは始めてだ。

本当は音楽をやりたくて仕方なかったんだな、と今になって思う。階段でぶつかった時に取り落としたあのたくさんの楽譜を思い出し、ハンナはとても音楽を愛しているのだと実感した。

これが、きっと彼女の本当にやりたい事だったんだろう。

「貴女ならそう言うってくれると思っていたわ。けれど、収録は後日にしましょう。貴女もまだ昨日の事件のせいで心が十分に回復出来ていないんだから」

「――え！？昨日？あたしそんなに寝てたんですか！？」

思わず素っ頓狂な声を上げて皆を見回すと、

「ん？まあ、丸1日寝てたな」

「ぐっすりだったわよね」

「とっても幸せそうな寝顔でした」

……あのまま眠りこけていたのか、あたし。

内心ぐったりしつつも体の調子もすっかり戻っているような気がした。ハンナのおかげで怠さもないし、気分的には絶好調だ。

「はい、リンゴどうぞ」

「あ、ありがとうございます！いただきますーす」

差し出された小さなお皿を受け取り、一口大に切り分けられたリングを爪楊枝で刺して一口。シャクシャクと噛みしめると何とも言えない甘味と酸味が口いっぱい広がる。

「俺もー」

「アズに剥いたのに、ゼノったら」

顔を綻ばせていると、横からゼノの手が出てきてひよいとリングを摘まんで口の中へ。アリスが眉を寄せて不満そうに口を開いたが、アズは気にせずにごにこと笑って「あたしは気にしないでですよ」と言った。

もぐもぐと口を動かしながらゼノがうんうんと頷き、

「ま、アズが元気になってよかったってことで一つ」

「意味が分からないわ」

げんなりと見返すアリスに笑いかけ、アズはサイドテーブルに乗っている籠からリングを一つ手に取り、

「ホント、すごく体の調子がいいんです。今ならこのリングも片手でぐしゃっと握りつぶせそうなくらい——「グシャッ!」——……」

「「「……」」」

何が起こったのか、一瞬分からなかった。

その場にいた全員で茫然とアズの手の中で無残にも握りつぶされてしまったリングを凝視していると、病室のスライドドアが開いてジークとウィルがひよこつと顔を覗かせて、

「アズが起きたって聞いた——ん、だけ……ど」

アズを見てジークが硬直。しかし、

「ああ、リングを片手で握り潰せるくらい元気になったんだね、アズ。よかった」

なぜか朗らかに優しく笑うウィルを全員で見つめ、いや、そこ違うだろ、と内心で突っ込むのだった。

14 一難去って(後書き)

アズがリングを握り潰すという構図が書きたくてダラダラと書き綴っていたら、だいぶ時間がかかってしまいました……。

握力いくつあればリングを片手でぐしゃっと出来るんですかねえ……
……ちよっと夢ですよ、ぐしゃってやるの(え

15 また一難

“一難去ってまた一難”

皆さんは、この言葉の意味を知っているだろうか。

まあ、見たまんまの意味なのだが、要は『次から次へと災難が襲ってくる』という意味が込められていることわざだ。

一言に災難と言っても人それぞれ。その人にとっては災難でも、他の人にとっては取るに足らない何でもない事……ということはよくある話。

それでも、自分にとって不幸なことが立て続けに起きてしまうと、“一難去ってまた一難”ということわざを脳裏に思い浮かべてしまうのは、もはや人間の悲しい性だろう。

如月アズにとって、このクリスタニウムはそんな災難で満ち溢れていた。

………

人の心を暴き、混沌の影シャドウを操るノワール、ゾイスを自らのクリスタル「戦場の女神」^{ヴァルキリア}で見事撃破し、ベッドの上でリンゴを握り潰して……あれから3日。

検査に検査を重ねようやく退院できたアズは、なぜか席について講師であるアリスに向き合って勉強をしていた。

……なにゆえ？

「はい。では生物教本の96ページを開いてください」

パラリ……と表面がつるつるしている本のページを力なく捲り、アズは机に突っ伏したい衝動を必死に堪え、死んだ魚のような目で教本に視線を落とした。……正直、もう何も頭に入ってこない。目の前に広がる、挿絵も図もない、狂ったような文字の羅列しか並んでいないこの教本のせいで。

何故今机に座り教本を広げて睨めっこをしているのかと言うと、話は3日前に遡ることになる。

心身ともに完全復活を遂げたアズは無事退院し、セピア・ガーデ

ンの職員の人々に祝福されながら、セイレーンとして世界を救うべくクリスタルマスターの仕事に熟していくこととなった。本殿の中をくまなく案内してもらい、個室の部屋も与えられ、「ようし、頑張るぞーう！」と勢い込んで張り切った。……うん、そこまではよかった。

けれどセピア・ガーデン最高責任者であるゼノ・ブランフェール団長の一言によって、アズの心は一瞬にして奈落の底へ突き落された。

「任務に就いてもらう前に、この世界のことを知っておいた方がいいんじゃないか？」

「まずはお勉強ね！それはいいわ。そうしましょう！」

「……」

嬉しそうに手を叩くアリスを愕然と見つめ、襟首を掴まれてずるずると太陽の光がサンサンと差し込む開放的な会議室なる場所に強制連行されてしまった。これは後からゼノに聞いた話だが、あまりにも放心しきったような顔をしているアズを引きずって嬉々として歩くアリスを見た一般職員たちは、セイレーンであるアズに一抹の不安を抱かずにはいられなかったらしい。……頼りなくてすみません。

真に申し訳なく思うが、本当に勘弁してほしい。アズは「勉強」と名の付く、体育以外のすべての科目がてんで駄目なのだ。いや本当に。

椅子に座って机の上に本を広げ、黒板に書かれている文字をノートに書き取るではなく、自らの体1つで覚え、学習していくのがアズの勉強スタイル。見ているだけでも眩暈や猛烈な眠気に襲われる教科書を見て勉強が出来ないアズの成績は、それはもう酷かった。体育以外オール「1」。……もちろん最低ランクを意味する「1」だ。

小さな頃からユズに笑われてきたが、高校に上がってから憐れむような目で見られるようになった。もちろんユズが憐れんでいるのはアズ自身ではなくアズの頭の中にあるただの味噌と化してしまった塊だったのだが。

しかし、これだけは言うておく。アズは断じて「馬鹿」ではない。もちろん馬でも鹿でもない。

文字から意味を汲み取ることが出来ないだけなのであって、言葉で表現して体で再現してくれば飲み込むことが出来る。後は自分の体で実際に動いてみれば、アズの体はスポンジの如く吸収するのだ。

「……思うようにはかどらないわね。少し休憩しましょうか？」

珍しく眼鏡を掛けてキリッとした表情だったアリスの顔が、少しだけ綻んだ。しかしアズは力なく首を振り、

「教本なしで授業ってしてもらえないですか？」

ぐったりと掠れるような声で懇願してみた。

「教本なし？……でもそれじゃ分かりにくいんじゃないかしら？」

「や、あたしにしたら、この文字しかない教本のほうがよっぽど理解できません。アリスが口述で説明してくれたほうがまだすんなり理解できると思うんです。……あ。でも、アリスが疲れちゃうなら……少し休憩してこのまま続けます……」

「ふふ。私の口述でよければいくらでも。その方が貴女のためになるからね」

「！ありがとうございます、アリス先生！」

何でも言ってみるものだ。アズはまた一つ学習した。

この世界についてアリスの口述から聞く限りでは、このクリスタニウムという世界には大きな国が4つ存在しているという。4つの国は東西南北に大きく分かれた4つの大陸にそれぞれ位置する中心国で、その国を拠点に周囲にいくつかの小さな街や村が点在している。

1つは、西に位置する武力行使を重んじる実力主義国、ギンガム帝国。

4国家の中で最も血の気が多く、何でも力でねじ伏せて解決しようとする志向が強い帝国。力や統率力のある者なら他国の国民でも獣人族でもいいというほど武力に拘っており、国内では主に武器商業が盛んに行われている。

2つめは、南に位置するサエラキア王国。4国家の中では唯一の女王が治める国で、ルディアナ王国と協定している大きな国。一年中南国のような気候で、珍しい生き物やおいしい食べ物が多く観光客で賑わう言わずと知れた観光名所らしい（女王も美しいと評判だとか）。

3つめは、北に位置するブリヴィード王国。極寒の地にあるせいで作物などが育ちにくい国でありながら、4国家の中では飛び抜けた技術を有しており、寒い環境にも負けない作物や動物を作り上げて国を支えている鎖国国家。国内の技術力、および情報流出を恐れての事で、10年以上も前から鎖国状態にあるという。

そして4つめの国が、東に位置するこのセピア・ガーデンを領土内に置くルディアナ王国。数多くの有能な騎士と少数で編成されたクリスタルマスターの聖騎士団を所有する、平和主義国。今まで何度かギンガム帝国とセピア・ガーデンの保有権限を争って衝突したことがあるそうだが、大きな戦争になることなくどうにか現在の状況に落ち着いている。他の国とは違い、唯一獣人族の差別を法で禁じている国。

アリスから聞いたものをまとめると、ざっとこんなものだった。

「じゃあ、あたしはルディアナ国民ってことになるんですか？」

10分の休憩時間をもらい、アリスと共に食堂で一息ついているときの質問。眼鏡を取ったアリスがコーヒーを一口すすり、「ええ」と頷いた。

「正確には、まだ国籍表を国に提出していないから事実上は無国籍
ってことになっていくけれど、そっちの方はゼノがやってくれている
ので問題ないわ。3日もしないうちに貴女は立派なルディアナ国
民になれるから安心して」

「よかった。じゃあ、あたしも晴れてこの世界の住人になれるっ
てことですよね！」

「ええ」

やったー！と万歳して喜ぶと、アリスだけでなく周りで食事をし
ていた職員の人たちにも笑われてしまった。子供じみた自分にちょ
っと反省して、手元にあるミルクティーを照れ隠しにごくごくと流
し込んだ。

そんなアズを微笑ましげに見ていたアリスが机に肘をつき、「そ
うそう」と何か思い出したように口を開く。

「例の怪力のことなんだけれど、大体の予測はついたわ」

「ホントですか!？」

力んでマグカップを置くと、「ピキ」と手の中で嫌な音。またや
ってしまった……。

「あくまで仮説なんだけれど、おそらく「重力」に関係しているわね」

「重力ですか？」

「そう。アズの世界とこの世界は根本的に違うということから推測

するに、アズの世界はこの世界に比べて重力のかかり方が重く、逆にこちらの方が軽いと考えられるわ。クリスタルを具現化させる前から予兆はあったのよね？」

「はい。ヴェールを叩いたら、「痛い！」って言われました。そんなに強く叩いたつもりじゃなかったから、なんかおかしいなって」

アリスは頷き、組んだ手の上に顎を乗せて興味深げにアズを見つめた。

「貴女を検査したドクターが驚いていたの。『筋肉の付き方は年相応だし、体系も標準より少し痩せてはいるけれどその分引き締まっている。なのに、この筋力の鍛えられ方は尋常じゃない』って。きっと生まれた時から重い重力を纏って生きてきた貴女だからこそ、この世界では常人以上の力を発揮できるのかもしれないわね」

「常人以上というか、ここまでくると軽くモンスターですよ……」

げんなりと呟くと、アリスは「そんなことないわ」と微笑んだ。

「もしクリスタルを使えなくなったとしても、貴女なら肉弾戦に持ち込めるでしょう？様々な状況に合わせて戦えるようになっておかないとせっかくの力がもったいないわ。有効的に活用しないと」

「そう……ですね」

顎に手を当てて頷く。

……力加減はきちんと制御できるようにならないとこの先不便だ。また何か壊してしまうかもしれないし、何より誰かを傷つけてしまいかもしれない。

アリスの言うとおり、ここは奇跡的に手に入れた特殊スキルだと割り切り、今後の為にも訓練しておこうと思った。

「よ。お疲れ……」

頭上で声がして、マグカップを口に当てたまま視線をずらすとアズの際にマグカップを持ったゼノが疲れた顔で腰を下ろす。座った途端に机の上でだらしく伸びをして、そのまま突っ伏した。

「ゼノ。だらしないわよ、シャキツとしてちょうだい」

「……だったら始末書と報告書の作成手伝ってくれよ」

突っ伏したままぐもったゼノの声。アリスは眉間に指を当てて溜息をついた。

「私が終わらせなければならぬ報告書はすべて書き終えたのに、貴方はいつまでかかっているの？あれから4日も経っているのに」

「あの量が4日で終わるか。1週間はかかるって」

「1週間もかけている暇はないわよ」

「……なんとか言ってやってくれよ、アズ」

顔をずらしてアズを見上げるゼノ。しかし、だからと言ってアズがいい案を出せるわけもなく。

結局思考を凝らしてたどり着いた案は、ただの素朴な質問になった。

「始末書って、何の始末書ですか？」

「主にゾイスの奴の始末書」

「あっ！」

今の今まで忘れていた人物を思い出し、アズは思わず大きな声を上げて腰を浮かせる。

「そういえばあの後どうなったんですか！？あたし、蹴り飛ばした所までは覚えてるんですけど……確か放っておいたような気が……」

何よりも優先したかったのはハンナの事だった。アズは怒りに任せてゾイスを蹴り飛ばし、床に倒れこんだ彼を見てとりあえずスッキリしたのでそのままにしたと思う。……今思うとんでもなく酷い扱いをしていたと若干ではあるが反省はしている。ハンナの事があるので謝る気はさらさらないが。

「あれは本当に恐ろしい光景だったな。特にアズの顔。……あいつのブレイクリスタルは俺が壊しておいたから大丈夫だ。もう他人の心をこじ開けることはできない」

「そっか……よかった」

聞き捨てならないセリフがあった気もするが、とりあえずは安堵の溜息をつきアズは椅子に座りなおした。

「ブレイクリスタルを破壊するまでは油断できない。覚えておくといい」

「はい」

神妙な面持ちで頷き、ふとある疑問が浮かんでくる。アズは首をかしげ、コーヒーを飲んでいるゼノに尋ねた。

「……ノワールの心は、媒体の人たちのように元に戻すことはできないんですか？」

「戻すも何も、あれが奴らの本性だからな。別にブレイクリスタルに操られているわけでも洗脳されているわけでもなく、本当に心の底からこの世界が消えてなくなればいいと思っている奴らばかりの集団……それがノワール」

「ブレイクリスタルは自身の心のクリスタルとは別物。だから壊しても本人に何の影響も出ないわ。……だから、放っておけば、彼らは同じ過ちを何度でも繰り返す」

「え……ホントに大丈夫なんですか？」

心配になって尋ねると、ゼノとアリスは2人口をそろえて「大丈夫」と頷いた。

「そのためにこのセピア・ガーデンには監獄塔ってものがある」

ふと聞き覚えのある名前が出てきた。

確か、クラウスがゾイスに対して「監獄送りにしてやる」とか何とか言っていたような。

「その監獄塔の副看守長がまた切れ者でな……というか異常でな」

と、途端に2人して遠い目であさつての方向を見て深い溜息。：
一体どんな人物なのか、気になってしょうがない。

「このセピア・ガーデンの浮島に幾つもの小さな浮島がくっ付いて
るのはもう見たよな？そのうちの一つが、その監獄塔のある島だ。
――まあ、また時間のあるときに案内するけど、そこにいる2人の
クリスタルマスターが看守長と副看守長なんだ。ちなみに双子の姉
妹。全然似てないけど」

「妹のリオンが看守長。姉のセレスが副看守長。……問題があるの
はその姉の方」

「どんな人なんですか？」

興味津々で尋ねると、しかしやはりというか2人の顔に同時に影
が落ち、

「……変質的」

と声をそろえて呟いたのだった。

休憩時間も終わり、アリスと共に再び会議室に戻ると、何やら見
慣れない人がウロウロとあっちへ行ったりこっちへ行ったり。思わ
ずアリスと顔を見合わせると彼女も首を傾げてさも不思議そうに、

「こんなところで何をしているの？ウィード」

と、声をかけた。

「あっ！アリス副団長！……と、アズ、さん？」

「あ、はい。えっと、はじめま——「ちょうど良かったあ！」……ぐふっ！」

自己紹介をしようとしたら突然泣きつかれるようにタツクルされ、つぶれた声を上げる。しかしウィードという男性はお構いなしにアズの肩を掴むとがくがくと揺さぶり、

「ヴェールさんが大事な鞍を付けたまま消えちゃって困ってるんですよ！アズさんは彼のパートナーでしょう？あれないと俺がロージーさんに怒られちゃうんですよ嫌なんですよ怖いんですよだからヴェールさんを一緒に探してください！」

今にも泣きそうな顔で迫られ、アズはがくがくと揺れる視界で酔いつつ「い……言ってる意味が解りましえん……」みつともなく舌を嚙んでしまった。

「落ち着きなさいウィード。意味が分からないわ。ヴェールと鞍が何ですって？」

仲裁に入ってくれたアリスに感謝しつつようやく解放され、ふらふらと千鳥足でふらついていると、もふっと顔が何かに当たった。

「？」

何もないのに、何かある感触。すりすり頬を摺り寄せると、あ

のシルクのような肌触り……。

『むふっ』

なにやら頭上でくすぐったそうな声が聞こえた。

「だから、鞍ですよ鞍！ノワールが侵入したあの日にヴェールさんにロージーさんの竜の鞍を付けてそのままなんです！返してくださいです！そのままガーデン内に入って行っちゃうし、途中で見失っちゃうし……！」

「あの、ここにいますよ。ヴェール」

「……へ？」

わざと姿を消しているヴェールにくつついたまま、アズは頬を摺り寄せて「ここですよ」と言った。

『……なんでそうばらすのさ』

不満そうなヴェールの声が聞こえ——景色がかすんでヴェールが姿を現した。

「ヴェールさん！酷いじゃないですか、ずっとここに居たんでしいう！？」

『だってここにアズがいるんだもん』

しれっと答えると、ヴェールはアズに顔を近づけて『ここ暇。どっか行こうよ』と退屈そうに言った。

「あたし今勉強中だからなあ……」

『んな事しなくたって生きていけるよ』

「それより、その鞍返してあげたら？ ウィードさん困ってるよ、怒られちゃうよ」

『ね、ウィード。この鞍俺にちょうだい？』

「駄目ですーっ！っ！」

間髪入れずにウィードが叫ぶ。……何やら仲がいいような気がして、アズはヴェールを見上げた。

どこことなく楽しそうに目を細めているヴェールは、もしかしたらわざとウィードを困らせているのかもしれない。まるで、小さな子供が遊んでほしいときに相手の気を引くように。

「ウィードさん、取っていいですよ」

「ホントですか!？」

顔を輝かせてウィードが飛び跳ねる。ぶつぶつと不満そうに小言を言うヴェールを黙らせ、鞍を返した。

「これでようやく仕事に戻れます……」

『お前なんか竜に頭から食べられちゃえ』

「ヴェールってば……」

鞍を胸に抱えて安堵の溜息を漏らすウィードにヴェールが舌を出す。ヴェールを窘めるアズの隣で、黙って何かを考えていたアリスが「ちよっと待って」と立ち去ろうとしていたウィードを呼び止める。

「今アズにこの世界の事を勉強してもたっている最中なんだけれど、どうかしら？ セピア・ガーデン一竜族に詳しい貴方から、彼らの生態なんかについて説明してもらえると有難いのだけれど」

「……ええっ！？ 俺がですか！？」

驚いたように目を見開き、自分を指差してウィードが尋ねる。

「ええ。貴方がよければ、ぜひ」

「……なんか照れちゃうな。いや、俺なんかでよければいくらでも説明しちゃいますよ」

「よろしくお願いします！」

照れたように頭を掻くウィードに礼をして、ウィード先生の「竜族について」の口述授業が決まった。

教卓の前に立ち、ホワイトボードに書き綴った文字を背に、生徒であるアズと何故かちゃっかり通路の階段に陣取って座っているヴェールと傍観しているアリスを含める3人に向かい合い、ウィードは咳払いをして口を開いた。

「えーっと。では簡単にはありますが、僭越ながら自分が説明させて頂きます」

『固いぞー』

「……茶々入れないの」

ヴェールを半眼で睨み、ウィードの授業が始まった。

「竜族には大きく2つに分かれた竜種が存在します。1つ目は『ノーマル種』。そして2つめは『アブノーマル種』です。

『ノーマル種』は比較的にどの環境にも適応することが出来、様々な場所で見かけることが出来ます。一言に『ノーマル種』と言っても様々で、まあ代表的なのがグレードラゴンですね。彼らは竜族の中でも最も繁殖能力が高く、厳しい環境以外ならばどこでも生息することが出来ます。調教したり絆を深めれば人とのコミュニケーションも取りやすいので、初心者にはおススメの竜ですね。バランス型のグレードラゴンの他にも、スピード型のハヤブサドラゴンや、パワー型のストロドラゴンと言った、用途に応じて力を発揮してくれる頼もしい竜種もいます。彼らは人と共生し、日々協力し合って生きています。

そして『アブノーマル種』。彼らは外観も能力も『ノーマル種』とはまったく異なっていて、厳しい環境下の中に生息している事が多く、謎の多い竜種です。……もちろんヴェールさんもその一種ですが」

と、3人の視線がヴェールに注がれるが、本人（本竜？）はふんと鼻から息を吐き出してふんぞり返った。

「一般的に知られている『ノーマル種』とは異なり、『アブノーマ

ル種』の竜種にはそれぞれ別名という名前が付けられていて、例えるならゼノ団長の愛竜――バーニングドラゴンのジンですね。ジンは『アブノーマル種』で、別名を紅蓮火竜と言います。別名で呼ばれることはあまりありませんが、竜族にとって別名は誇りですから覚えておいてくださいね。

その他にも、海域に住む群青水竜のシードラゴン。

森林地帯に住む深緑木竜のフォレストドラゴン。

鉱山地帯に住む褐色岩竜のロックドラゴン。

積乱雲や磁気を帯びた火山灰の中に現れる閃光電竜のスパークドラゴン。

嵐の化身と呼ばれている緑青嵐竜のストームドラゴン。

竜の理想郷という場所に住む純白白竜のホワイトドラゴン。

史上最強の強者漆黒黒竜のブラックドラゴン……」

休むことなく流暢に流されていくウィードの言葉は、次から次へとアズの頭の中に流れ込んでくる。すべて処理しきれない多様な種類の竜族すべての別名も覚えられないまま、ウィードはどんどんと進んで行ってしまう。

「王族にのみ従う月光銀火竜げっこうぎんかりゆうのシルバードラゴンと日光金火竜にっこうきんかりゆうのゴールドドラゴン。この2種に関しては特に謎が多く、金と銀でつがいになることだけ分かっています。

そしてセブンスドラゴンのヴェールさん。残念ながら別名はありませんね。今の所は幻の存在だったので、存在自体が明確ではなかったのだ」

「そうなの？」

隣で大きな欠伸をしているヴェールに尋ねると、

『ま、俺の存在自体がイレギュラーみたいなもんだから』

と、とてもめんどくさそうに答えたのだった。

「ヴェールさんを見た時は、本当に信じられませんでした。まさかセブンスドラゴンが実在していたなんて……いや、本当に俺は感動しましたよ！」

「おとぎ話の中の存在だったものねえ」

足を組みなおしてアリスも頷き、興味深げにヴェールを見つめる。

「アズがこの世界にやってくる1週間ほど前に、私たちの前にセピアノスが現れてこう言ったの。——『これより異世界へ渡り、このクリスタニウムを救う救世主をセブンスドラゴンと共に連れてくる』……って。だから貴女がヴェールと共に現れた時は、貴女がセピアノスに選ばれた救世主だとすぐに分かったのよ」

だから初対面のゼノや飼育室にいた人々にあんなに驚かれたのかとようやく理解する。一見したところまったく救世主としての特別な要素を持ち合わせていないアズが、なぜ一目みただけでセイレーンかと問われたのか疑問に思っていたのだ。

セピアノスがそう言ったのならば、そばにセブンスドラゴンのヴェールが居ればアズがセイレーンだとすぐに分かるわけだ。うん、納得した。

「……以上が、今の所確認されている竜族たちです。すんごく簡単にまとめたんですけど、お分かり頂けましたか？」

「……と、とりあえずは」

苦笑して頷くアズを見て、ウィードもつられて同じような顔をする。

「ちょっと簡潔にまとめすぎましたかね？でもあんまり内容を深くすると俺が暴走しちゃうので、このくらいで締めといて続きはまた後日ってことで……」

「ぼ……暴走？」

「竜族の事になると熱くなり過ぎちゃうのよ、彼は」

「また何か聞きたいことがあればいつでも飼育室に来てください！俺は竜の調教師と世話係やってるので、ほぼ確実にいます」

『ねえ。それよりも俺にクリアクリスタルちょうだいよ。あれないと不便なんだよ』

ずいっとアズとウィードの間に割って入り、ヴェールがのそのそとウィードに近づいて言った。アリスが「そうだったわ」と手を打って頷く。

「そうね、貴方には必要だもの。ウィード、予備はまだあったわよね？すぐに手配してちょうだい」

「あっ、はい！」

アリスに気を付けの姿勢で答え、ウィードは鞍を抱えてパタパタと会議室を出て行った。

「……何のために無線機を渡したのか、まるで分かっていないわね」
そんなウィードを呆れたような視線を送ってアリスが見送る。

……あ、無線機ってあるんだ。じゃあ別にウィードがわざわざ走って飼育室まで取りに行く必要はないんじゃないんじゃ？

この会議室があるのは4階で、飼育室があるのは地下1階（浮島なので地下という言い方は正しくないかもしれないが、皆そう言っている）。おまけに飼育室に行くにはあの長い園庭を抜けなければならぬ。それだけでもかなりの距離があると思う。

一体いつ戻ってくることや……そんな事を考え、アズはすり寄ってきたヴェールの頭を撫でながらアリスに尋ねた。

「クリアクリスタルって何ですか？」

「様々な用途に転用可能な万能クリスタルよ。ここでは主に結界を無効化させる役割に使われているの。このガーデンの周囲には特殊な結界が張られていて、ブレイクリスタルを持つノワールや竜族は入れないようになっているの」

『うむ。忌々しいことこの上ないね』

ノワールが入れない事はいとしても、何故竜族までもが対象になっているのだろうか。

怪訝な顔をしたアズに察しがついたのか、アリスが肩をすくめて苦笑した。

「……本当は竜族まで排除対象にしくはなかったのだけれど、野生の竜族の乱入が度々起こってしまった……昔、一般人に大きな怪我を負わせてしまった事があったの。それ以来は、例えばこのセピア・ガーデンやルディアナ王国で調教された竜でも無断入園が禁止になってしまった。飼育室に繋がる入口には結界がないからどんな竜族でも入れるけれど、ここで加工された特殊なクリアクリスタルを付けていないと結界を超えて直接セピア・ガーデンに入れないように制限をつけたのよ」

「……クリアクリスタルを付けていない竜がその結界に当たるとどうなっちゃうんですか？」

「弾き返されるわ。無理にでも突破しようとすれば突破できるかもしれないけれど、たぶん無事では済まないでしょうね」

『ホント人族って臆病だよね。だから長生きできないんだよ』

あざ笑うヴェールの頭を無言でべしっと叩いて窘めると、アリスは自嘲気味に笑って「そうね」と肩を落とした。

「人の心は脆くて壊れやすいから、だから簡単に影に付け入られてしまうのよね……」

そう言ったアリスの目は、とても悲しそうに窓の外に向けられた。

教えて！ ウィード先生！ 〈アップノーマル種編〉（前書き）

……えっと。

ついについにやってしまいました。このコーナー。

この「教えて！○○先生！」シリーズは、たぶん今後もいくつかストーリーの閑話として登場すると思います！

特にストーリーの続きのお話とかではないのでそのまま飛ばしてもらっても構いませんが、読んでいただければより分かりやすいと思います。

「まだ話に出てきてないのに、こんなに知りたくなかった……」と後悔してしまう方は、このまますっ飛ばして下さいませ。

教えて！ ウィード先生！ 〈アブノーマル種編〉

えーと、どうも初めまして。ウィード・ザクネルです。

セピア・ガーデンで竜専門調教師兼世話係をしています。趣味は竜の観察で、好きな食べ物は海の幸満点の海鮮丼……って、……え？ そんなこと聞いてないって？

……そんな連れないこと言わないで下さいよ。せっかく舞い込んできた俺だけのコーナーなんですから。もっと皆で盛り上げていきますよー！ おーっ！

さて。その俺のコーナーとは、この世界に生息している竜族の紹介らしいんですけど、ホントに光栄です！ 竜のこと以外じゃ特にこれと言って何の取り柄もありませんしね、俺に出来ることと言えば竜の説明くらいなんで。

……今竜族オタクとかって思いました？ いえ、決して怒ってなんかいません。むしろもっと言ってください。俺はオタクです。竜族のあの光沢のある美しい鱗が大好きな、逞しくも美しいフォルム……ああ、なんて幻想的でカッコいい生き物なんでしょう……。竜の事を語るのに、1日だって少ないのに1時間以内で終わらせろなんてゼノ団長も鬼畜ですよ。……あ、今言った事内緒ですよ？ 俺が聖なる追弓で穴だらけにされちゃうんで。

えっと、では竜の正式名と別名、体の色と生息地。そんでもって簡単な紹介文を書いてみたので、みなさん参考にして下さいね。俺の知識と竜への愛が詰まっていますから。満載ですから。ここ大事ですよ。

☆アブノーマル種☆

・バーニングドラゴン (別名…紅蓮火竜^{ぐれんかりゅう}) 体色…赤 生息地…
火山地帯、火口付近など

⇒竜族の中で一番熱い火炎を吐くドラゴンであり、セピア・ガーデンではゼノ団長と行動を共にしているジンと同種。その火力は凄まじく、マグマをも沸騰させるほどと言われている。鱗も熱を帯びていて体温が80℃近いため、乗る際には特殊な装甲と鞍を付ける必要がある。竜族の中でも気性が荒く、荒くれ者が多い。

・シードラゴン (別名…群青水竜^{ぐんじょうすいりゅう}) 体色…青 生息地…
海全域

⇒海にのみ生息する、広く一般的に親しまれているドラゴン。両生類だが、水中に適した体に進化しており、翼が退化して腕が巨大なヒレに、尻尾が尾びれに変化した。海中を最高時速200キロで泳ぐことができる。大きな一本角が特徴的。人懐こく、海に面している街などでは漁業にも携わる重要な役割を果たしている。竜族の中で最も体が大きく気性も穏やかだが、シードラゴンの怒りに触れたせいで巨大な渦潮が巻き起こり、小さな港町が壊滅したという伝承もある。人懐こいが、必要以上に人族と深く関わらない性格。

・フォレストドラゴン (別名…深緑木竜^{しんりよくもくりゅう}) 体色…緑 生息地…大きな森など

⇒フォレストドラゴンの体長は、生息している森の大きさによって違うと言われている。体を覆うのは固い鱗ではなく、木のような性質をもつ苔むした皮膚を持つ。その体に取り込んだ種子が芽生え、小さな樹や花々が生えたりと、「歩く小さな森」と呼ばれることもある。森を守る守り人で、森に危害を加える者には一切の躊躇もなく踏み潰す。翼は退化してしまい、樹の枝のようにしわがれた筋が生えている程度に残っている。

・ロックドラゴン (別名…褐色岩竜^{かっしょくがんりゅう}) 体色…茶 生息地…鉱山、岩山など

⇒遺伝子的にはフォレストドラゴンと近く、体を覆うのは鱗ではなく、口から摂取した岩石や鉱石が体表に現れる不思議な体質をしている。翼はなく、四足歩行で鉱山を歩き回り、ひたすらに鉱石を食い漁って一日を過ごしている。ロックドラゴンの食い進んで出来た穴にはたくさんの珍しい鉱石が取れるので、人族や獣人族にはとても重宝されている竜。だからと言って人族や獣人族と仲良し、というわけでもなく、使用済みの穴を使っていれば問題ないが、食べ進んでいる最中のロックドラゴンと遭遇してしまったら直ちに逃げろべし。餌場を横取りされると勘違いし、物凄い勢いで踏み潰そうと突進してくるのだ。

・スパークドラゴン (別名…閃光竜^{せんこうでんりゅう}) 体色…黄 生息地…雷の発生しやすい湿地帯など

⇒ジメジメとした湿地や積雷雲、噴火した際に巻き上がって磁気を帯びた火山灰の中などでよく見かける竜。常に自分の周りに青白

い電気を纏っており、首もとに生えている畜電毛ちくでんもうと呼ばれる体毛に電気を蓄え、それを大量放出することにより広範囲に渡って数百万ボルトの電気を放つことができる。畜電毛に電気を貯めれば貯めるほど素早く動くことができる、敵に回すと恐ろしい竜。

・ストームドラゴン (別名…緑青嵐竜りよくしやうらんりゆう) 体色…暗緑 生息地…
?

⇒嵐と共に生まれ、嵐と共に天かけると信じられている竜。その姿は他の竜族とは異なり、とても細長い蛇のような体軀をしており、手足は短く空を飛ばたく翼もないという、竜族の中でも取り分け珍しい外観をした竜族。そのため、異世界からこのクリスタニウムへ渡ってきたのではないかと考えられている。東の大陸、ルディアナ王国からさらに東の果てにある、とある小さな村では神のように崇められているとか。クリスタニウム自体嵐が減多に起こらない気候をしているため目撃情報がほとんどなく、最近では存在自体が危ぶまれている竜種。大地が震えるような咆哮を上げて嵐を巻き起こすと言われている。

・ホワイトドラゴン (別名…純白白竜じゅんぱくはくりゆう) 体色…白 生息地…
竜の理想郷

⇒特別な竜族の中でも希少種とされている、純白に輝く竜。一点の穢れもない完璧なまでの白い鱗に全身が包まれており、平和の象徴にされている。たどり着くことが困難と言われている「竜の理想郷」にのみ生息し、もしどこかで見かけることが出来たなら幸福になれるとまで言われている。見た目と同様に、争いを好まない温厚な性格をしている。

・ブラックドラゴン (別名…漆黒黒竜^{しつこくこくりゅう}) 体色…黒 生息地…
立ち入り禁止地帯

⇒この世界ですべての種族から最も恐れられている最強最悪の竜。
生態、詳細などはすべて明らかにされておらず、竜の生態学者たちが
血眼になってどんな些細な情報でも欲しがらうくらい謎が多い。分
かっていることは、10年に一度しか繁殖期を向かえず、群れの数
も4〜5頭ととても少ないと言うことだけ。今のところは食物連鎖
の頂点に君臨する絶対強者の座についていて、いくら腕に自信のあ
る獣人族やクリスタルマスターでも、ブラックドラゴンのテリトリ
ー内にある高純度なクリスタルを取りに行く命知らずはいない。な
ぜなら、生きて帰ってきた者は誰一人として存在しないからである。

・シルバードラゴン (別名…月光銀火竜^{げつこうぎんかりゆう}) 体色…銀 生息地…
?

⇒月の光が最も差し込む湖の底で生まれるという言い伝えがある
希少種。実際のところは明確にされていないが、竜族の中ではゴー
ルデンドラゴンと並び最も寿命が長いことで知られている。その寿
命、約500年から長いもので1000年近いとか。野生で生息し
ているところは今の所確認されておらず、王族の象徴として各国の
王家にのみ従順している。シルバードラゴンは雌しか存在しない。

・ゴールドデンドラゴン (別名…日光金火竜^{にっこうぎんかりゆう}) 体色…金 生息地…
?

⇒日の光で最も照らされる山の頂上で生まれるという言い伝えが
ある希少種。シルバードラゴン同様長寿命。黄金に輝く鱗で全身を
覆い、代々王家にのみ仕える従順な竜。「陰は雌を現し、陽は雄を
現す」という言葉通り、ゴールドデンドラゴンは雄のみ存在する。

・セブンスドラゴン (別名…なし) 体色…薄紫 生息地…?

⇒今だかつて発見例がなく、お伽話の中にのみ存在するとまで言われていた幻の竜。その姿は人の空想のみで描かれているため、姿形は様々。しかし、「虹色に輝く美しい体毛」だけは共通し、補足説明としてすべての書物に書かれている。セブンスドラゴンの情報の出所は不明。一体いつの時代に出回った話なのかも定かではないが、神竜セピアノスが遣わせた世界の希望そのものではないか、と考える学者も少なくない。セピア・ガーデンでは、セイレーンのアズの相棒として行動を共にしている。

……

いかがでしたか？

本文では語られなかった話もあるんじゃないですかね？

竜族は奥が深く、まだまだ解明されていない所がたくさんありますけど、そこにまたロマンを感じますよねえ……。俺もいつかそんな探究心溢れる学者になってみたいかも……。

『ねえ。なんか俺って無駄に美化され過ぎてない？「神竜セピアノ

『……そんなに言うなら、まあ、ちょこっただけね』

！
ありがとうございます！

『俺が生まれた理由は――』

……り、理由は……？

『あ「ヴェールウー？ご飯の時間だよー」……』

……。

『……そういうことで』

え。

：

……

………

ええええええええええー！！！！！？
Σ (T□T)

酷いですよヴェールさん！ヴェールさんてばー！

ご飯の誘惑に負けないで下いよ！

こんなの……生殺しだぁー！！
(絶叫)

教えて！ ウィード先生！ くアブノーマル種編く（後書き）

「ノーマル種」編もいつかウィードでやります。

他の種族の事なんかウィード以外の誰かでやりたいと目論見中
です^^

16 申し込み

この世界にセイレーンとセブンスドラゴンがやって来て、早いものであれから4日が経った。

セイレーンとして異世界からこのクリスタニウムに召喚された救世主は、ジークや他の皆が想像していた人物像とは似ても似つかぬ程にかけ離れていて、まさか女の子でしかも20もいかない年下のぴちぴち現役女子高生だとは誰一人想像もしていなかった。

落胆した人もいれば、外観や年齢なんて関係ないと手を叩いて喜ぶ人もいた。

世界は終わると絶望した人もいれば、世界は救われると泣いて神に感謝する人もいた。

実際、ジークとウィル、そしてあのクラウドでさえも驚きを隠せなかった。

あの少女――アズ・キサragiのクリスタル「戦場の女神」ヴァルキリアを、この目で見て、本当に、この世界は救われると思った。

なぜか、そう思わされてしまった。

「任務お疲れ様でした、クラウドさん！ジークさん！」

控えめなハーブの音色で満たされたエントランスに入り、受付に顔を出せば可愛らしい受付嬢が満面の笑みを浮かべて出迎えてくれた。ジークはにっこりと笑って「おう、ただいま」と返すも、隣にいるクラウドは返事どころかうんともすんとも返さない。

任務が終わってから、と言うよりも、任務が始まる前からなんとなく機嫌が悪い。目つきが悪いのは元からだ、今日はいつにも増してつり上がっているような気がする。

「はい。今回の報酬になります」

「……ん？ちよつと多くね？」

受け取った報酬の5万エルにしては少々重いような気がして問いかけると、受付嬢はにっこり笑って、

「はい！依頼先の方たちより先ほど連絡を頂きまして、今回の任務を熟してくださった御2人の勇姿に深く感銘を受けたとのことで、急遽報酬金額を増やしてほしいと」

「ふーん、そっか。じゃあ遠慮なく……」

「駄目だ」

「あっ！」

と、間髪入れずに横からクラウドに袋を掠め取られてしまい、非難の声を上げたが完全にスルーされ、

「俺たちは報酬に見合った仕事しかしていない。それ以上は貰えないと伝えておいてくれ」

「え……あ、はいっ!」

慌てて袋を受け取った受付嬢に袋を託し、クラウドはそれ以上何も言わずに踵を返して階段に向かう。ジークも急いで後を追う、クラウドの隣に並ぶ。

「ちょ……なんでだよクラウド! せっかく相手先が報酬増やしてくれるって言うてんのに。ここで貰ったかないと逆に悪いだろ?」

しかしそこでクラウドの形の良い金色の眉がぴくりと跳ね上がり、足を止めてジークに向き直る。底冷えするような非難がましい冷たい冷気をその目に称えて。

「任務中に女を口説くな、と何度言えば解るんだ? お前は」

「だっ……!」

あまりに突然だったので変な言葉が出てしまい、ジークは体を硬直させて固まった。痛い所を突かれてしまい言葉に詰まっているとそれも見抜かれ、

「思春期だとか発情期だとかくだらん言い訳を並べ立てる前にとっと1人の女を囲って1人の女に欲情してればいいだろうがこの万年発情期男が。お前のせいで何時間無駄にしたと思ってるんだ? 何人待たせたと思ってる? それで任務に見合った以上の報酬を貰おうとするなんてお前の頭は一体どうなってるんだ? 烏澁がましいにも

程がある」

矢継ぎ早に吐くだけ吐いて再び階段を上がっていくクラウドの後姿を呆然と見送り、

「このことはきっちり師匠に報告させてもらう。覚悟しておけ」

とどめの一撃を刺された。

＊＊

「……で、本当に走って持ってきたのね」

呆れたを通り越して哀れみの微笑を称えたアリスと共に汗だくで床にへばっているウィードを見下ろし、アズは「お疲れ様でした……」としか言えなかった。

「だっ……だって、あ、アリスふくだんちよ……が、持って……来て……って……言った……じゃ、……ないですか！」

ぜはぜはと過呼吸でも起こしているのではないかと思ってしまうくらいにウィードの呼吸は乱れており、足がぷるぷると震えている。

アリスはそんな彼に首を振ってこれ見よがしに溜息をついて、

「何のために1人1つずつ無線機を持たせたと思っているの？手配してと言ったのに……貴方が自分で持ってきては意味がないわね」

「あ……無線機……げほっ」

ようやく合点がいったのが、ウィードは納得したのと同時に力尽きてしまった。

「まったく……竜に持ってきてもらえば時間のロスもウィードが疲れるなんて事もないでしょうに」

「あはは……。でも、ウィードさんの一生懸命さが伝わってきて、なんか嬉しいです」

ウィードから受け取ったクリアクリスタルが付いた綺麗な首輪を持ち上げ、ヴェールに見せた。

「ウィードに感謝しないとね、ヴェール」

『うん、するする。早く付けてよ、アズ』

竜独特の鉤爪の付いた4本の指をグッパグッパと握ったり開いたりしながら待ち切れないのか催促をしてくるヴェール。……そんなにクリアクリスタルが欲しいのだろうか。

「しょうがないなあ」

苦笑してヴェールの首にそれを付けてあげる。きつくないか問う

と『大丈夫』と頷く。

「よく似合っているわ、ヴェール」

アリスの言うとおり、その首輪はとてもヴェールによく似合っていた。

わざわざヴェール用を選んでくれたのかもしれない。薄い紫にも見えるヴェールの体毛に映えるように、キメ細やかなラメの入った美しい青い刺繍が施された装飾は、見ているだけで心が癒される。正面にくるように持ってきたひし形のクリアクリスタルが光を受けてキラキラと輝く。

『これで良し、と。俺のためにご苦労だったね、ウィード』

転がったまま動かないウィードの頭をこつんと口でつつき、ヴェールはお礼(?)を言った。なんだかとてもご機嫌である。

首輪なんて犬猫じゃあるまいし!とか絶対言うと思っていたので、これはこれでなんだか意外だった。

「あら。もうこんな時間?アズ、今日の授業はここまでにしましようか」

「あ、はい!どうもありがとうございました、アリス先生!……と、ウィード先生」

ヴェールに頭を突かれて意識が戻ったのか、よろよろと起き上がるウィードにお礼を言うと、

「いやいや……どういたしまして」

青い顔でそう答えた。

……だいぶ重症に見えるのはアズだけなのだろうか。

「ヴェール。貴方も一緒に飼育室に戻りなさいな。ここは竜の貴方には狭いでしょう？」

『えー。俺飼育室じゃなくてアズの傍にいたいんだけど』

「っ!？」

胸に手を当て、アズはぶるぶると喜びに震えた。

この、何とも言えない優越感と喜びが一緒になった感覚……。ユズではなくアズに尻尾を振ってとことこと走ってくる子犬を抱きしめたあの時のように、アズはヴェールの首に抱き着いた。

「あたしもヴェールと一緒にいたいです！」

『ぎゃあああああ! 首っ……首締まるうー!!』

「……まあ、アズがしつかり見ていてくれれば別に構わないけれど」

感極まって力加減を間違えると危うくヴェールを絞殺してしまうところだった。力を緩めてぎゅーっと抱きしめてアリスにアピールをすると、頬に手を当てて溜息。それでも頷いてくれたので、アズはヴェールの首に頬をすり寄せた。

「よかったね、ヴェール! ずっと一緒だよ」

『うん……その前に力の制御ちゃんと勉強してね。俺の命が消える恐れがあるから』

「頑張る！」

勢い込んで頷き、そこでアズはふと思いとどまる。

会議室の時計を見るとまだ4時半前。部屋に帰るにはまだ早いし夕飯にも早い。残った時間をまた勉強に使うのは精神的に嫌だが、体力はまだ有り余っている。……というか、体を動かして発散させたい。

「アリス。時間がまだ余ってるし、体も動かしたいので……修練場に行ってきたでもいいですか？」

「これから？」

驚いたように聞き返され、アズは頷いた。

退院して園内を案内してもらった際に、2階の多目的フロアに修練場という場所があったのを覚えている。体を鍛えたり、2人や3人で組手をして戦う練習をする場所だとゼノに説明され、「戦い方や実戦の前組等はここで先輩たちからアドバイスをもらうといい」と言われた。

3日も寝たきりだったり机に座ってばかりだったので体がすっかりなまってしまった。今ならストレス発散にもちょうど良いと思っただが、アリスに首を傾げられ、

「貴女がそう言うなら別に構わないけれど……練習相手はどうするの？1人じゃ組手も出来ないでしょう？」

「……あ」

そう言われて相手のことをすっかり考えていなかった事に気がついた。

「今の時間帯ってあまり人がいないのよ。ほら、夕飯前だから。…無理しないで明日にした方がよくないかしら？」

「……そうですね」

気持ちが高まっていただけあって、心の落胆も大きい。しょんぼりして俯くと、ひんやりとしたヴェールの口に頭を小突かれた。

「わっ……。何、ヴェール」

顔を上げてヴェールを見ると、ふいっと顔を背けて何かをアズに示す。視線の後を追って会議室の出入り口を振り返り――、

「やあ。退院おめでとう、アズ」

分厚い本を片手に、ひらひらと手を振っているウィルの姿があった。

「ウィル！」

任務に出ていなかったのだろうか、白いワイシャツに黒いジーンズと落ち着いた服装姿の彼は優しい笑みを浮かべて会議室に入ってきた。

「みんな御揃いでどうしたの？……あ、ウィード。顔色悪いね。ヴェールも久しぶり。こんにちわ」

顔に浮かべている笑みはとてもほんわかと柔らかいのに、話す内容はどこか抜けているというか、目の付け所が違うというか。

アズが退院しているこの3日間でハンナに次いで頻繁に会いに来てくれた人物なので、ウィルの事は他の団員たちよりもだいぶ理解できたと思う。飼育室ですでにヴェールとは顔馴染みになっているということにも驚いた。

彼は、王子様のような笑顔で毒舌を吐ける恐ろしくも優しい人物だった。

「ありがとう！……あ、それ、この間の」

「うん。今返しに行くところ」

ウィルの抱えている大きな本には見覚えがある。確かベッドの上で暇を持て余していたアズのために、ウィルが図書室から選んで借りてきてくれた本だ。1855ページもある辞書並みの分厚さを誇るこの本のタイトルは「新・妖精国物語第1部 〈邪竜神の降臨〉」。女の子向けのファンタジー小説で、全3部作。もちろんアズは3日かけて全部読み終えた。

小説は好きだ。教科書とは違って、それぞれの世界観や物語がある。文字の羅列が苦手なアズでも時間を忘れて本の世界にのめり込める。

「ごめんね、返しに行ってもらっちゃって……それすっごく面白か

った！今度第2部も借りてみようかな」

「そうしなよ。本編の他にも番外編とかいろいろあるみたいだから」

「本当？じゃあ早いうちに全巻制覇しとかないと！」

「女の子ってホント妖精の類が好きだね。確かに珍しいけど、何をそんなに夢中になるのか俺には分からないなあ」

「妖精はいつだって女の子のロマンだよ！あたしの世界にはいなかったから本やアニメの中でしか見たことないけど、この世界にはいるんでしょ？会ってみたいなあ」

『……ねえ、本題からずれ過ぎ。話戻しなよ、日が暮れる』

今まで黙っていたヴェールに呆れたようにそう言われ、そうだった！と我に返る。

首を傾げているウィルに向き直り、アズは手を顔の前に合わせて頭をさげた。

「ウィル、今からあたしと組手してくれないかな？練習相手をさがしてるんだけど、今の時間って誰もいないから困ってたの！」

「え、今から？……しかもアズと？」

きょとんとした顔でそう問われ、アズは頷いた。

……が、

「ごめんね」

にっこり笑って速攻で断られてしまった。

「俺、リンゴみたいにぐしゃっと潰されたくないんだ。だからごめんね、はっきり言って俺じゃ役不足」

「りっリングゴ……！」

『ぶはっ！』

噴出して隣で爆笑しているヴェールを半ば呆然と見上げ、そう言えばウィルとジークにはリングゴぐしゃり事件（ゼノ命名）を現場で目撃されていると今更ながらに思い出す。

まだ力の制御の練習をしていないことを見越してか、ウィルの判断は正しいと言える。……言えるのだが。

「これじゃいつ任務に就けるのかもわからないわね」

溜息混じりに言うアリスの言葉がアズの胸に突き刺さった。

3日もベッドの上で体もろくに動かしておらず、退院しても勉強三昧。おまけに力の制御を勉強項目に追加して練習していくとなると……クリスタルマスターの任務を熟していくどころか、下手したらセピア・ガーデンから一步も外へ出ることもすら出来ない。ヴェールの背に乗って空の散歩に行くこともできない。

「適任な人物が今ここにいないんじゃないかなあ……ちやうど良く帰ってきてくれているといいんだけど」

「！ あたしと組手してくれそうな人がいるの？」

「うん。……っていうか、たぶんあの人以外は無理だと思うな——あ」

会議室の外に目を向けたウィルが目を見開いて——途端に笑顔になった。

「すごい、ナイスタイミングだよ！」

アズも会議室から顔を覗かせ、ウィルの視線の先にいる人物を視界に入れて、納得した。

「ナイスタイミング？……何事だ、ウィル」

相変わらず不機嫌そうに見えなくもない仏頂面で歩いてくる人物——クラウド・リオベルト。任務帰りなのか、黒い外套姿の彼の後ろにはなぜかとても憂鬱な面持ちのジークの姿もある。

「今ちょうどクラウドの話をしてたところなんだけど……って、ジークはどうしちゃったの？」

「どうもない。例の悪癖だ」

とても不愉快そうに腕を組み、肩越しにジークを睨みやる。

それで理解したのか、ウィルが「ああ、またなの」と呆れたように一言。

「いくら遺伝子レベルの問題だって言っても抑制できるでしょ。そ

れが出来ないのはジークがお盛んだから？」

「遺伝子レベルだから抑えがきかねえんだよっ！お盛んなのはお前らだって一緒だろー！？」

「俺はまだ抑制できてるから。ジークみたいに見境無いわけないし」

「くだらない。とっとと1人の女を囲え」

ぎゃんぎゃん喚くジークに、にっこり笑みのウィルがすぱっと切り捨て、クラウスに至っては嫌悪感を隠すことなく露わにしている。

……何の話をしているんですか。さっぱりついていませんが。

「廊下でなんて話してるの貴方たちはっ！場所を考えなさい！」

会議室から出てきたアリスに一喝され、3人は口をつぐむ。そしてそのそと顔を出したヴェールを見て、クラウスとジークの顔色が一瞬にして驚きに変わった。

「おわっ！なんでこんなところにセブンスドラゴン！？室内だぞ！」

『室内だったら何？そんなに俺が怖いのか？』

ジークを一瞥して、ふん、とヴェールが鼻で笑った

……ここに来てからだいぶヴェールの事がわかってきたが、どうも人に対して挑発的な言動が目立つ。人が嫌いなのか、それとも癖なのか……どっちにしても相手に悪い印象しか与えない。

ここは、ヴェールのパートナーである自分がきちんと教えてあげ

なければならぬ。拳をぎゅっと握り固く心に誓い、窘めるべくヴェールに向き合おうとしたその時、腕を組んだままのクラウドが一步前へ出て口を開いた。

「俺たちが恐れているのは混沌の覇者だけだ。……間違ってもお前なんかじゃない」

『……へえ』

……なんでそこで挑発に乗ってしまうのか。明らかにヴェールの顔から嘲りの色が消え、青い瞳にはうっすらと敵意が宿る。

『ウィル……こいつとアズを戦わせようとしたんだな。——うん、いい考えだ』

「何の話だ？」

「あ、実はアズの組手相手を探して……クラウドが適任じゃないかなと」

「……」

聞いていなさそうでしつかり話の内容を理解していたヴェールがウィルを一瞥し、1人で何度か頷いた。そして、

『よし、アズ。完膚なきまでに叩きのめしちやいなよ。特にあの顔を』

「はっ！？ ちょ……なに言ってるのヴェール！？ 完膚なきまでって……！」

『ボッコボコって意味』

「いや、意味なんて聞いてないから！あたしが探しているのは組手の相手でケンカの相手じゃ――」

「いいだろう」

アズの言葉を遮るように口を開いたクラウドスはヴェールから視線を逸らし、セピアノスとはまた違った輝きをもつ金色の双眸でまっすぐアズを捉え、

「俺もセイレーンとは一度手合せをしたいと思っていた。そこの小竜^{こりゅう}の言いなりになるつもりはない。俺から手合せ願おうか」

「……は、はあ」

『こりゅう……？古龍……？――小竜^{こりゅう}！？今俺の事遠回しにチビ竜って言った！？ぐわああー！ムカつくうー！この女顔があー！！』

遠回しも何もストレートな嫌味に聞こえたのはもちろんヴェール以外の全員。しかしヴェールが「女顔」発言をしたとたんにジークとウィルの顔が硬直。クラウドスの目元がぴくりと引きつり、金色の双眸に剣呑な光が宿った。

ああ……セピアノス。

あたしの心の中にいるなら、今ここで答えてください。

貴女の遣わせたあたしの相棒は、どうしてこうも血の氣が多いのでしょうか。

あたしの望む展開とは大きく逸れていくこの状況を、どうかセピアノスの力をもってして打開させて下さい。

如月アズ、16歳。

なんだか疲労とストレスで精神的に老けてしまったような気がする、今日この頃です。

17 大惨事

結局、あれよあれよと言う間に場所を移って修練場。

自分で望んだことだとは言え、何故かアズではなくヴェールを睨んでいるクラウスを見て、隠さずに大きく溜息をついた。……この1人と1頭のケンカ(?)に巻き込まれている被害者であるような気がしないでもない。

2階の多目的フロアにあるこの場所には壁という壁は天井以外なく、ローマ神殿のように白く太い柱が何本も並んで開放感溢れるフロアになっている。計4つからなる修練場はどれも同じ内装をしていて、広さは大体高校の体育館と同じくらいか、それ以上。中央にある一本の渡り廊下を挟んで、2つずつ修練フロアが並ぶ構造になっている。

側面側にも壁はなく、外の景色がそのまま一望できる。ちょうどアズの立っている位置から外を眺めると、先ほどウィルが教えてくれた監獄塔が見えた。今度はあそこにも行ってみたい。

『威勢がいいのは口だけ?急にだんまりになっちゃって、ホントはアズと戦うのが怖いんでしょ?怖気づいたんでしょ?逃げたっていいんだよ』

ケタケタと意地悪く笑うヴェールを窘める気も起きずにげんなりした気持ちで傍観していると、またまたヴェールの挑発に乗るクラウス。

「小竜だと他の竜族にも相手にされないのか？戦う前に減らず口が多い奴は自分の置かれた立場とその場の状況を理解出来ない証拠だ。体だけでなく脳も小さいということか」

そして、やっぱり2人で火花を散らして睨み合う。

……「戦う」じゃなくてただの「組手」なんだけどな。それに組手するのはヴェールじゃなくてあたしなんだけどな。……うん、もういいけどね。

「おーい。いつまで睨み合ってるの？ホントに日が暮れちゃうって」

渡り廊下の淵に座ってちゃっかりギャラリと化しているウィルが声を張り上げて牽制する。その隣に柱に寄りかかったジーク、そしてジークの隣に立っているアリス。ヴェールは廊下側ではなく、外側に立って見ている。ウィードは体調が良くなったのか、仕事に戻ると言ってとぼとぼ歩いて飼育室に戻っていった。

「確かに時間の無駄だな。始めるか」

「よ、よろしくお願いします」

外套を脱いで腕まくりをしたクラウドがアズを見据えた。

「クラウド！アズは組手初心者よ。手加減してちょうだい」

「初心者？」

クラウドの眉がひそめられ、金色の双眸が小さく揺らいだ。

「ノワールのクズでも、あのゾイスを打ち負かしたセイレーンに手加減？……つまらないな」

「つまり、つまらないの問題じゃないんだけど」

クラウドの瞳が、まるで狩人^{ハンター}のようにアズを見ている事に身震いしてそういうと、クラウドは初めて仏頂面以外の表情をその中性的な顔に浮かべた。

「お前が本当に弱いのなら、あの時ゾイスに殺されていたはず。――少しは楽しませろ、セイレーン」

それは、ほんの少しの変化だったが、確かに笑った。

目を細め、楽しそうに笑ったのだった。

「それじゃ、始め！」

ウィルの声が鋭く響いた瞬間、クラウドが動いた。

「――へっ……もう！？ちよつとまっ――」

突然だったので慌てて待ったをかけるも、一気に距離を詰めてきたクラウドに驚いてその場から後方へ飛び退いた。

アズの想像していた「組手」とは全く違う。これは――。

「反応の良さはまずまず――か」

眩いたクラウドの声が聞こえたが、間髪入れずに長い脚が空を切って繰り出された。――普通女の子に向かって本気で蹴りを入れてくるかっ!?! しかも初心者だって言ってるのに、信じられない!

「ひゃっ!」

これも間一髪のところでなんとか避け、そのままたらを踏みながら距離を取って息を整える。

――アズ、何やってんのさ!?! さっさとその女顔に一発ぶちかまちなよ!

頭の中でヴェールの声。

シンクロによるテレパシーだと理解して、アズは心の中で叫んだ。

――組手って……もっとはじめの方から教えてくれるんじゃないの!?! こんな急に始まるなんて知らないよ!

――はあ!?!

そんな風に切り返されても困る。もっと、空手みたいなものを想像していたアズにとって、この世界の「組手」は想像を絶していた。戦い方や実戦の前組等をアドバイスしてもらいつつ実際に動いて飲み込むはずだったのに、これではどうすればいいのか分からない。

そうこう考えている間にも再びクラウドの脚が飛んでくる。アズは体をエビのようにくの字に曲げて間一髪でこれを避けた。

――おっ……お腹狙ってきた! あたしどうすればいいの!?!

——ゾイスをやったときみたいに思いつき行けばいいんだよ、思いつきり！体動かすの得意なんですよ！

「簡単に言ってくれるっ……！」

声に出して吐き出し、振るわれたクラウスの腕を流して払う。

別に空手や体術を習ってきたわけじゃない。けれど、電車で痴漢に合っていた女性を助けた時も、引ったくりに合った男の人を助けたときも、アズはなりふり構わず犯人を追いかけて引っ倒して捕まえたことは何度もある。

やり返されたことも、何度かある。けれど、その度にアズは独学で身に着けた体術で何度も危機を脱してきた。……「独学の体術」というのが漫画やアニメの見よう見まねなんて口が裂けても言えなかったけれど、それをモノに出来て尚且つ実際にやってのけたのは自分自身だ。

その身に着けた体術を今活かせないで、いつ活かす？

アズは人を助けるために強くなった。

放っておけなかった。

痴漢にあっているのに見て見ぬ振りをするあんな大人になりたく

なくて。

誰かを助けられる大人になくたくて。

「えーいっ！大怪我しても知らないんだからね！」

『やったれアズウーっ！』

か弱い女の子でいるのが嫌だった。

守られるだけの存在になりたくなかった。

「本気で来い！」

正しい戦い方なんてない。アズはアズの思うように動いて相手を翻弄させ、意標を突く。

クラウドを見据え、心の中が冷水を掛けられたようにすうっと冴えていく。

相手をシャドウと思い込む。アズの戦うべき者と、頭に認識させる。

足に力を入れて、思い切り床を蹴ってクラウドに向かって飛んだ。空中で右の拳をぎゅっと固め、後ろへ引く。そして、気合の声と共に、勢いよく突き出した。

＊＊

あ、と思った瞬間。突き出された拳はクラウドに難なく躲かれました。

が、問題はその後だった。

——ドゴオオオオオオオオオッ！

クラウドに当たらなかったアズの拳は勢い余って床に激突。そしてあり得ない破壊力で床を木端微塵に粉碎してのけた。これにはその場にいた自分、ウィル、アリスが驚愕の表情で目を見開いた。

『くっそー、当たらなかったあ！』

場違いな程に悔しがって尾を床に叩き付けているセブンスドラゴンを見やり、自然とクラウスに視線が向かう。相当驚いているように、普段表情を表すことが少ない奴の顔にも驚きの色がありありと浮かんでいる。

強いとは思っていたが、まさかここまでやってしまうなんて。

ベッドの上でリングを握り潰した所を目撃したとはいえ、正直ここまで怪力（ここまでくると馬鹿力）持ちだとは知らなかった。あんな強烈なパンチをまともに受けてしまったら、いくらクラウスと言えど無事では済まない。……と、思う。

「いくらなんでも、これは……」

アリスも口元を両手で押さえ、ふるふると首を振っている。大概の事が起こっても平常心を保って余裕の笑みすら浮かべるあのウィルでさえ、今は表情が消えている。

アズの起こした噴煙が立ち込める修練場の中央に、彼女の影がゆらりと動く。

ヴェールとテレパシーで何か会話をしていることはすぐにわかった。なぜなら、戸惑っていたアズの表情が段々と冴えたものに変わってきたからだ。何を話していたのかは分からないが、何か意思を固めたように見えた。

「い……」

小さなアズの声。外から流れ込む風が巻き上がった噴煙を流し、場内に新鮮な空気を入れてくれる。

晴れた視界の先に、大きくえぐれた床の中に右手を押さえてうずくまっているアズが目に入った。

「いったあゝ……」

よろよと立ち上がり、苦い顔をして震える右手を何度か振った。そして、顔をしかめたまま粉碎された床を見渡してさらに顔を歪める。

「やりすぎた……難しい」

『あの勢いのまま女顔にぶつけられてれば最高だったのに……って、アズ、手！手！』

「ちょっとやりすぎだわっ」

見かねたアリスが駆け出し、ヴェールと共にアズの傍に駆け寄る。見ると、彼女の足元には点々と赤い滴が滴っている――血、だった。

「無理もないよ、素手であれだけやったんだから」

ウィルも立ち上がり、ズボンについた埃も払わずに立ち上がり、耳元にある無線機に手を当てた。

「ドクター？俺ですけど……や、急患ってほど重症でもないんですけど、すぐに見てほしい人がいます。……症状？コンクリートの床を素手で木端微塵に粉碎させて血まみれ……え？いや、冗談じゃないくて」

ジークも駆け出し、ざっとアズの怪我を目視と臭いで確認した。
……幸い、骨は全くの無傷。折れている様子もないし、本人は血を見て真っ青になっているだけで出血の量もそんなに酷くない。一体どんな体の構造をしているのやら、異世界の人族はとても頑丈に出来ているようだ。

「クラウドス」

ゆっくりとこちらに近づいてきたクラウドスに気づくと、奴は至極真面目な顔をして、

「驚いた」

とだけ言った。

……うん、まあ、驚くよな、誰だって。

「……って、そうじゃないだろ」

肩を落として首を振ると、クラウドスはそのままジークの前を通り過ぎ、アズの前に立った。

「……？」

真っ青な顔色のまま不思議そうに顔を上げたアズを見下ろし、クラウドスは言った。

「もっと力を制御できるようになったら、もう一度手合せ願う。……楽しみにしてる」

「……ど、どうも」

かなりの間を開けてから、アズはとても驚いたような表情でそれだけ言った。……アズだけでなく、アズの肩を抱いていたアリスまでもが心底驚いた顔をしていた事から察するに、クラウドはたぶん「笑った」んだろう。あいつが笑うところなんて、まだ一度しか見ていない。ジークには背中しか見えていなかったので、とても残念だった。

言うだけ言ってクラウドはそのまま踵を返してさっさと歩いていく。

「おい、クラウドスッ……！」

思わず追いかけようと足を踏み出したが、アズに止められてしまった。

「怪我したのは、力をきちんと制御できなかったあたしのせいだから。明日からちゃんと制御できるように頑張って練習することにしたんだ」

そう言って、アズは疲れたように笑った。

「そしたら、もう一回クラウドに組手の相手してもらおう。今度はちゃんと出来るようにする」

無事な方の左手をぎゅっと握りしめ、硬い表情ながらも嬉しそうに笑っているアズが、なんだかとてもまぶしく見えた。

＊＊

「――で？怪我したのがクラウドじゃなくて仕掛けた張本人のアズだったと」

「……真に、申し訳ありません……です」

退院したばかりの病室に再びとんぼ返り。腕を組んで目を瞑っているゼノの前で、ベッドの上で正座をしてアズは頭を垂れた。

「しかも修練場の1フロアの床をぶち抜いて、しばらく使用不可にしたと」

「……………はい」

「その振動で厨房の食器が何枚か割れたと」

「……………はい」

ゼノに言われるたびに、頭が下がりにながって膝を通り越してベツドのシーツに当たる。

絶対に怒っている。あれだけ床を粉々にして、その振動のせいで二次被害も出てしまつて。おまけに仕事で忙しいはずなのに、こうして病室にまで来てもらつて……もう、まともにゼノの顔を見れない。

……見たらきつと、泣いてしまう。

簡単に泣きたくない。泣けば許してもらえんと思つていいのかと思われたくない。

「……」

せつかく綺麗に巻いてもらった包帯に、もう血が滲み始めていた。それは、力いっぱい拳を握りしめているせいかもしれない。とにかく長い沈黙に耐え続けた。

すると、頭上でゼノの深い溜息が聞こえた。ぎゅっと閉じていた目をうつすらと開けて、目の前いっぱい広がる白いシーツを見つめた。

「まあ、怪我がそれくらいで済んだから良かったとするか」

「……………え？」

思いもよらない一言。ゆっくりと顔を上げようとした所で頭をわしっと両手で掴まれ、驚いて体が強張った。

「力の制御も出来ないのに無茶して怪我した挙句、ガーデン内の施設破損……っていうか破壊？これらに対しては相応の処罰を取らせ

てもらう。本来なら、な。でも今回の件は、まあ異例中の異例だし、他に例もないから処罰のしようがない。よって無罪放免とする」

「ゼノツ……それじゃ困ります！ちゃんと自分のやったことには責任持つから罰してください！」

「だーめ。これがアズに対する特例処罰だからな」

「え？」

「責任は自分にあるとたっぷり自覚させておいて、あえて処罰を与えない。結構堪えるだろ？十分に反省してこんなことは繰り返さないこと。わかったか？」

頭を鷲掴みにされたままの姿勢で、アズはしばらくの間を置いて小さく頷いた。

自分が壊したのに、何も悪くない職員の人たちに後片付けも舗装もやらせてしまい、壊した本人は何もしないで黙って見ているだけ……正直辛い。怒鳴られて罰を与えられて手伝いをさらせてくれた方がよっぽどマシだった。

俯いたまま下唇を噛みしめると、頭を掴んでいたゼノの手が緩んで優しく上を向かされる。

「早く任務に就きたかったんだってな。アリスから聞いたよ。……ごめんな、焦らせて」

その言葉と優しいゼノの顔に圧され、ぐっと目の奥が一気に熱を持つ。顔を俯かせることができなかったので目を瞑ってせり上がっ

てくる気持ちを抑えて何度も首を振った。

「俺はいつでもそうだ。いつも大事なことを見逃して、気づくのが遅すぎて……何度も傷つけてきた。失ってきた」

大きな手が、包帯の巻かれたアズの右手をそっと包み込む。髪と同じ青みかかった黒い双眸に優しく見つめられ、アズは目を逸らせなくなる。

「もう後悔はしたくない。……出来ることなら焦らせたくはない。今回みたいなのが何度も起こったら俺の身も心も持たないからな。だから、今だけは焦らずに力の制御の事だけを考えて精進してほしい」

「……はい。本当にご迷惑をおかけして、すみませんでした」

アズの意に反して、ずびっと鼻が鳴った。そこから先は、いくら頑張ってももうどうにも止められなかった。

「あ……女の子に泣かれるのが一番困るんだよな。よしよし、お父さんの胸で泣きなさい」

頭を引き寄せられ、自分の胸にアズの顔を押し付ける。ぽんぽんと優しく頭を撫でられ、必死に我慢していた嗚咽でさえあっけなく口から漏れ出してしまった。

「……だんちよーが“お父さん”？……それってかなり無理あるっしょー」

「ばっ……ユリア！お前声でかいっ！」

「また女の子泣かせて……ホントゼノ团长って罪深いというか天然
というか」

「女性を泣かせることだけが得意なのよ、あの人は」

『どうでもいいけど中入っていい？なんでこんなところでソコソコしてんのさ。バレバレじゃん』

何やら聞き覚えのある声が複数。少しだけ顔をずらして見やると、スライドドアがほんの少しだけ開けられており、その隙間から見える人物が押し合いへし合いしながら代わる代わるアズとゼノの様子を伺っていた。

あれで隠れてみているつもりなのか、それとも茶化しているだけなのか。思わず笑ってしまった。

「……ホント、こんな扱いにくい生き物の集まってるこの团长なんて向いてねえな、俺……」

疲れたように、けれど顔はほんの少しだけ笑っていて。

それが妙に様になっていて、とてもカッコよかった。

『手、どう?』

時刻は夜の10時を少し回ったところ。病室フロアは就寝の時刻で、アズの部屋の電気も消されていた。

サイドテーブルに乗っている小さなスタンドに付けられているライトクリスタルの仄かな明かりだけが満たされている小さな病室の中に、ヴェールの気遣わしげな声が静かに響いた。

床に寝そべってアズを見つめる青い双眸を見つめ、アズはまだ熱を持っている瞼をこすって笑って見せた。

「包帯取り替えてもらった時にはだいぶ良くなったよ。驚いちゃった。あたしって怪力があるだけじゃなくて再生能力もすごいみたい。セピアノスのおかげかな?」

『それもあるかもね。夢の中でセピアノスに聞いてみたら?』

「うん、そうするよ。……ああ、なんだか今日は色々疲れたなあ……」

寝たまま右腕を天井に向けてかざし、真っ白な包帯を見上げる。

ちよつと力を入れただけでリングを潰せた。

かなりの力を込めたら床を粉碎させてしまった。

……じゃあ、もっともつと力を込めたらどうなる？

「きつと、大陸真つ二つになっちゃうね」

『……テレパシーで聞こえてるからいいんだけどさ、周りから聞いてれば結構恐ろしい独り言になるよね、それ』

「ヴェールには聞こえてると思ったらあえて言ったの。周りに人が居たら絶対に言わないって」

『ふーん』

大きな欠伸をして、ヴェールは犬のように体を丸めて眠りの体勢に入る。アズも寝返りを打ち、ヴェールの方に体を向けて囁いた。

「あたし、ちゃんと自分を制御できるように頑張るよ。この力を、人を傷つけることに使いたくないから。今のあたしは……考えたくないけど、きつと、怒りに任せて人を殺しちゃうと思うから」

『そうだね。アズはそんなつもりなくても、きつと相手は死ぬね』

「うん……。良かった、あの時クラウドが避けてくれて」

『俺的には別に当たってもよかったけどね……………嘘だよ、そんなに怖い顔で睨まないで』

ふっとヴェールを睨む力が抜け、一気に睡魔が押し寄せてくる。とろけるように微睡みつつある意識の中で、ヴェールが尋ねてきた。

『ねえ、アズ。……アズは、抱きしめられるの、嫌い？』

「……………どしてそんなこと聞くの？」

『別に。……ゼノが抱きしめたら、アズ泣いたでしょ？そんなに嫌だった？』

「ううん、違う。……優しさがあつたかくて、嬉しくて、それで泣いちゃっただけ。嫌とか嫌いじゃない……………よ」

『うん……………そっか。わかった。お休み、アズ』

「ん、お休み、ヴェール……………」

手を伸ばし、スタンドの明かりを消して一面が暗闇で染まると、アズの意識はすぐに深い眠りの中に堕ちて行った。

『俺にも、アズを嬉しくさせること、出来るよね』

窓から差し込む月の光に照らされたヴェールが、ポツリと眩いた。

17 大惨事（後書き）

メインであるクラウドさんではなく、サブであるゼノさんとヒロインであるアズさんをやたら絡ませたい今日この頃なのです。

18 変化（前書き）

長らく空けてしまいました……。
更新します^^

18 変化

セピア・ガーデン2階、多目的フロア。

一定の間隔で設置されている窓から朝の日差しが溢れる一本の長い廊下を、ジークは迷いなく歩いていた。

ジークの毎日は実に規則正しい。任務があるとき以外は毎日同じ時間に眠り、毎日同じ時間に目が覚める。それはジークの持つ血のせいだが、彼は割と自分のそんな性質を気に入っている。

野生の本能、というのだろうか。背くつもりはないが、どうにも逆らえないものであった。

「おはようございます、ジーク」

考え事をしながら歩いていた矢先、唐突に名前を呼ばれて肩越しに振り返る。

「お、ハンナじゃん。おはようさん、任務帰りか？」

朝の陽ざしが降り注ぐ廊下の先に立っているハンナが、はにかんで小さく頷いた。

あのノワール侵入事件の次の日から進んで任務へと出かけていたハンナが三日ぶりにガーデンへと帰ってきた。あのハンナが雑用や

小用ではなく、狩猟や討伐を遂行する連中のサポート役に自ら進んで同行したことには心底驚いた。あの弱気でおどおどしていた面影はなく、今はとても自信に満ち溢れているように見える。

「アズが大怪我したってウィルから連絡を貰って、急いで帰ってきたんです。これから病室に行こうと思って」

ハンナと連れ立って廊下を歩き、それを聞いてジークは頬をぼりぼりと搔いた。

「俺も今行くとこなんだけど……大怪我って程の怪我でもねえよ？もう治りかけてるし」

「そうなんですか？詳しくは教えてもらえなかったんですけど、一体何をして怪我を……？」

「ん？素手で修練場の床を木端微塵にぶち抜いた」

「こっ……！？」

予想通りに目を丸くして言葉に詰まるハンナ。ジークも「信じられねえよなあ」としみじみ頷いて歩みを進める。

ハンナもあの「リンゴぐしゃり事件」を目撃しているはずだが、やはり壊したものが果実に留まらなかったせいでアズの力がこの世界の次元を超えていることに驚きを隠せないようだった。

……うん、隠す隠さないの問題以前にあり得ないもんな、あれは。

「それでも骨折してないし、むしろ床のが重症。修復するのに1週間はかかるってよ。ホントにアズはすげえよな」

「笑い事じゃないですよ!」

ケタケタと笑い飛ばすと、ハンナは怒ったようにジークを睨んだ。前はこんなに自分の感情を表に出すような子ではなかったと思うが、これもアズのおかげなのだろうか。

そうこう話している内にアズの病室の前に到着した。

ハンナの表情が急に固くなり、伺うようにジークを横目で見つめてくる。

「なに? ちょっと怖気づいた?」

「違いますよっ。もう、すぐに人をからかうんですから……」

ニヤツと笑って見せればなぜかムキになって頬を膨らませる。違うと言いつつも肯定のように聞き取れた。

「じゃ、俺が開けてやるからさ。……ってか、この時間じゃまだ寝てるかなあ?」

そう言っつて、スライドドアをほんの少し開けて左目で中を覗いてみた。

アズの姿を探し、ベッドの方へと視線を向けて……無言でゆっくりとドアを閉める。

「……」

「やっぱりまだ寝てました？」

ドアを閉めたままの姿勢で黙っているジークにハンナが遠慮がちに声を掛けるが、ジークはその問いには答えず目をごしごしと擦っ
てもう一度ドアを少し開けて中を覗き見る。

……見間違いじゃなかった。

「……ジーク？ どうしたんです？」

「や、確かに寝てんだけど」

中を覗いたまま呟くと、ハンナが「じゃあまた来ましょう？」と
もっともな事を言う。しかし、そういう問題ではなかった。

アズの寝ているはずのベッドの中に見えた、

「あれ……誰？」

「は？」

とても長くて綺麗な、薄紫色の髪。

「……アズの寝てるはずのベッドに、見知らぬ女性が」

「……………」

眼鏡の奥にある目を数回瞬かせ、ハンナはぎこちない動作でジークの顔の下に頭をもぐりこませて隙間を覗き込み、

「……誰？」

たっぷりの間を置いてからジークと同じことを呟いた。

「俺に聞かれても……。病室は合ってるはず。とりあえず中入ろうぜ？」

「は、入るんですか！？もし違ってたら……！」

「声でかいっ」

慌ててハンナの口を塞ぐも、ベッドに横たわっていた薄紫色の髪の女性が身じろぎをして小さくうめいた。ぎよっとして2人で動きを止める。

「ん……」

上掛けからすらりと細い色白の腕が出てきて、億劫そうに髪をわしゃわしゃと掻きまわす。その女性のものとは思えないぞんざいな仕草に違和感を覚えた。

というか、女性というよりは少女と言った方が合っているかもしれない。華奢すぎるその細腕は、まだまだ未発達の幼いものに見えた。

「アズ……起きて。朝だよ」

その人物が声を発すると、上掛けのふくらみがもそもそと動く。どうやらここはアズの病室で間違いなさそうだった。……って、

「……ヴェール？もうちょっとだけ寝かせ……て？」

ここからだとは薄紫色の髪の毛の人物の頭しか見えないが、どうやらアズもしっかり目が覚めたらしい。

数秒の沈黙の後、その人物に視線を向けたままアズがゆっくりと体を起こした。上掛けがアズの動作に引っ張られ、寝ている少女からはだけて白い肩が姿を現す。

信じられないようなものを見るようなアズのその表情に、ジークはある1つの仮説を立てた。

あの少女は……信じられないけど、あの子は――、

「ヴェール、女の子だったの？」

「いや？一応雄だけど」

自然な流れでアズの視線が股間にいき、

「ほら、ちゃんと付いてるでしょ？」

当然、叫んだのだった。

＊＊

「……信じられないな、これは」

アズの悲鳴に駆け付けたゼノが椅子に腰かけ、とても真面目な顔つきでそう言った。

セピアノスの夢も見ないほどに深く熟睡していたアズを起こしたのは、見たこともないくらい完璧な容姿をしたとても可愛らしい女の子だった。

しかし、

「アズ、すごいむくれてるぞ。なんか声かけてやれ」

その張本人（？）であるヴェールは、ベッドの端に腰かけてあからさまに視線を逸らして頬を膨らませているのだった。

羨ましいほどに白く透き通った肌、薄紫色の絹糸のような細く長い綺麗な髪。

ちょっと端が吊り上がり気味の目は大きく瞳はくりくりとしていて、髪と同じ色のまつ毛もふさふさ。

小さな鼻に、グロスを付けたように艶やかに光っているぷるっとした下唇……。

「か……」

どこからどう見ても、もはや女の子にしか見えない。

「可愛いよヴェールウーッ！」

こらえきれずにむぎゅっと抱きしめると、「うぎゃ」と小さな悲鳴を上げて一緒にベッドに倒れこんだ。

「最初はびっくりして叫んじゃったけど、どっからどう見ても女の子だよ！ホントに可愛いよ！アイドル以上だよー！」

「……現金だね。俺の下半身見て“ぎゃーー！！変態馬鹿痴漢っ！近寄らないでー！！”とか叫んでベッドから突き落としたの誰だよ」

「うっ……。だって素っ裸だったんだもん。びっくりするよ」

「竜は服なんて着ないし」

2人してベッドに寝転がってそんな話をしている中、壁に寄りかかってこちらを見ていたジークが深々と溜息をついた。

「男の下半身の云々はどうでもいいけど、なんで人型になってんだよ。竜族が人の姿に変わるなんて話聞いたことねえんだけど。……ハンナは？」

「私も聞いたことないです」

ゼノの隣にあるもう一つの丸椅子に腰かけ、ハンナも小さく頷いた。

「そうなの？ヴェールが人になれてるなら皆そうかと思ったんだけど」

「ちっかう。俺だからなれんの。他の竜と一緒にしないでよね」

むくりと体を起こしたヴェールが不機嫌そうに言い、頭をぶんぶんと振って鬱陶しそうに顔をしかめた。

「なんでこんなに髪長いんだよ……、もう。人ってほんと不便だね。空も飛べないのによく生きてられるよね、不思議でしょうがないんだけど。アズ、これ縛って」

ヴェールの薄紫色の髪は一本一本がとても細く、手に取ってよく見るとうっすらと透き通って見える。そして日の光に当たるときらきらと淡く虹色に輝くのだ。

竜型時の体毛は、人型時では髪に反映されるのだろうか。実に興味深かった。

とりあえずベッドの端に腰かけてもらい、アズはハンナからもらった青いシュシュを片手にヴェールの長い髪をまとめにかかった。

「それにしても、雄なら雄なりの服をチョイスしてもらえよ。なんだよその格好……似合いすぎるだろ」

「これ、ユリアの服なんです。私が行って借りてきました。可愛いでしょう？」

ジークが言うのも無理はなく、今のヴェールの格好はまさに女の子そのものだった。

腕先と裾部分がきゅっと窄まっているふんわりとしたシフォン素材の白いカットソーに、ジーンズのミニ短パン。そして、ついつい目が行ってしまうニーハイを穿いた白く細い脚。

「……お前ホントに雄か？」

「雄だって。一体あと何回言えばいいんだよ」

トドメに、頬を膨らませて上目遣いのこのひと睨み。狙ってやっているわけじゃないのだろうが、悩殺ものだ。怒っているつもりでも全然怖くない。むしろ童型の方が怖い。

「ヴェールって一体いくつなんです？見たところ、ユリアと同じ年かそれより低いように見えますけど」

「別に歳の概念はないね。こんな体系になっちゃったのも深い意味はないし。たまたま？」

首をかしげてヴェール。急に動くものだからせつかく苦勞して纏め上げた髪が指の間からサラサラと零れ落ち、「ちよつと動かないで！」と釘を刺して頭を元の位置に戻した。

細くて髪量が少ないうえに癖がなく、見た目とは裏腹にとっても扱いにくい。おまけにとてつもなく長いせいで上げても上げても重力に従って下へ流れてしまう。これは悪戦苦闘しそうだ。

ゼノが顎に手を当てて苦笑した。

「……恐ろしくアバウトな能力だな。じゃあ年齢は自在に変えられるのか？」

「いや、それは無理」

頭を振りそうな気配があったので、空いている片手でがしつと押

さえた。

「なんでヴェールだけ人になれんの？特殊能力かなんか？」

「そんなところ。なんでなれたのか俺にもわかんないし」

「……ますますアバウト」

深々とため息をつくゼノを見つめ、ヴェールはぼそりとつぶやいた。

「たぶん、アズを抱きしめたいって思ったからだと思う」

「あたし？」

ようやく髪を束ねあげること成功した矢先に自分の名前が出てきたので、首をかしげてヴェールの後頭部を見た。

「竜のままじゃ抱きしめられないでしょ？アズは抱きしめられると嬉しいって言ったから、俺にも人みたいな体だったらいいのになって思った。……で、朝起きたら人になってた」

小さな手のひらを目の前にかざし、握ったり開いたりしてヴェールは言った。

「指が5本ってなんかすごく変。竜は4本しかないし、爪だってこんなに柔らかくないし……でもすらっと長くて見てて気持ちはいね。二足歩行っていうのも新鮮。視線は低くなったしバランスとるの難しいけど。……あ、尻尾ないや。変なの」

人型の感想を述べ続けるヴェールに、その場にいた全員から思わず笑みがこぼれた。こうしていると、まるで本物の人族の女の子のようだった。

「竜には戻れるの？」

「うん。でもまだこのままがいい」

ベッドから投げ出した細い脚をぶらぶら振りながら、アズの問いにヴェールが答える。

「はい、できた。ポニーテールならぬドラゴンテールの出来上がりー！」

ようやくまとめ終えた髪を前へ払い、アズは万歳してそのまま伸びをした。「おおー」とヴェールの口から感嘆の声が上がる。

「すごい。全然邪魔じゃないよ。これなら気にならない」

「でしょ？でもまとめるの時間かかるからあんまり解かないでね」

頭を左右に振るたびに揺れる髪が気に入ったのか、ほっこり顔のヴェールは嬉しそうにポニーテールを触ってはまた頭を振るの繰り返し。ハンナが優しい眼差しでその様子を見ている中、ようやく任務(?)を達成したアズはベッドから降りて立ち上がり、右手の包帯を解いた。

「もういいのか？」

「はい。痛くないし、なんか治ったような気がします」

しゅるしゅると解いた包帯を絡め取り、ガーゼを取ってゼノに差し出した。

「本当だ……完治してる」

「マジで？」

ジークも近寄ってきて屈みこみ、右手の甲をじっくりと眺めて「信じらんねー」と驚いたように目を見開く。

「驚異的だな。さすがはセイレーン」

「関係あるのかな？」

「大有りだろ」

右手を握ったり開いたりと繰り返し、ぐっと握りしめて「よし」と頷いた。

「あたし、これから力加減を勉強します！何か柔らかい物ってますか？」

「柔らかい物……？あ、ラムの実がいいんじゃないか？」

「ああー、ラムの実っすか。食堂に行けば貰えるかもよ」

「ラム？」

首を傾げると、「この世界で一番柔らかい果物です」とハンナが

説明してくれた。

「おお、練習するにはもってこいだね！ヴェール、さっそく食堂に行こう！」

「行く！」

自滅してしまうほどの馬鹿力を制御すべく、さっそくアズはヴェールと連れ立って食堂へ向かうことにした。

きちんとコントロールするためでもあり、何より、クラウドとの組手もまた楽しみだからだった。

「あ、私も一緒に行きます。分からない事が多いでしょ？」

「助かるよ！ありがと、ハンナ」

椅子から立ち上がるハンナを廊下で待ち、3人で肩を並べて食堂へと歩き出した。

＊＊

病室を出て行った3人を見送り、ゼノは空っぽになったベッドに

向き直って腕を組んだ。

「ヴェールの事、どう思う？ ジーク」

呼びかけると、「うーん」と考え込むような唸り声が返ってきて、ジークがベッドの端に腰かけて天井を仰いだ。

「普通じゃないしろ、アブノーマル種だってあんな芸当ができる訳がない。ヴェールは“特殊能力”のようなものだと言っていたが……俺は信じられない」

「確かに、人と竜はまったく異なる種族っすもんね。“なりたい”と思うだけでああも完璧に擬態？ できるとなると、疑う方が難しい気がしますけど。なにせ幻の竜っすからね、何をしてでも納得できるというか」

「……」

ジークの言うことにも一理あるが、裏を返せば何でもできるということになる。ヴェールは人型に姿を変えられるが、年齢は変えられないと言っていた。

「なにか理由があるはずだ。……本人はとぼけているのか本当に分かっているのか、俺としても断定できないが」

深く息を吐いて目を閉じ、ふと先日の事を思い出す。

「そういえば昨日、飼育室にいたウィードと話をしたんだが……ヴェールの体つきは成竜そのものだと言っていたな」

「へ？でも人型はユリアよりもいくつか年下に見えたっすけど」

「そこが問題だ。竜型は小柄でも成竜そのものだっていうのに、何故人型時はあんなに幼いんだ？あの体つきは10代前半くらい……何故だ？」

「もしかして、ヴェールって実は結構幼い……とか？」

「成竜の体つきで、か？」

「他の竜と比べれば体は成竜でも、セブンスドラゴンという種の中では幼いとかって事じゃないですかね？あくまで憶測の域ですけど」

「……ふむ、そういう考え方もあるか」

ジークの答えに納得して頷く。幻も幻、今まで本物を誰も見たことがなかったセブンスドラゴンだ。そういう生態だったとしてもおかしくはない。

「知らないことばかりで、どうも自分の物差しで世界を測ってしまふな。……もう少し、アズみたいに素直に物事を受け止められるようになった方が変に悩まなくて楽か」

「素直すぎんのも問題ですけどね」

「それは言えるな」

思わず苦笑して頷くと、「あ、団長ひでえ」と張本人が呆れ顔で返してきた。お前が言ったんだろが、と言おうとして顔を向けたその時、ドアの向こうで小さなノックが聞こえた。

「だんちよー、いるー?」

ユリアだった。

「ああ、開いてるぞ」

答えるとドアがスライドし、大きな肩掛け鞆を下げたユリアがとこと病室に入ってきた。猫目がベッドの上に腰かけているジークを捉えた途端にぴゅっと細まり、ゆらゆらと揺れていた尻尾がぴたっと動きを止めた。

「うぎゃっ! ジークッ!」

「なんだ、嬉しそうな声出して」

ぱっとゼノの背中に隠れるようにくっついてきて、ユリアは猫耳をぺたっと後ろへ倒して猫のように唸った。そんなユリアをからかうようにジークがにやにやと笑って声をかける。

「全然嬉しくない! なんでここにジークがいんのさ!? まさかアズの寝込みを襲う気……!?!」

「おーい、思い込み激しすぎ。なんですぐそっちへ行くんだよ」

「日頃の行いが悪いからだ!」

「……あ、そうっすか」

服の裾をぎゅっと握って離さないユリアを持て余し、ゼノは今日

何度目になるかわからないくらいの溜息をついた。……ここ最近の溜息ばかりついていっているような気がする。年かもしれない。

「もっと仲良くできなのか、お前たちは」

「俺はいつでも準備オッケーなんすけどね、この子猫ちゃんだけがどうも懐いてくれないんすよ」

「他のチビ達は絶対洗脳されてる！こんな犬畜生と仲良くなんて出来ない！絶対、死んでも、イヤー！」

「……そこまで嫌われてるのか。昨日はまだ良かったのに一体なにやらかしたんだ？」

「ああ、団長ひでえ！理由を聞きもせず俺が悪者！？」

「日頃の行いの悪さだ！少しは悔い改めろ！」

べーっとざらざらした舌を突きだし、ユリアがあっかんべーをするとさすがのジークも多少なりともカチンときたのか、笑顔のまま目元がぴくっと引きつった。

さすがにそろそろ止めに入らないとえらい騒ぎになりそうだったので、話を逸らすためにユリアに向き直った。

「で、俺に用があったんだろ？またリノ婆からの手紙か？」

「うんにゃ、もっともっとお偉い御方からの手紙」

舌を引っ込めたユリアが大きな鞆に手をつき込み、すぐに綺麗な

白い封筒を差し出した。

手紙を受け取り、その右隅にある金色に輝くエンブレムを視界に入れた瞬間、ゼノは息をのんだ。

「……まさかこんなに早く来るとは思わなかったな」

「誰からですか？」

興味津々で覗き込んでくるジークに見えるように手紙のエンブレムを見せ、

「ルディアナ国王陛下直筆の、招待状だ」

にこっと笑って見せた。

18 変化（後書き）

結論。

ヴェールは、超絶可愛い女の子！！

……みたいな男の子です？

19 緊急任務！？

緑豊かな東大陸のルディアナ王国領土に点在する、大小様々な街や村。それぞれが林業や農作、商業で豊かに繁栄している中、今まさに、巨大な鉱山のふもとにある小さな村で大きな事件が起きようとしていた。

「あうう、どうしよう……どうしよう」

鉱山からなだらかに下っている木々の合間を縫うようにして飛ぶ小さなピンク色の光が、か細い声でそればかりを繰り返す。あっちへいたりこっちへいたり。そうしながらゆっくりと下へと下っていく。

「あう、本当にどうしよう。大変な事になっちゃうの……」

ふわりと浮上し、木々の上からふともの小さな村を見つめては、また「どうしよう」と繰り返して空中でおろおろ。

ピンク色の光が視線をふともの村からはずし、くぐもって聞こえる地鳴りのする方へと向ける。物凄い砂煙を巻き上げながら村目がけて一直線に突き進むそれを見て、ピンク色の光はぴゅと飛び上がった。

「ひゃーっ！ ホントにまずいの！ みんな死んじゃうのーっ！！」

事の一部始終を見ていたその光は焦りに焦り、とにかく大変な事態になることを村人たちに伝える決意をする。

「見られちゃまずいとか言ってる場合じゃない!……うん、やるの。やるのよりリム!今こそ根性見せるのよ!」

ピンク色の光は大きく膨らみ、そして光の粒子となり一瞬にして弾けた。ふわりと風に舞ったピンク色のふわふわした髪をなびかせ、姿を現した小さな妖精は透き通る4枚の羽から光の鱗粉を振りまき、

「リリム、行きます!」

両手の拳を突き出してロケットの如く村目指して飛んで行った。

＊＊

ぶちやつ

「……」

ぶぶちやつ

「……………」

ぶちゅっ　ぶちゅっ

「……………」

ぶしやぐちやぐりゅぐちゅべちやべちやべちや……

「……っあー！！もう止めるアズ！っていうか止めてくれ！聞いているだけで憂鬱になる！」

「えー、まだ1個も成功してないのに」

だん！と机を叩いて立ち上がって叫びだすジークを見上げ、アズは頬を膨らませた。

世界一柔らかいと言われるラムの実を使ってこの馬鹿力を制御す

るべく3人で食堂へ移動。大きな器いっぱいラムの実を貰ったは良いものの、これが中々難しくうまく摘まむことが出来ない。

後から様子を見に来たジークも加わったが、アズが次から次へと実を潰していく様に耐えられなくなったのか、今に至る。

「どれだけ潰せば気が済むんだよ！俺もう耐えられねえよ！」

「私も、だんだんラムの実が可哀そうになってきました……」

器に留まらず、机の上にも潰れて零れ落ちた無残な元・ラムの実
は、果汁が紫色。実が熟れていない物は赤色をしており、紫と赤の
果汁が混じり合って果肉が飛散していててらと怪しく光り輝い
てこの光景を一言で言ってしまうば、

「すごいグロテスク」

まさに、ヴェールの言う通りなのであった。

「グロいってのもあるけど、何より無表情でラムの実をひたすら潰
してくアズのが恐ろしい！」

「無表情だなんて失礼な。真剣な表情って言ってよ」

自分の肩を抱いて畏怖の籠った目で訴えてくるジークを半眼で見
返し、アズは手に付いたラムの実をぺろりと舐めて「うまうまかな
いなー……」とため息をついた。

「落ち込まないで下さい、アズ。失敗は誰にでもあるんですから、焦ることないですよ？」

「そうだよ。見た目グロいけどおいしいよ」

ハンナの優しい言葉にきゅんとした後、ヴェールが器に顔を突っ込んでぺちゃぺちゃと犬のように食べ始めたものだから「ぎゃー！」と叫んでしまった。

「かみっ……髪入ってる！止めてヴェール！せめて人型の時だけはそういうことしないでー！」

「なんでー？」

「なんでも！少しは人の目を気にしてよ！」

「はあ……。俺部屋に戻るわ」

器を離そうとしないヴェールと取っ組み合って騒いでいると、ジークが疲れたようにそう言っって背を向けて歩き始める。するとその時、ジークとハンナの耳元で「ピピッ」と無線機の呼び出し音が鳴った。

「はい、ハンナです」

耳元に手を当ててハンナが応答すると、しばらくの間を置いて唐突に顔色が変わった。

「ジークッ……」

「ああ、俺も今聞いた」

立ち上がるハンナがジークに呼び掛けると、こちらを振り向いてジークも真剣な表情で頷いた。

アズとヴェールは2人で顔を見合わせて首を傾げ、「何かあったの？」と2人に尋ねた。

「今アリスさんから連絡があつて……緊急事態が発生したって」

「緊急事態……？まさかシャドウ？」

「いや、今回はシャドウもノワールも絡んでない。……ここで立ち話してる時間はない、か。歩きながら説明するからとりあえず指令室に行こう」

ジークの言葉に頷いて、席を立て足早に食堂を出た。

「ここから北にすこし上がったところに、東大陸の中でも結構でかいゴンゴル山って言う鉱山があるんだ。その鉱山のふもとにある村がなんかヤバイ事になってるらしい」

「村が？」

4人で階段を駆け上がる中、先頭を歩くジークの話にアズは首を傾げた。

「何でも、1頭のロックドラゴンが村で大暴れしているとか。急いで止めに行かないと死人が出てしまいます」

「ロックドラゴン！？人の村にい？」

ヴェールが信じられないように目を見開き、「一体何やらかしたんだよ」と呆れ顔で溜息をつく。

「ロックドラゴンって、鉱山にいる竜だよね？なんで人の村で暴れてるの？」

「決まってるじゃん。人がロックドラゴンを怒らせるような事したに違いないって」

「そんなことは後で聞けばいい。今は急いで現場に行ってロックドラゴンをおとなしくさせるのが先決。じゃなきゃマジで人が死ぬ。あんなゴツゴツしたデカイ竜が暴れて人も村も無事で済むかっての」

実物のロックドラゴンを見たことがないアズには想像もつかないが、ジークとハンナの会話から察するに相当大きな竜なのだろう。ウィードには正式名と別名しか教えてもらっていなかったことに今更ながらに気づき、ヴェールにそっと尋ねてみた。

「ロックドラゴンってどんな竜？ゴツゴツしてるって言ってるけど」

「うん。主食が岩だの鉱石だの硬いもんばっかだから見た目も触り心地もゴツゴツのザラザラ。鱗じゃなくて食べた鉱石がそのまま皮膚になってるから竜族の中で一番硬いんだ。すんごい重いから翼はなくて、竜っていうかでっかいトカゲみたいな竜族」

「へえ……痛そうだね」

大きなトカゲにゴツゴツのザラザラした岩をたくさんくっ付けた

姿を想像して、アズは思わず顔をしかめた。そんな怪物が村で暴れようものなら、ジークやハンナが焦る気持ちも分かる。人の作った村など、大きなロックドラゴンにとっては紙くず同然。本当にひとたまりもないだろう。

「団長！」

4階の廊下を突き進み、先頭に行くジークが白い両開きの大きな扉を開け放って中へ入った。アズたちもそれに続くと、円形に並んでいる広い机の一角に立って数人の人と何やら話し込んでいたゼノが顔を上げてこちらを見た。アリスも一緒にいる。

「ジーク、ハンナ、来てくれたか。……って、アズも一緒か」

なんとなく来てほしくなさそうな顔でそう言われてしまい、アズはピタリと立ち止る。

「ゼノ、いくら戦闘経験がないからってそういう言い方はないでしょう。むしろ今回はアズに行ってもらった方がいいんじゃないかしら？」

「馬鹿言うな。今回の任務は手の甲の怪我だけじゃ済まないんだぞ……下手したら死ぬかもしれない」

目を伏せて顔を歪ませるゼノを見て、ああ、心配してくれていたんだと思わずホッとしてしまった。迷惑ばかりかけてしまっているから邪険に思われているのかと勘違いしてしまった自分が恥ずかしい。

「団長、どうするんすか？」

「ああ、今それを話し合っていたんだが、正直話している時間も惜しいところだ。たった今避難している村長から連絡が入ったんだが、どうやら逃げ遅れた村民が何人かいるらしい。しかもその中に小さな子供も3人いるそうだ」

「えっ!？」

アズたちの声が重なる。ゼノは続けた。

「ロックドラゴンはどうやらその子供たちを追っているらしい。何をしたのかは村長もわからないと言っていたが、鉦山の方へ遊びに行っていたその子供たちが憤ったロックドラゴンに追われて村に戻ったきた事は認めている。きっと鉦山の方で何かあったんだろう。……とにかくすぐに現場へ向かってほしい。今ガーデン内にいてすぐに戦えるクリスタルマスターはお前たち2人だけだ。チームを編成する時間もないからとりあえずそのまま直行してくれ。後から何人か増援に向かわせる」

「え、クラウドとウィルの奴はいないんですか？」

「……今朝方、任務へ行った所だ」

「ロージィは？ あいつはハンナと戻ってきたばっかなんじゃない？……？」

「ロージィはちょっと先日の任務で怪我をしまして……今は医務室の方にいます」

「他のメンバーは今すぐに直行できない。だからお前たち2人に……」

「あのっ！あたしも行かせてください！」

ゼノの言葉を遮るように大きな声を出すと、その場にいた全員の視線が一気に集まった。アズは怯むことなくゼノの目をまっすぐに見つめた。

「あたしとヴェールなら他の人たちよりも早く行けます。ヴェールは凄く早く飛べるんです。——だよね！ヴェール！」

「へ？……ま、まあ、本気出せばざっと5分くらいで行けるけど」

目で「賛同しろ！」と訴えると、それを察したヴェールがポニーテールを揺らしてカクカクと頷いた。

「アズが？……いや、しかし」

「俺、賛成ですね。確かにロックドラゴンはデカくて危ないかもしれないけど、アズにはヴェールもいるし、何よりセピアノスだってついてる。それにあの馬鹿力を使えば一瞬で片付くかもしれないじゃないっすか」

「……」

「ゼノ、何事も経験よ。アズを大切に匿っておきたい気持ちは分かるけれど、彼女はこの世界を救うためにセピアノスに選ばれたセイレーンなんだから。危険だという事くらい承知の上よ。——ね、アズ？」

「はい！」

アリスの言葉に力強く頷いて見せると、ゼノはしばらく押し黙った後、

「……わかった。アズ、くれぐれも気を付けるんだ。何かあったらすぐに退くこと」

「はい！」

もう一度頷くと、ゼノの周りにいた黒い制服を着た人たちがさつと動きだし、それぞれがモニターに向かって座り、半透明なキーボードのような端末に素早く指を滑らせた。

「こちらセピア・ガーデン指令室。すぐにクリスタルマスターを送ります。今しばらく持ち堪えてください」

1人の男性が口元に浮かんでいる小さな青いクリスタルにそう話しかけると、ノイズの混じった中年の男性の声が返ってきた。村長と連絡を取り合っているのか、あれが無線機と呼ばれるクリスタルだと分かった。

「ヴェール、今すぐに竜型に戻るか？あの窓で待機してくれ」

「わかった」

ゼノとヴェールのそんなやり取りを片耳で聞いていると、ジークとハンナもそれぞれ動き出した。

「アズさん、これを」

傍に寄ってきた黒制服の女性に声を掛けられて顔を向けると、何かネックレスのような物を首に掛けられた。

「これは竜に乗る人すべてが身に付けている、風圧をほぼ無効化できるクリアクリスタルです。どうか身につけて下さい」

「あ、ありがとうございます！」

優しく微笑みを浮かべた女性に頭を下げた。

風圧がなければ高速で飛ぶヴェールの邪魔にならなくていい。こんな便利なアイテムがあることに感謝しつつ、アズが踵を返してヴェールの所へ向かおうとすると今度はハンナに呼び止められた。

「アズ、私の無線機を持って行って下さい。常に連絡が取れるように」

「わ、ありがとハンナ！」

あの村長と連絡を取っていた男性の口元にあったのと同じ青いクリスタルの付いた小さなイヤリングを耳に付けてもらい、アズはお礼を言った。

「私たちも後からすぐに行きます。……アズ、本当に気をつけて下さい。くれぐれも無茶はしないで」

「分かった。ありがと……ハンナ」

きゅ、と優しく抱きしめられ、アズもそっとハンナを抱きしめる。

『急ぐんでしょ？行くよ、アズ』

「うん！今行く！」

竜型に戻って大きな窓枠に前足を引っかけてこちらに背を向けているヴェールに急かされ、アズは走りながらゼノとアリスに振り返り、手を挙げた。

「行ってきます！」

ヴェールの背に飛び乗り、身を乗り出して外へ飛び出したヴェールが翼をいっぱい広げて強く羽ばたき、風に乗って一気に空へ舞いあがった。

「すごい、全然風圧を感じない……」

初めてヴェールに乗って飛んでいた時は風圧のせいで目も開けていられなかったのに、クリアクリスタルのおかげで体が風に圧されることもない。後ろを振り返れば、セピア・ガーデンが見る見るうちに遠ざかっていく。

飛び立った窓から見えたゼノの姿を見えなくなるまで見つめ、アズは正面に向き直ってヴェールの首をしっかりと掴んだ。

「超特急だよ、ヴェール！」

『わーってる！5分なんて言わずに3分で行っちゃうからね！落ちないですよ！』

言われるまでもなく体勢を低くしてヴェールの体に密着させる。

ヴェールは翼を力強く羽ばたかせて風を掴み、流星の如く空を駆け抜けた。

＊＊

「あうっ！」

「キキ！」

自分の後ろで派手に転ぶ音がして、セリムはぱっと振り向いた。見れば妹のキキが半泣きで地面に倒れこんでいる。セリムは慌ててキキを助けに踵を返す。

「セリム、早く！あいつが来ちゃうよう！」

「分かってる！……キキ、大丈夫？」

「痛いよう、痛いよ……」

ぐずぐずと泣き始めるキキの肩を抱いて立たせ、セリムはレントの待っている物陰まで引っ張っていった。

「ここまで来れば大丈夫だと思うんだけど……」

「大丈夫なわけないだろうっ！ 竜はみんな鼻がいいんだからすぐに見つかったちゃうよ！」

「ばっかつ、大きな声出すなよ、見つかったちゃう……！」

恐怖と不安で苛立って声の大きくなったレントの口を慌てて塞ぐと、後ろの方で轟音が轟いた。

「ひっ！」

その音に3人が飛び上がる。がくがくと震えながら音のした方を見ると、家が壊されたのか、砂煙と黒い煙が一緒になって空に舞い上がっているのが見える。

——その煙の合間にちらちらと見え隠れする茶色い体を見た途端、思わず泣きそうになった。

「ガアアアアアアアアアッ！！」

頭がガンガンするような大きな鳴き声を上げ、そいつはセリム達を踏み潰すべく歩き出す。

どうして、こんなことになってしまったのか。

ゆっくりと、だけど確実にセリムたちの隠れている方へと歩いてくるロックドラゴンを見つめ、セリムは思った。

ただ、綺麗な石を探しに鉱山へ行ったただけなのに、どうしてこんなことに……？

「お兄ちゃん……怖いよう、こっちに来るよう」

泣きじゃくるキキを胸に抱きしめ、セリムは悔しくて歯を噛みしめる。

「逃げようよセリム！村から出よう！ここにいたらみんな死んじやうよ！」

「う、うん……キキ、立てる？」

僕たちはただ、お母さんが喜んでくれるような綺麗な石が欲しかっただけなのに。

「お兄ちゃん、足、痛いよお……」

「怪我したの？背中乗って」

転んだときに擦りむいたのか、キキの両膝に血が滲んでいた。セリムはキキを背負って立ち上がる。

「セリム、こっち！」

レントに先導され、物陰に隠れながらそろそろと進むと、背後でまた大きな音がした。キキが背中に顔を埋めてぶるぶると震えだす。

「僕たち、何も悪いことしてないのに……」

前を歩くレントが悔しそうに言う。セリムもその通りだと思った。

何も悪いことをしていないのではなく、正確には何もしていない。ただあの場所で、3人で穴の中を覗いて――、

「――！」

その時、突然辺りが急に暗くなった。

「お兄ちゃんっ！上——」

キキの悲鳴に反応し、セリムは上を見ることなく一気に真横に飛んだ。頭で考えるよりも、体が勝手に動いていた。

そして、たった今セリムがいた場所に、大きな角材が地面に深々と突き刺さる。

「——っ!？」

地面に尻餅をついた状態でその大きすぎる角材を凝視して、セリムは呼吸が出来なくなっていた。倒れた衝撃で落としてしまったキキにすら気を配れない。ただ愕然と角材を見つめたまま、がくがくと震えるしかなかった。

「あ……」

そして、目の前に立ちはだかり、息も荒くセリムを見下ろす巨大なロックドラゴン。もうすぐ目の前にいるのに、セリムは何も考えることが出来なかった。

ただ漠然と、ああ、死んじゃうのかな、とぼんやり思う。

「セリム！逃げて！」

レントが地面に這いつくばったまま叫ぶが、セリムは動けなかった。

「グルルル……」

ロックドラゴンの大きな口が、ゆっくりと近づいてきた。

ほんの少し開けられた口の中に見える歯はどれも尖がっていないくて、人の歯のような形をしている。あ、そうか。尖がってたら石なんて食べられないか。でなきゃ欠けちゃうもんな。――頭が壊れてしまったのか、そんなどうでもいいことをいちいち考えてしまう。

「お母さん……」

ロックドラゴンの口を見ながら、セリムは無意識に母の名前を呼んだ。

けれど、

「ちよおっつと待ったああああああ――――――っ!!」

「ギャウツ!?!」

突然空から降ってきたアズに驚いた挙句、背中に堕ちてきた衝撃で耐え切れなかったのかロックドラゴンは潰れた声を上げて地面に突っ伏した。

「ええっ、あたしってそんなに重い!? 嘘でしょ!?!」

背中から落ちて地面に尻餅をついたままアズが叫ぶと、舞い降りてきたヴェールも信じられないような目でアズを凝視し、

『アズって結構重かったんだね……俺って力持ち』

「……うん。どう突っ込んでいいのかな」

そんなどうでもいいやり取りはいいとして、アズは立ち上がると放心している男の子に小走りで駆け寄った。

「君、大丈夫? 怪我してない?」

屈みこんで尋ねると、男の子はゆっくりとした動作でアズを見上げ、「……あ、はい」と頷いた。

「僕は大丈夫だけど、妹が……」

「妹?」

見れば、女の子が地面に倒れこんでいる。

『ほらアズ、起きたよ。やっぱ怒らせちゃったな……だから言った

のに』

ヴェールの声に振り向くと、ロックドラゴンが起き上がって鼻息を荒くして酷く唸っている。……これはなかりマズそうだ。

「ヴェール、この子たちお願い！こいつはあたしが引き付けるから！」

そう言いつつも女の子を抱き上げて男の子に手渡し、「あの竜に乗って」と優しく声をかけた。男の子は頷いて女の子を抱きかかえ、こちらに走ってきたもう1人の男の子と一緒にヴェールの方へと走って行った。

『アズ！ロックドラゴンは滅茶苦茶硬いけど腹部だけは柔らかいから！そこ狙って！』

「お腹か——分かった」

ヴェールに笑って頷いて見せ、アズは肺の中にあった空気をすべて吐き出した。深く深く深呼吸して、目の前にいるロックドラゴンを下から睨み据える。

「いくよ。——戦場の女神」
ヴァルキリア

アズの心に応え、背中に3対の真っ白な羽が出現する。そのうちの真ん中の一对の羽を腕をクロスさせて掴み、一気に引き抜く。

——二刀神、番
にとうじん つがい

「何があつたか知らないけど」

背中に残った二対の羽を消失させ、アズは番の切っ先をロックド
ラゴンに向けた。

「ちょっとやりすぎだよ。――何があつたの？」

聞いても無駄だとヴェールに言われていたが、やはりきちんと聞
いておかねければならない。相手に応える気があるなら念話で返し
てくれるはずだが、

「ガアアアアアアアアアッ!!」

口をカッと開けて目の前で繰り出される咆哮に顔をしかめ、「や
っぱ無理か……」と少しばかり落胆する。

これで事情を話してくれば痛い事なくて済むのにな。

「ちゃんと聞いたからね？ 後から文句言わないでよ！」

番を構え、アズは少しの恐怖とたくさんの興奮で無意識に口角が
上がった。

すごく怖い、と思う反面、早く戦ってみたい、と思う心がごつち
やになって、心臓がバクバクとすごくうるさい。体が震えるのは、
きつと武者震いだと思った。

アズの初任務、初討伐の相手が竜族で最も硬いロックドラゴンだ
と言うのはかなりハードルが高いけど、

「行くよ」

だからこそ、戦ってみたいと、心から強く思った。

20 緊急任務！？

アズの目に映る世界が一瞬で変わり、ロックドラゴンの大きな腕が振り下ろされる動きがはつきりと見て取れた。すっと体を後ろに滑らせると、アズを踏みつけ損ねた腕が地面にめり込んで砂埃を巻き上げて陥没させる。

ヴァルキリア
戦場の女神を具現化させると、どうやらアズの目はセピアノスのような金色の瞳になるようだ。きっとそのおかげで相手の動きをはつきりと捉えること事が出来るのだろう。

「グルルルル……」

攻撃を躲された事にいきり立つロックドラゴンが地面から腕を引き抜くと、立て続けに腕を振るい始めた。

「――っ！」

人5人分はあろう太さの、しかも岩やら鉱石やらが引っ付いた掠っただけでも皮が剥けそうなゴツイ腕を片方だけぶんぶん振り回され、アズは悲鳴を飲み込んで仰け反った。――が、次の瞬間、ロックドラゴンは一瞬だけ上半身を浮かせ、体を支えていたもう片方の腕まで使って横に薙いだ。

薙いだその腕が確実に自分に当たると確信した瞬間、アズは無意識に顔を顔の前でクロスさせた。

——ギイインッ！！

ロックドラゴンの腕が番と衝突し、力で負けたアズは軽く弾き飛ばされた。離しそうになった番を必死で握りしめ、どうにか足を踏ん張らせて転ぶことだけは回避する。

「はあっ……はあっ……！」

少しでも気を抜けば確実に死ぬ。

その事実がリアルにアズの体に浸透していき、これが死と隣り合わせのクリスタルマスタアの担う仕事なのだと実感する。そして先ほどからアドレナリンが大量分泌されており、興奮状態にある体がまた無意識に動こうとするのを気力でどうにか抑え込んだ。

ロックドラゴンもアズと同じ状態にあるのか、目が異様にギラついている。闘争心を駆り立てられているのか、鼻息が荒い。目も血走っている。

このまま戦っているのは、最悪殺してしまうかもしれない。父親の死以来、“死”という存在とは縁遠い環境で育ってきたアズにとって、“生き物を殺す”という行為にはとても抵抗がある。それはこの世界でも同じことだ。……簡単に殺すなんてことはできないし、したくない。

だいぶ頭も冷静になり始めたので、アズはロックドラゴンに背を向けて走り出す。すると褐色岩竜の別名を持つ竜も荒々しい咆哮を上げて走り出す——もとい、突進してきた。

「やっぱ追ってくるかつ！」

弾き飛ばされたばかりなので真正面から受け止めるなんて度胸はない。相手が動かず、尚且つ生き物でなかったら何の躊躇もなく殴れると思うのだが……残念ながらそれはどちらも当てはまらない。

決して足が遅い方ではないが、見る見るうちにロックドラゴンが迫ってくる。やはりいくら運動が得意でも、所詮二足歩行では四足歩行に勝てないのだ。足の数と歩幅、そして体格の差だ。

「とりあえず動きを止めないと……上から行くか！」

アズは走りつつ背後を振り返り、ざっと辺りを確認する。ここは居住区のように、木製の家が10メートルの間隔を置いて向かい合うように立ち並んでいる。その横にも家が連なり、道を囲うような構造をしている。

家の屋根に登ればロックドラゴンの背中に飛び乗れそうだ。

アズは手近の民家に目をつけ、表に出ている大きな木箱に足をかけて屋根目がけてジャンプした。

――が。

「うっひゃあ!!」

何をどう間違えたのか、屋根の縁に手を掛けられる程度のジャンプをしたつもりなのに、勢いをつけすぎて屋根の上を軽く超えて煉瓦製の煙突の上に着地してしまった。しかも驚いたせいでバランス

を崩して落ちそうになり、なんとか持ちこたえて体勢を戻して安堵の息を吐き出す。

「あ、危なかった……」

まさかあんなに跳ぶなんて思わなかった。番を持ったままの手の甲で額の汗をぬぐい、アズは眼下で唸り声を上げているロックドラゴンの背を視界に入れて迷うことなく跳んだ。……今度はしっかりと加減をした。

その成果か、飛び越えることなくロックドラゴンの背に着地できたアズは番の切っ先を背にあてがい、ロックドラゴンの表面を覆っている鎧のような岩肌に取り付けた。

「ガッ!？」

岩の擦れる鈍い音と共にロックドラゴンの体が不自然に硬直した。切り付けた岩肌が結構盛大に割れて地面にボロボロと落ちていく様を見て、アズはいけると確信した。

番で何度も切り付けて岩肌を次々と剥がしにかかる、ロックドラゴンは先ほどとは打って変わってむやみに鳴いたり暴れたりという行動を止めて本気で抵抗し始めた。自分よりもずっと体の小さいアズを自分にとって危険な存在だと認めたのか、アズに対して恐怖を抱いているという事がひしひしと感じる。

——岩を剥がせば、わざわざ柔らかい腹部を露わにするためにロックドラゴンをひっくり返すなんて手間が省ける。

このまま背中を覆っている岩を剥げば、そこに一撃与えて気絶さ

せればいい。

アズを振り落とそうと左右に体を激しく振り始めたロックドラゴンの尾が木製の家を破壊した瞬間、アズはその声を聞いた。

「きゃあっ！」

「――人!?」

まさか逃げ遅れた民間人がいたのだろうか。その声は少女のもので、そして幼い。

アズはロックドラゴンの背から飛び降りると、急いで家の方へと走った。

「けほっ……誰かいませんか!？」

巻き上がった砂埃で視界が遮られ、肺に入ったのか軽くむせる。手を振って砂埃を払うと、地面に何か光るものを見つけて屈みこんだ。

そして――、

「…………え」

番を翼に戻して具現化を解き、地面に落ちていた(?) その光を拾い上げ、アズは絶句した。

「嘘…………まさか、妖精？」

弱々しいピンク色の光を纏った、髪も服も薄桃色の小さな小さな女の子。

小さすぎないアズの両手のひらにすっぽりと収まるその小さすぎる少女の背中には、虫のような、けれど虫のものよりもずっと美しく、とても輝いている透明な羽が2枚ずつ生えている。……虫には見えないのでたぶん妖精で間違いないだろう。

「ねえ、君! 大丈夫? しっかりして!」

手を軽く揺さぶって声を掛けると、小さく呻いて身じろぎをした。ほっと安堵の溜息をつく、背後でロックドラゴンの動く気配に顔を上げた。見れば、アズに背を向けて急いで歩いているのが見える。

逃げる気だろうか。

「あのまま山へ帰ってくればいいんだけど……」

「う……ん」

すると、手の中で起き上がる女の子。アズはしゃがんだまま小さな女の子に話しかけた。

「あ、大丈夫？ 怪我してない？」

「大丈夫なの……ありが——とおおおおおお！？」

アズの顔を見た途端、少女はがばりと起き上がって悲鳴を上げて手の中から転がり落ちて行った。思わず驚いて固まっていると、その小さな妖精は地面に転がってわたわたと慌てている。

「リ、リリムは妖精じゃないのよ！ 断じてっ！ 絶対っ！ 妖精じゃないのよっ！！」

どうやら妖精ではないらしい。アズは膝頭に顎を乗せて、首を傾げた。

「じゃあ羽虫^{はむし}？」

「はむっ……！？ リ、リリムは虫じゃないのよっ！ 妖精なのよ！」

「……どっちなんだ」

名前はリリムと言うらしいこの小さな小人はやはり妖精らしい。

半眼で呆れたように見下ろすとリリムはびくつと体をすくめる。

「……人に姿を見せたらいけないって女王様に言われてるのよ。だから……こんなことに」

「?……リリムは何か知ってるの? ロックドラゴンが人里に下りてきた理由」

「……知ってるの」

なんだか色々わけがありそうだ。アズはもう一度背後を振り返り、小さくなっていくロックドラゴンの背中を見つめた。

「あなた、とっても強いよね! ずっと見てたけど、あの力持ちのロックドラゴンと互角に戦えるなんてすごいの! ……あれ? さっきと目の色が違うの。それに……とても懐かしい気配を感じる」

ピンク色の光を振りまきながらふわりと浮きあがったりリリムが興味津々な表情でアズの顔を覗き込んだ。人に愛想を尽かして人前から姿を消したとアリスが言っていたが、なんだか聞いている話とはだいぶ違うようだ。

「あたし、アズ・キサラギ。セピア・ガーデンでクリスタルマスターになったばかりなんだ。強いのは……まあ、その……いろいろあるからで」

「ふーん。じゃあさっきの剣はクリスタルだったのね! リリムはリリムって言うの! 大地の妖精なの!」

「大地の妖精?」

「知らないの？このクリスタニウムの大地を総べる赤の女王に仕える、大地から生まれた妖精のことなの！」

「大地を総べる……赤の女王。その女王様も妖精なんだ？」

「とってもお綺麗なお方なのよ！神竜セピアノス様と一緒にクリスタニウムの守護者として存在しておられるの。赤の女王の他にもあと6人の女王様がいるのよ」

「へえー！妖精にも女王様がいたんだね！しかも全部で7人かあ。会ってみたいなあ」

「女王様が人と会うとは思えないの。よほど特別でもない限り——って、あ——！！こんなことしてる場合じゃないのよアズ！早く鉱山へ行くのよ！急がないと！」

「へ？」

アズの周りをくるくると回るリリムに急かされるまま立ち上がり、アズの髪をくいくいと引っ張ってくる小さな妖精について苦笑してしまった。とても人を嫌っている妖精には見えない。

「急いで、急いでアズ！このままじゃあの子が可哀想なおー！」

「分かったから落ち着いて！何があったのかゆっくり、順を追って話してよ」

「じ、実は……」

もうとつくに見えなくなってしまったロックドラゴンの後を追うように、アズはリリムに誘われるままにゴングル山の鉾山へと走って行った。

＊＊

「ねえ、竜さんのお名前はなんていうの？」

「なんて種類なの？」

「綺麗な毛並だね！きらきら虹色に光ってるよ！」

「ふわっふわのふっさふさ！きもちいい……」

「ふわふわじゃないよ！さらさらっていうんだよ！」

「どっちでもいいじゃん。レントは細かいなあ」

「セリムは適当だけどね」

「ねえってば、竜さんのお名前はあ？」

『……飽きもせずよくしゃべるね』

アズに頼まれたから仕方なく運んでいるとはいえ、子供たちのうるささに段々嫌気がさしてきた。こんなに元気なら自分たちで歩けよと心の中で悪態をつきつつも、溜息だけに留めて歩き続けている。

本来なら大人1人を乗せて飛ぶのが精一杯なのだが、まあ歩くだけだし、別に飛ぶつもりもなかったので小さな子供を背に3人乗せてのらりくらりと歩いている。ロックドラゴンからだいぶ距離もとれ、こんな子供たちなんかすぐに村人に預けてアズの元へと向かうと思っていたのに、なんだか一件落着いてしまったようだ。先ほどアズからの念話が届き、どうやらロックドラゴンが暴れていた真相が明らかになったらしい。途中で拾った(?)妖精の案内の元、これから鉱山の方へと向かうアズに続こうと思っている。

……それにしても、妖精か。

人前に姿を現さなくなっても何百年経ったのだろうか。竜や獣は頻繁に妖精を見かけるが、人にだけは見えないように魔法を使っているらしく、今でも人にとって妖精はおとぎ話の中の存在だ。

アズの世界にも妖精は存在しなかったと聞いているし、きっと驚いたに違いない。……それにしても、何故こんな人里に妖精がいるのか。ロックドラゴンの暴れていた真相よりも、ヴェール的にはそっちの方が気になって仕方ない。

「気持ち良くて眠くなってきた……」

『寝るなよ』

キキとか言う小さな女の子がヴェールの首に巻き付いて頬を摺り寄せて眠そうな声でそう言った。よだれでも垂らされたら堪ったものじゃない。即答して首をふるふると振っていると、セリムとか言う男の子がヴェールの背中をたしと叩いて前方を指差す。

「あ、見えたよ！避難所だ！」

言われなくても見えている。ヴェールはふうんと鼻を鳴らして目前に浮かぶ大きな浮島を見上げた。

あんな大きな浮島だ、この村唯一の避難場所なのだろう。かなり広い広場をクリスタルの力を使って浮き上がらせ、ロックドラゴンや獣対策にしているのが分かる。おまけに空を舞う竜対策だろうか、結界まで張ってあると言う念の入れっぷりだ。何をそこまで怯えているのやら、とついつい冷やかに考えてしまう。

「おい、竜がこっちに来るぞ！」

ふいに頭上から聞こえた声に首を傾げると、浮島から1人の男が顔を出してこちらを見下ろしている。

「逃げ遅れたのか……？誰の竜だ——って」

そこでヴェールの背に乗っている3人の子供たちの姿を捉えたのか、目が真ん丸になった。

「――セリム！キキ！レント！」

「あ、おじさーん！」

3人の子供たちが身を乗り出して一斉に手を振ると、男も驚いていたが顔を輝かせて「おい、子供たち皆無事だったぞー！！」と後ろにいるであろう村人たちに大声で知らせた。

『やれやれ。ようやく解放されるのか』

ふうと溜息をつく「ヴェール！」と頭上で自分を呼ぶ声。もう一度見上げると見慣れた顔がこちらを見下ろしていた。

「おま、その子たちどうしたんだよ？なんでそんなところに……アズは一緒じゃないのか？」

ジークが浮島から飛び降り、ヴェールの目の前に着地して不思議そうに首を傾げた。……浮島から地上まで結構あると思うのだが、それを顔色一つ変えずにやってのけるこいつは本当に人だろうか。

『ロックドラゴンならとくに村を出て鉱山に戻ってるよ。アズはそれを追って先に行っちゃったんの。だから俺もすぐに行きたいんだけど……こいつらを避難所に届けるように頼まれちゃってさ』

「は！？ロックドラゴンが鉱山に戻ったって……もしかしてさっきの騒動ってアズだったのか？」

『そう』

空中に浮遊していた浮島がゆっくりとした速度で降りてきて、地

面にぽっかりと空いているクレーターに収まる。すると大勢の村人の中から2人の女が走ってくると、背中の3人の子供が飛び降りて泣きながら抱き着いた。母親なのだろう。

「まあ、予想よりもずっと早く片ついてよかったか。怪我人もほとんどいないし。お前らが先行してくれて助かったなあ」

『ねえ、もう行っている？』

「……ホント、お前と話すといまいち噛み合わないわ」

翼を広げてわっさわっさと動かすとジークに疲れたような顔をされた。すぐに行きたいって言ってんのにまだ何か言いたいことがあるのか。さっさとしてほしい。

「まあちよつと待てよ、俺も一緒に行くから。――ハンナ、後頼むわ！俺ちよつと鉱山まで行ってアズ連れ戻しに行ってくる！」

振り向いてそう呼びかけると、見れば村人たちに紛れるようにして立つ少女を見つける。

ハープ型の大きなクリスタルを具現化させていたハンナはきよんとした後に「あ、はい！」と返事をした。

「私はここで皆さんの心のケアをしているので……気をつけて行ってきて下さいね」

「おう。じゃ、行ってくるわ！」

手を振ったジークがヴェールの背中に回り込もうとするので『え、

え、ちよつとまさか乗る気?』と尋ねると、

「え、乗せてくれるんじゃないの?」

……。

誰がそんな事言った。

21 緊急任務！？

「あ、そこ気をつけて。穴空いてるの」

「へ？——ひえっ！？」

かくん、と視界がぶれ、間一髪の所で木の枝を掴んで難を逃れた。
「反応いいのね」と笑うリリムに苦笑で返して、手の甲で冷や汗を拭う。

先を飛んで案内してくれるリリムの後に続き、山を登ること数分。時折ヴェールの念話に意識を傾け、アズはゴンゴル鉤山ツアルギリブ目指して歩き続けていた。本当は走って登りたいところなのだが、戦場の女神を解いてから体がだるくて仕方ない。まだクリスタルの力を使うことに体が慣れていないらしく、1回の具現化が精一杯だろうとゼノに言われた事を思い出し、解かなきゃよかったと今になってから後悔する。

もしかしたら、これからノワールと一戦あるかもしれないからだ。

「ねえ、リリム。さっきの話本当だよね？」

「むっ！妖精は人と違って嘘なんてつかないの！リリムはホントに見たんだから！」

ムキになって怒るリリムに「ごめんごめん」と謝り、アズは眉間に皺を寄せた。

ロックドラゴンが人里に下りてきた理由は、勘違いのせいである子供たちを追って来たから——とリリムは言った。

鉾山付近をふわふわと飛んでいたリリムは、そこで小さな子供のロックドラゴンと遭遇。妖精と竜はシンクロしていなくても大抵は意思疎通ができるらしく、その子供のロックドラゴンとも打ち解けて2人で一緒に遊んでいたとのこと。山から鉾山に地形が変わる場所には草木がなく、岩がせり出した岩盤地帯には鉾山の採掘場所としてロックドラゴンの開けた穴がいくつも虫食いのように空いているらしく、リリムとそのロックドラゴンは小さな蝶を追いかけて遊んでいた。

そこに、2人の人が姿を現した。

「リリムは見たのよ！真っ赤な髪の男の人と、全身黒ずくめのフードのついたコートを着てた人の2人組！」

真っ赤な髪の男性にフード付きの外套を着た性別不明の人の2人組と言えば、アズにとって心当たりがある。しかもまだ自分にとってはつい最近会ったばかりだ。

ノワールのメンバー、レイズとラフィエルの2人で間違いないだろう。

「その赤髪の男の人がいきなりロックドラゴンを大きな穴の中に蹴

り落として、穴の中で鳴いているその子を見ておかしそうに笑ったの……許せない！」

小さな拳を握りしめ、リリムは泣きそうな顔でそう言った。

人に見えない魔法とやらで姿を消していたリリムに気づかなかったレイズは子供ドラゴンを穴の中へ蹴り落とし、そこへ運悪くやってきたあの男の子たちが子供ドラゴンの鳴き声に気づいて穴を覗き込む。そこへさらに運悪く子供ドラゴンを探していた母親ドラゴンと遭遇してしまい、男の子たちが自分の子供を穴に突き落として殺そうとした……という勘違いをしてしまい、あの惨事に発展。

たとい運が悪かったとしても、レイズが子供ドラゴンを蹴り落とすなんて事をしなければそもそも起こらなかった事件だ。あまりの身勝手さにアズも怒りを覚えずにはいられない。

っていうか本気でぶん殴りたい。

「その子供のドラゴンは大丈夫なの？」

「あの子、実はまだ生まれて1年も経ってない赤ちゃんなのよ。だから穴を作る事も穴に上る事もまだできなくて……怪我はしてないけど、きっと今頃お母さんが恋しくて穴の中で泣いてるの……」

真っ暗闇の中で1人小さくなってクウクウ鳴いている姿を想像してしまい、アズは切なくなつて溜息をつく。それと同時に、母親ドラゴンになんて酷いことをしてしまったんだろうと後悔がどっと押し寄せてくる。

「あたし、すつごく酷いことしちゃったよ。いくら暴れてたからって、踏んづけたり切りかかりたり……子供のために必死だったお母さんに、あたし……」

「アズは何も悪くないの！そもそも原因は、そのれいずって人だもん！お母さんドラゴンだって理由を話せばきっと分かってくれるの！」

「……うん」

先に戻っていった母親ドラゴンは、もう子供を助け出すことができただろうか。

アズの肩に降り立って励ますように頬を優しく撫でてくれたリリムに笑いかけ、アズは胸の前で拳を強く握りしめた。

しばらく登り続ける内に木々が徐々に減っていき、地面も土ではなく硬い岩盤に変わってきた。

目の前にも大きな岩山がしっかりと目に入る。これがゴンゴル鉱山なのだろうか。

「ここ？」

木々がなくなり、大きな穴が無数に空いている岩山を目の前にしてリリムに尋ねると、ひゅっとアズの横をすり抜けてリリムは前方を指差し、

「もうちょっと先なの！」

「あっ、リリム！待って」

先だって飛んで行ってしまおうピンク色の光を慌てて追いかける。まだレイズたちがいる確率が高い。もし鉢合わせになってしまったら、悔しいが今のアズでは戦えない。

クリスタルを具現化できないこともないが、無理をした後どうなってしまうのかわからない。

「ヴェールとジークを待った方がいいかな……」

不安になって立ち止り後ろを振り返るも、2人が来そうな気配がない。なんとなく心細くなって前を振り向くと、そこでリリムがいないことに気がついた。

「あ、ヤバ……見失っちゃった」

辺りを見回すも、岩肌がせり出した山とまばらに生えている木しか見当たらず、リリムの姿が見えない。

すっかり迷子になってしまった事実さらに焦り、すぐ背後に人の気配が現れた事に反応が遅れてしまった。

「――!?」

驚いて振り返ろうとした瞬間視界が真っ暗になり、続けて両腕を後ろから掴まれて一気に身動きが取れなくなった。あまりにも唐突すぎて混乱してしまい、視界を塞いでいるものと腕を拘束しているものが人の手だと気づくのに数秒かかる。

「だーれだ？」

とても楽しそうな男の声――どこかで聞いたことのある、軽快でいて人を馬鹿にしたようなこの話し方……。

「あれ？すぐにわかると思ったのに」

アズの耳元に唇を寄せた男の声が不思議そうな空気を帯びる。アズの中でどうに答えは出ている。しかしそれを口に出していいのかわからないし、何より口に出したくない。

……というか、

「馴れ馴れしいっ！それ以上寄るなっ！」

「おっと」

拘束されている腕を振り払い、アズは肘に力を込めて相手の鳩尾目がけて繰り出すも軽く躲されてしまった。驚きつつも後ろへ2、3歩後退し、相手と距離を取る。

「乱暴だなく。女の子はもっとおしとやかにあるべきだろ？」

「……やっぱりあんたか」

目を引くような真っ赤な髪に、黒いヘアピンをクロスさせて前髪を留めている人の好い笑みを絶やさないこの男こそ、今回の事件の首謀者にして最低最悪のノワール——レイズ。

距離を取りつつ睨んでいると、レイズはさも不思議そうな顔で首を傾げた。

「やっぱり？……そりゃまるで俺が何かしたような言い方じゃん。アズは何を知ってんのかな？」

「ロックドラゴンの子供にあんな酷いことしておいてとぼけないで！」

にこにこ笑みを絶やさないレイズに苛立って声を荒げると、奴は目を見開いて瞬きをした。

「あれ？なんで知ってんの？まさか見てた？」

悪びれた様子など微塵も見せず、おどけた態度で聞いてくるレイズ。アズは思わず拳を握りしめた。

「いやゝ、別にどうこうするつもりもなかったんだけどさ。なんか無邪気に遊びまわってる所見てたら、なんていうの？あんまり可愛かったもんだから無性に苛めたくなったっていうか、現実を思い知らせてやりたくなったっていうか？とにかくそんな気分になってつい蹴り落としちゃった。ははっ。そしたらまあ面白いように事が進んじまって、気がついたらふもとの村までドラゴンが降りてくし村も人共もめちゃくちやになるし！いい感じに憎しみの闇が広がると思ってたのにアズが来ちゃったからそれも終わっちゃったけど、まあそれなりに楽しめたからよかったけどな」

怒りに戦慄くアズをよそにペラペラとよくしゃべるレイズは、笑ってはいるが視線はしっかりアズに固定されている。時折目を細めてはアズの反応を伺い、何も反応をしなければつまらなそうに肩をすくめるのだった。

「こっから見てたけど、あのロックドラゴンとやりあえるなんてやっぱすごいわ。さすがセイレーン、心の大きさが違うねえ。少し寛大過ぎんじゃないの？」

「……飽きもせずよくしゃべる」

「話す事が俺の楽しみだから」

睨みながら吐き捨てるように言ってみたが、レイズにっこりと笑って受け流された。すると頭上で衣擦れの音が聞こえた。仰ごう

とした瞬間黒い塊が落ちてきてアズは思わず後ずさる。

「時間だ」

「もう？もつとアズと絡みたいのに残念だな」

黒い塊がむくりと立ち上がり、全身黒ずくめのラフィエルが腰に手を当ててレイズに向き直った。大きなフードを深めに被っているせいで顔半分は見えないが、顔の輪郭や口元を見るとやはり女性だということが分かる。

口を尖らせるレイズに溜息をつきながら首を振って見せ、ラフィエルは親指を立てて背後を指差し、

「狼とセブンスドラゴンがこっちに向かつてる。鉢合わせになると厄介だ。退くぞ」

「うげ」

狼……？

セブンスドラゴンはもちろんヴェールだが、狼というのはもしかなくともジークの事なのだろうか？

黙って2人の話を聞いているとラフィエルがアズの方に体を向け、

「立っているだけで精一杯だろう？無理をせずに帰る事だな」

と、思いもよらない優しい言葉をかけられてしまい、完全に悪い奴だと思い込んでいたアズは驚いて言葉を失った。レイズもうんう

んと頷いてラフィエルの肩に寄りかかる。

「今のアズと戦ってもつまねえしな。もっと強くなったら本氣のガチバトルが出来るし、今はおとなしく帰んな。俺好みの女になってくれると期待して待ってんぜ♪」

「……手をどけろ、馬鹿者」

「あれれ？ラフィエルってば嫉妬しちゃった？」

「くどいぞレイズ！……もういい、私は先に退く」

からかうレイズの腕を荒々しく振り払い、ラフィエルは踵を返してさっさと洞窟の中へ消えていく。

そんなラフィエルの後姿を見送り、「強氣の女って燃えるよな」とにやにや笑っているレイズがアズに顔だけ向けてにこっと笑った。

「あ、もちろん今はアズのが楽しみだから」

「……どうでもいいからレイズもさっさと退いてよ」

「ああっ！今名前呼んだ！？もっかい呼んで！」

……。

顔を輝かせて嬉しそうにはしゃぐレイズを冷やかに見つめ、アズは体がどつと疲れるのを感じた。こんな男が自分の敵だなんて……もっと緊張感ある性格になってくれないのだろうか。戦う気がまったく起きない。

「そうだな……1ヶ月待つ！1ヶ月待っても強くないようなら、その時は速攻で殺す。――俺はな、自分より強い女が好きなんだ。弱くて貧弱で守られてるだけの女なんて、どんなに外見やスタイルがよくてもいらないんだよ。心も体も強ければどんな女だって構わない。セイレーンはすぐ殺すもんだってノワールは思ってたけど、俺はじっくり育つのを待ってゆっくり楽しむ派なんだよな。だから――」

目の前にレイズが立ちはだかり、アズの顔に影が落ちる。先ほどまでとはまったく違う、ピリピリとした嫌な気をその身に纏ったレイズが不敵に笑い、アズの顎を持って上に持ち上げる。

「だから絶対に誰にも殺されるな。お前は必ず俺が殺す」

――殺気。

あんなに戦うことに意欲的だったアズの体が、レイズの殺気を受けて一瞬にして硬直した。今まで感じたことのない、体の底から震えあがるような感覚。シャドウの気配になんとなく似ている……あの寒気と恐れ。

アズの野性的本能在脳内で激しく警報を鳴り響かせる――。

勝てない。

殺される。

アズの本能は、今のままでは確実にレイズに殺されると激しく警告していた。

「って事で」

ぱっと顎を離され、レイズは会った時から見せてきたあの人の好い笑みでにっこりと笑ってアズの頭を優しく撫でた。完全にレイズに恐れをなしてしまったアズは俯いたまま軽口を叩くこともできな

くなっている。……怖い。冷や汗が止まらない。

「なに、そんなに怯えんなって♪アズならすぐに強くなれっから、大丈夫大丈夫」

小刻みに震えている手を見られたくなくて後ろに隠すと、レイズはふと何かに気づいて顔を上げた。アズの背後を見て目を細め、「来たか」と呟く。

「じゃな、アズ」

頭に乗せられていた手が離れ、レイズはラフィエルの消えた洞窟の闇に吸い込まれるように消えて行った。レイズの気配が完全に消えても、アズはその場に突っ立って俯いていた。

気が遠くなる。

頭が考えることを拒否している。

「……っ」

視界がぼうつと霞み、頭が一瞬だけ安定感を失ってふらついた。耳がうまく音を拾えず、途切れ途切れにしか周囲の物音を聞き取る事ができない。

「――アズ！」

誰かに名前を呼ばれた気がした。それがジークなのか、ヴェールなのか、リリムなのかも分からないまま、アズは意識を手放した。

＊＊

『おっ……と』

目の前で大きくふらついたアズが、糸の切れた人形のように後ろにゆっくりと倒れる。翼を折りたたんで地に足をつき、間一髪のところアズの体を自分の体に寄りかからせることができた。うん、さすが俺。

「アズ！どうしたんだよ？」

背中に乗せていたジークが倒れこんできたアズを抱きかかえ、肩を揺さぶるもアズは完全に意識を失っている。

『クリスタルの影響だ。無理に起こすと後遺症が残るからそつとしないで』

「そ、そうか、わかった」

相当動揺しているジークはまともな判断ができないらしい。とりあえず2人を草のあるところへ下ろし、ジークがアズを介抱している間に大きな穴の開いた洞窟に近寄ってみる。

ぽつかりを口を開けたこの洞窟は、すべてロックドラゴンが喰い進めてできたもの。どこに通じているのかもわからない上に、虫食いのように掘り進んで出来た穴は山の中で複雑に混じり合っているために天然の迷路になってしまっている。穴の中から空気が外へ流れている事から、たぶん外に通じている穴がいくつかあるのだろう。

『風上じゃにおいは辿れない……か』

念話らしい念話ではないが、先ほど流れこんできたアズの思考の中に「レイズ」と「ラフィエル」の名前があった。先ほどまでここにいたのだろうが、この穴の中に入られてはもう追えない。追ってもたかがヴェール1人に何ができるわけでもないので特に追う必要もないのだが。

『……無駄な恐怖心植え付けやがって』

思考の中に、「怖い」や「勝てない」……「殺される」などという感情も、シンクロしているヴェールにはリアルに伝わってきた。アズがどれほどレイズを恐れていたかが鮮明に伝わり過ぎてしまったため、ヴェールまで恐怖というものを味わってしまった。

胸くそ悪いったらないし、何よりアズを怖がらせたあの男が許せなかった。

『……?』

ふいに何かを感じて洞窟から顔を逸らして背後を振り返る。

アズを介抱しているジークの頭上に、何やらピンク色の光がおろおろと空中でうろついているのが目に入った。

『……』

黙って見守っていると、左右に行ったり来たりしながらピンク色の光の粉をまき散らしてアズの体に振りかけているそれは、アズの言っていたリリムという大地の妖精だと理解した。妖精の振りまく光の粉は生き物の体を癒す力がある。

しばらくじっと見つめているとヴェールの視線に気づいたのか、ぴたっと動きを止めて妖精もこちらを見つめてきた。

——ちよつとこっち来い。

念話でそう伝えるとすぐにこっちに飛んでくる妖精。ジークから少し距離を取った所に腰を下ろすと、光を飛散させて姿を現した妖精がヴェールのすぐ目の前に浮かんだ。

『お前がリリムか？』

尋ねると、妖精はこくりと頷いて「リリムなの」と言った。

「そういう貴方はなあに？」

『“なに” ってまた失礼な言いまわし方するね。どっからどう見てもセブンスドラゴンでしょ』

「ドラゴン……？でも気配が他の子達とは」

『ドラゴンだって。無駄な詮索はするなよ。アズの前でそんな事口にしたら食っちゃうからね』

「はうっ！ごめんなさい！」

『よろしい。――で？お前は今までなにやってたの？アズの傍にいたんじゃないわけ？』

あえて責めるように尋ねると、リリムはしょぼんとした顔で俯いた。

「リリム、アズを置いて先に行っちゃったの。案内をしてたのよ、ロックドラゴンのいる穴の所まで。……そしたらアズがいないことに気がついて、急いで戻ったらあの2人組がいて……」

『ふうん……』

まあ、たかが妖精だ。あの場にいたところでアズを助けることができたわけじゃない。責めるような口調を和らげ、ヴェールは妖精に顔を近づけた。

『なんで人里なんかにいたんだよ？人と関わるなって女王に教えてもらわなかったのか？』

「教えてもらったのよ。……でも、リリムは人がそんなに悪い生き物には見えなくて。ロックドラゴンが村に下りていくのを知ってたのはリリムだし、すぐに伝えに行かなきゃ！って思ったんだけど……結局人と話す度胸がなくて村の中でうろうろしてたの……」

自分の頭を小さな手でぽかぽかと叩きまくるリリムを呆れ気味に見ていると、ひょいっとヴェールの鼻の上に降り立って四つん這いで接近してきた。

「セイレーンなら、きっと女王様も認めてくれるの！絶対付いて行っていていって言うてくれるの！そしたらリリムはアズの傍でアズのお手伝いをするのよ！」

目と鼻の先、というか目と鼻の上で拳を握りしめて目を輝かせるリリムを見つめ、『手伝って何が出来んのさ？』と聞いてみた。

「妖精だって目くらましくらいにはなるのよ！こう……ぴかーっと！」

『ああ、囧にしてそのまま逃げるってのもアリだな』

妖精は発光する。体中からまばゆい光を放てば少しくらいは使えるような気がする。特にシャドウには効果覿面かもしれない。

「……囧はちょっと勘弁してほしいの」

『なにそれ』

しょぼくれるリリムを鼻の上に乗せたまま体を起こし、ジークの元へと歩き出す。

『アズと一緒にいたいなら、自分で挨拶してもらおうぞ』

「だ、誰に？」

『まずはそこにいるジークって奴と、それからセピア・ガーデンの連中に』

「む……リリムはこの時のために挨拶はたくさん練習したんだから！」

妖精は光を纏っていない、今みたいに姿を現しているときだけ人に見えるようになる。リリムはよじよじとヴェールの鼻の上から頭の上へと移動し、ふん、と鼻から息を吐き出して覚悟を決めたように力強く頷く。

のっしのっしと近づいていくとヴェールに気づいたジークがこちらを振り返る。

「さっきから何をひそひそ話して……」

『ほい、新しい仲間』

「は？」

頭を下げてリリムを突き出すようにジークに見せると、

「大地の妖精、リリムです！よろしくお願いします！うっす！！」

……これが練習の成果か。

どこか山奥で修行でもしてきたような空気を漂わせる挨拶を元気いっぱいにしてのけた妖精に驚いたのか、ジークは何も言わない。

『アズが拾ったら懐いちゃってさ』

顔を上げてそう付け加えると、ジークは呆れるくらいぽかんとした顔で「……え、あ、おお」と母音のみの返事を返してかくかくと頷く。こいつホントにわかってんだろうか。

『傍に置いといても害はないだろうし、なんか手伝ってくれるみたいだからこのままガーデンに連れ帰るけど別にいいでしょ？』

「俺に聞かれても……つか、妖精持ち帰るとか前代未聞だわ」

『前例無しならいけるでしょ』

「とりあえず団長に報告して……」

耳元に手を当ててクリスタルをいじるジークを挨拶以降じっと見つめていたリリムが、突然顔を輝かせた。

「すごい……すごいの！ 貴方ダークウルフだったのね！ うわー、懐かしいのお！」

『は？』

1人ではしゃいでジークの周りをくるくると嬉しそうに飛び回るリリムについ眉をひそめる。

ダーク……ウルフだって？

「……やっぱ妖精にはわかんのか？」

「わかるのよ！ 最初は気づかなかったけど、近くにいると感じるの」

『ちょ、ちょい待ち。ジークってやっぱ人じゃないの?』

「やっぱってなんだよ。俺はれっきとした人族だ。俺のご先祖様とダークウルフが交わったってだけで俺自身は人だ。俺が引き継いでるのはダークウルフの血だけ」

苦笑しながらのジークの説明を聞き、ヴェールは『ははくん』と納得した。

ダークウルフというのは、もう何百年も前に絶滅してしまった狼の事だ。

その体は獣族に分類される狼種の中で最も大きく、もっとも強いと言われている、闇に溶け込む漆黒の美しい毛並を持つことで知られている。

絶滅してしまった主な理由は短命ゆえの少子化のせいだと聞いていたが……。

『だから性欲が強いのか』

「性欲言うな! 子孫を残せてってダークウルフの遺伝子が叫ぶんだよ! 別に俺の意思じゃねえ!」

くわっと威嚇顔のジークに牙を向けられ、ヴェールはやれやれと首を振った。それが遺伝子レベルどうこうだの悪癖だの抑制できないだのの話を繋がるというわけだ。

『遺伝子だけ？体の構造とかは人となんら変わらないわけ？』

「……少し違う。人よりも持久力あるし、鼻はいいし耳もいいし六感も鋭いし。俺の勘は良く当たるな」

『月の光を浴びたら人狼になったりする？』

「しねえよっ！」

『……な〜んだ、つまんないの』

いつの間にかジークの頭の上に座っているリリムを見て、ジークは肩をすくめて苦笑した。

「本物見んのは初めてだけど、なんか初めましてって気がしねえな。俺ジーク。よろしくな、リリム」

「うっす！」

『なにその返事』

敬礼のポーズでその挨拶はどうかと思うが、とりあえずそれ以上は追及せずにジークに下山するように促した。

『アズ連れて先に下山しててくれる？』

「一緒に下りないのか？」

『確認しなきゃいけないことがあるから』

首をもたげて鉦山の方を顎でしゃくると、意図を察したジークが何度か頷いた。

「わかった。先に下りてハンナと待ってる」

『うん。リリム、お前はとりあえず俺と一緒にね』

「はいの！」

敬礼ポーズのリリムを従え、アズを背負って下山するジークを少しの間見送る。

ロックドラゴンを鎮めて任務を完了したにも関わらず、クリスタルの影響で疲れ切った体でわざわざこの鉦山まで登ったアズの目的。それを確認しておかなければ、目を覚ましたアズはきっと納得しないだろう。

みんなはアズの事を素直だというのが、根はとても頑固なのだ。自分でやると言った事は最後までやり遂げたいと思うはず。

『案内よろしく』

「合点承知！」

変な返事をして意気揚々と先を飛んでいくリリムに続き、ヴェー
ルもゆっくと歩き出した。

22 覇者の目覚め

ふと気がつく、アズは暖かいもふもふとしたものに背中を預けてぼうっと足元を見ていた。

霧が晴れていくように頭の中がクリアになるにつれ、ここは自分の夢の中だと理解する。目を数回瞬きさせ、自分が寄り添っているもふもふした体の持ち主を見上げた。

「意識が戻ったようですね。怠くはないですか？」

首をゆっくりと下げてきて、氣遣わしげにセピアノスが問う。

「大丈夫。怠くないよ」

「そうですか」

真っ白な体毛に顔を摺り寄せて答えると、セピアノスは安心したように目を細めてグルグルと喉を鳴らせた。夢の中だというのに、この温もりも包まれるような安心感もすべて本物のようによくできている。アズは目を細めて全体重をセピアノスに預けて再び目を閉じる。

「……どうしてクリスタルの力を使う度に気絶しちゃうのかな？あたしが弱いせい？」

呟くような小さな声で尋ねると、聞き取れたのか、それとも声な

ど出さずとも感じているのか、セピアノスが静かに答える。

「決して貴女が弱いせいではありません。心のクリスタルは本来外気には触れぬ物……体の外に出すべきものではないのです。何故なら、クリスタルは人の心そのもの、その人の精神であり、その人の弱点でもあるから。クリスタルを破壊されるということは、その人の心の死を意味します。そんな大切な物を体外へ抽出し、あまつさえ武器化して戦うなど本来なら許されない行為です。体の中にあるべきものを抽出させるだけでも体力を消耗させるというのに、武器として扱いぶつけ合う事で心にもダメージを与える――その蓄積されたものが、今反動として貴女に返ってきているだけの事」

「……」

「貴女の脳は、心が受けた負担から貴女の体を守るために強制睡眠を促します。だから具現化を解いてしまうと体が怠くなって自己防衛機能が作動して深い眠りにつくのです。貴女自身がクリスタルの扱い方を学んでいけば、自ずと心の負担も軽減できて強制的な眠りにつくこともなくなるでしょう」

「学ぶ……勉強？」

思わず顔をしかめてセピアノスを振り仰ぐと、「そうですね」と笑われた。

「もちろん貴女が思っているような、机にかじりついて文字を書き綴る勉強とは違います。己の心の在り方を学ぶ人は、それぞれ自分のやり方で、自分のスタイルでクリスタルを追及していくもの。貴女の周りには、貴女を支えてくれる人々が何人もいるのです、参考までにアドバイスをもらったらどうですか？」

「アドバイス……うん、いいかもしれない」

セピアノスの提案に頷き、よくよく考えてからもう一度、今度は笑顔で頷いた。

「どんな生き物も、親から子へ、経験者から初心者へ教えていくもの。1人で思いつめるよりも、素直に他人を頼ってみるのも一つの手ですよ」

「うん！」

自分のクリスタルの事は自分自身にしか解らない。その事実を変わらないが、少しでも何かヒントになるなら、少しでもクリスタルの事が解るならと思った。

頼れる先輩はたくさんいる。助言してくれる先生もたくさんいる。

自分の道が見えたような気がして嬉しくなり、アズの胸がじんわりと暖かくなった。

「……あっ！ いっけない、いつまでも寝てらんないんだった！」

「？」

安堵したとたんにロックドラゴンの親子の事を思い出し、アズは飛び起きてセピアノスに向き直った。

「あたし早く起きて確認しないといけないことがあるんだよ！ 起きるにはどうすればいい？」

「そんなに慌てなくても、じきに目が覚めます」

くすくすと笑われるがアズは首をぶんぶんと振った。必死に抗議する。

「本当に、ほんとーに起きたいの！お願いセピアノス、今すぐー」

アズを見下ろすセピアノスセピアノスの様子が急変し、アズは驚いて言葉を切った。目を見開き、何かを凝視しているセピアノスにつられてアズも自分の背後を振り返った。

「――アズ、いけないっ！」

制止の声が聞こえる前にアズの視界が突然真っ暗になり、驚く間も与えずに首にとてつもなく冷たい物が巻きつく。

「――っあ」

「アズ！」

首を絞められている、と理解するまで、3秒ほどかかった。

冷たくて柔らかいのに、焼けるように熱くてギリギリと首を絞めてくる闇のような影の中に、血のように赤く光る2つの光を見つけた。一切の容赦なしで締め上げてくる影のような手の間に自分の指

を入れて必死に気道を確保しようともがくが、指が影をすり抜けて
まったく意味がなかった。

アズの意識が遠のく。

「何故ここにっ……！アズを離さない、ブレイオス！！」

自身も黒い影に絡め捕られる中、悶えながらセピアノスが悲鳴に
近い甲高い声で叫んだ。

ぶ……れ、い……おす？

どこかで聞いたことのあるような響きだなど、酸素の足りなくな
った頭でそんなことを思った。

＊＊

「むにゃ……」

ベッドの中で深い眠りにっているアズの枕元。ふかふかの布団の心地よさに魅了されて幸せな眠りについていたりリムが起きたのは、開け放された窓から冷たい風が入ってきたからである。

「寒いのよ……窓閉めるのよ……」

ふにゃふにゃと夢見心地の頭のままふらふらと飛び上がり、窓に近づこうと手を伸ばした瞬間、

「――!？」

ただならない気配に一瞬にして目が覚め、リリムは光を放って後ろへ身を引いた。

ずるっ……ずる……

凍えるような冷気を引きつれて窓から黒い影が這い出し、ベッドの上にべしゃりと落ちる。その黒い影から黒い霧のような、靄のような物が吐き出され、病室内をゆっくりと包んでいく。

「しゃ……どう？」

――じゃない。もっと冷たくて、もっと憎しみに満ち満ちているモノ。

これは、なに――？

「う……」

「――アズ！」

アズの小さな声にリリムは我に返る。見れば、その冷たく凍えるような影がアズの首を締め上げている。意識を失っているアズはそれでも懸命に抗っているが、指は虚しくも影を掴みとれない。実体がないのだ。

「あ、アズを離せこのー！！！」

決死の覚悟で体当たりを試みるが、妖精のリリムでも影を素通りして壁に激突してしまった。結構痛々しい音を立ててベッドと壁の隙間に落ちて意識を失いそうになる。

「ひう……死んじゃう、アズが死んじゃうよう……」

頭を押さえてベッドの下から這い出し、小さな妖精は泣きながら飛び上がった。ベッドの上のアズは足をばたつかせて掠れた声を上げている。このままでは本当に死んでしまう。

自分では何もできないと理解したりリリムはドアの前まで飛んでいき、どんどんと力強く叩いて大きな声で叫んだ。

「誰か助けてっ！アズが殺されるーっ！！」

小さな両腕を振り上げて何度も何度も叩くが、人の近づいてくる気配を感じない。

こんな時にヴェールがいてくれたら……と、ここにいないヴェー

ルにすがりつく。彼は今、指令室なところでセピア・ガーデンの偉い人と話をしているはずなのだ。危険を察知してもくすぐに飛んでこれるはずがない。むしろそれまでアズが持つかわからない。

ロックドラゴンの時だって、リリムがもっと早く村人に知らせていれば逃げ遅れる人や怪我人なんていなかった。

リリムが子供ドラゴンを庇って助けてあげれば、あんな惨事は起きなかった。

「何もできないなんて、もう嫌……嫌なの」

どうにかできる立場にいるのに、度胸がなくて何も出来なかった自分。

もう、後悔はしたくなかった。

自分よりも遥かに大きいスライドドアの取っ手を掴み、

「——うおおおおおりゃああああ——っ！！」

気合の叫び声を上げて腹に力を込め、渾身の力で自分の体重の何十倍もあるドアを横に引っ張った。開いた後にゆっくりと閉まっていくタイプのドアだったことが幸いして、15センチくらい開いた

隙間が閉まる前にどうか病室から出ることが出来た。すぐさま廊下を見渡して人影を探すと、こちらに歩いてくる人影が見えた。

姿を見られたら困るなどと怖気づいている暇などない。リリムはその人影にすっ飛んで行くと、相手の顔の前でなりふり構わず叫んだ。

「アズが影に殺されるの！お願い助けて！！」

「――影だと！？」

リリムの放つ光に照らされた金色の髪 of 男の人はその一言で血相を変え、リリムの横をすり抜けてアズの病室を開けた。

「アズー！」

男の人と一緒に病室の中を見ると、形のなかった黒い影が人型になっており、アズに跨って首を締め上げていた光景に思わずリリムが叫ぶ。赤い眼のような光に憎しみの色を湛え、アズの顔を覗き込むように近づけて黒い霧を吐き続けている。

「――破壊の大剣！」
ラグナロク

男の人が胸に手を当ててそう叫ぶと、胸から輝く光を溢れさせながらとても大きな剣を出した。切っ先を影に向けて構えると、クリスタルの放つ光に気を取られてこちらをむいた影に向かって凄い速さで突き出した。

リリムにとっては一瞬で起こったその出来事は、起こった時と同じく一瞬で終わった。

悲鳴も上げずに影は消え失せ、残った剣は影を突き刺した位置で深々と壁に突き刺さっている。

とても倒したとは思えない消え方に半信半疑のリリムだったが、首を絞めていた影が消えたことによって解放されたアズが激しく咳き込みながら跳ね起きたので慌てて飛んで行った。

「ぶはあっ！げほっ……げほっ！げほっ！」

「アズウー！！」

むせ返るアズに抱き着き、リリムは泣きじゃくってアズの胸元に顔を埋めた。

「りり、む。けほっ……あれ、あたし……」

「アズ……アズ……」

ひゅうひゅうと掠れる呼吸を繰り返すアズは、苦しそうにしながらもリリムの頭を撫でてくれた。

「なんか首絞められてた夢を見て……死ぬかと思った」

「夢じゃない」

「……え、クラウドス！？」

驚いたように仰け反るアズは、そこでまた苦しそうに咳いた。

「無理しちゃ駄目なの」

「ありがと……」

頬を撫でるとアズは優しく笑った。

「夢じゃないってどういうこと？……あたし、確か夢の中でセピアノスと話してて……突然真っ黒な影が現れて」

「現実世界でも影は現れたのよ。そいつが窓から這い出してきた、アズの首を……」

「夢と現実……って」

目を伏せたアズに元気づけるように笑いかけ、リリムは立っている男の人を振り返った。

「この人が追い払ってくれたの！」

ふわりとアズの肩から飛び上がり男の人の顔の横にくと、なんだか怪訝な顔をされた。

「……クラウド、ありがとう」

「ああ。……それより、これは何だ？虫の類か？」

「むっ!?!」

「人の姿に似ていて、尚且つ言葉を話す虫なんて聞いたことがない」

「……クラウド、まさか妖精を知らないの？」

アズが呆れたようにそう言ったが、リリムはあまりのショックに
ぷるぷると戦慄くだけで声が出なかった。

クラウドはしばらく横目でリリムを見つめていたが「まあいい」
と視線を逸らしてアズを見下ろした。言いだしたのは自分のくせに、
話を中断させるのはどうかと思った。

「今は眠れ。無理やり覚醒させられたせいで体に後遺症が残る恐れ
がある」

「え、でも……」

「いいから」

渋るアズを言い聞かせ、クラウドはアズの肩を掴んで強引にベッ
ドに寝かせる。困惑顔のアズの胸元に手をそっと宛がえ、目を細め
て呟いた。

「夢も見ないほどの深い眠りだ。すぐ楽になる」

言い終わる前に宛がっているクラウドの指先が淡く輝きだし、ア
ズは驚いたように目を見開いたが、あっという間に眠ってしまった。
強張っていたアズの体からずっと力が抜けていくのが解る。

「何をしたの？」

アズの枕元に下りて聞いてみると、クラウドは椅子に腰を下ろし
て答えてくれた。

「心のクリスタルに語りかけて眠らせてただけだ。本来の使い方とは程遠いが……役に立つから重宝している」

「ふうん。クラウスってすごいのね」

「別に凄くない」

褒めたつもりなのだが、当の本人は至って無表情だった。声もなんとなく抑揚がない。平坦と言うか淡々としているというか……いまいち感情を掴めない人だった。

「ねえねえ、さっきの影……なんだと思う？」

アズの枕元からサイドテーブルへ移り、置かれていた本の上に座ってリリムは尋ねてみた。

どうやら先ほどの影がまた現れないように見張ってくれるらしいクラウスは足と腕を組んで、窓から差し込んでくる優しい月の光を見つめたまま、答える。

「シャドウではないな。気配も濃度もそんなレベルではないと思える。……もっと邪悪で、もっとおぞましい——久しぶりに恐怖というものを感じた」

「うん……リリムも、すっごく怖かったのよ。あんなに怖いモノ、初めて感じたの。だから普通のシャドウじゃないって思ったんだけど……だったら、一体なんなの？」

「シャドウにも階級がある。生み出す人の負の感情の大きさに呼応

して奴らは力を蓄積し、体も能力も大幅に強化される。最下級のシャドウにない知能も芽生えるし、自我が発生することもある。知能があれば最下級のシャドウも統率され、厄介なことこの上ない。今の所俺たちが確認しているのは、最下級のシャドウを統率することのできる中級の影――ファントム。知能があり、媒体の想いに忠実でそのために駒であるシャドウを効率よく動かしてくる。……だが、あの影はファントムなんかじゃない」

もっと悪意に満ちているモノ。

クラウドの言いたい事が解り、リリムは項垂れた。

「どちらにせよ、影である事には変わらない。影である限りクリスタルには弱いはずだ。意図的にアズを狙ってきたとすれば、やはり狙いはセピアノスカ、アズの死か……」

「どっちにしても、絶対そんなことさせないんだから！アズもセピアノスもこの世界の希望！どっちもリリムが守るのよ！」

「……頼もしい限りだ」

たっぷりの間を置いて無表情で言われ、絶対に頼りにされないとリリムは確信した。

＊＊

一方、その頃4階の指令室では……。

「……ねえ、彼大丈夫かしら？」

「……大丈夫、なんじゃないか？」

「明らかに大丈夫そうには見えねっすけど」

「異常でしたものね……ヴェール」

指令室内、今だ職務に就く黒制服のアドバイザーたちがちらちらと気にする中、ゼノ、アリス、ジーク、ハンナの4人が円形テーブルの一角で腰を折ってそんな話を話し合っていた。彼らが囲って見つめているのはセブンスドラゴンのヴェールで、先ほどはもがき苦しむように暴れていたのだが、突然床に倒れ眠ってしまったようなのだ。

あまりにも奇怪な行動にその場の全員が哑然としてしまい、黒制服の職員たちは24時間体制の仕事をほっぽり出すこともできずに気になって仕方ない状況が続いていた。他人事のように話すゼノ団長らの会話の内容でさえ気になる。物凄く気になる。

「最初は首を絞められたように苦しんでいたのに、今度は眠るだなんて……もしかして、シンクロしてるアズに何かあったんじゃない

かしら？」

「その可能性はデカいな……ジーク、様子を見に行ってくれ」

「了解っす」

「あ、私も行きます！」

敬礼で応えたジークに続き、ハンナも部屋から出ていく。

残された団長、副団長の両名はそのままの体勢でしばらくいたが、アリスの方が溜息をついて体を戻した。円形テーブルに寄りかかり、置かれていたコーヒークップを手取る。

「途中までだけど、だいたいの状況は理解できたわ。まさかノワールが絡んでいたなんて」

「しかも特にこれといったまともな理由もない、最低最悪な行為のせいでな。……あんなにロクでもない奴だとは思わなかった」

「あら？少し後悔してる？」

「するか。後悔もなければ未練もない。だから本気でやり合える」

「……本当にそれでいいのね？」

「いいも何も、選んだのはあいつだ。正々堂々戦えばいい。……それだけだ」

会話の流れで神妙な顔つきになる両名。誰の事を言っているのか、

話の内容、2人の過去などを知らない職員たちは2人の話にさっぱりついていけない。だが、過去にノワールと関係を持っていたという事だけは会話の内容から伺える。

セピア・ガーデンは、美しい庭園が広がる、清く優しげな人々の集まる至高の場所だと世間から思われているが、実はそうとは言えない。所属している人々の中には辛い過去を背負って生きてきた者たちが大勢いるのだ。幸せな家庭で生まれ、何不自由なく暮らし、たくさん友人に囲まれて生きてきた人はこのガーデンにはいない。

ここに在るすべての人や獣人は、何かしら過去に起こった不幸な事件をきっかけにこのセピア・ガーデンを訪れ、そして永住していた。ここに在るすべての人がそうであった。

「ま、アズが無事に帰ってきてよかったじゃないか。初めての任務にしては上出来すぎるだろ」

「そうね。ドラゴンとノワール……シャドウが出てこなかったのは不幸中の幸いね。さすがのアズでも三拍子揃ったら危なかったかもしれないもの」

「ああ。……でも、これでやっと簡単な任務は受けさせてやれる。後は少しずつ……だ」

折っていた腰を戻してゼノも背伸びをした。ヴェールは相変わらず床の上で眠りこけたままだ。

——と、思った瞬間。

『ふわっおっ!!?』

「うおおっ!？」

指令室全体に響くような奇怪な大声を上げて突然起き上がったヴェールに一同騒然。特にヴェールの近くにいたゼノはつられて悲鳴を上げて後ろへ仰け反った。アリスもぎょっとしたように身を引いている。

「お、起きたのか」

大きな声を上げたままの顔で止まっているヴェールに恐る恐る尋ねるが、本人は目を瞬きさせるだけで返事をしない。ゼノとアリスは顔を見合わせて首を傾げる。

「……おい」

『……オス』

「雄？」

ぼそりと呟かれた言葉を聞き取れず、ゼノは眉を寄せて「なんだって？」と顔を近づけた。

『アズんどこに来た』

「何が？」

放心したような顔でヴェール。しかし、ますます要領を飲み込めずにこんがらがり、ゼノはヴェールの目の前に腰を下ろしてワニ顔をむんと掴み、

「ゆっくり、落ち着いて言ってくれ」

優しく声をかけると、今まで定まっていなかった視線がようやくゼノの目に焦点を合わせ、眩いた。

『ブレイオスが――来た』

――ガシャンッ

アリスの持っていたコーヒークップが床に落ち、静まり返った指令室の中に激しく響き渡る。

中身が床にこぼれても、破片が飛び散っても、誰も見向きもしなかった。

「……冗談だろう？」

不自然な程に静まり返った部屋の中に、ゼノの絞り出したような掠れた声が聞こえた。その場にいる全員がそう願う。どうか嘘でありますように、と。

しかし、ヴェールはゆっくりと首を振った。

『……俺には解る。来たんだ。アズを……いや、セピアノスを、殺しに』

「……」

『シンクロして伝わってきた。ブレイオスの思念が。……あいつは今もなおこの世界を憎んでる。きつとまた来る』

「……結界は何も感知しなかったのに」

『影ですらない思念体だ。ドラゴンでもシャドウでもブレイクリスタルでもないモノが感知されるわけがない』

「待って。思念体という事は、ブレイオスも肉体を離れているというの?」

『そう。思念体——精神だけでここまで来た。セピアノスを宿したアズを探して、ね』

「……………ゼノ」

黙り込んでしまったゼノの肩に触れ、アリスは小さく震えていた。

アリスだけではない。今ここにいる職員の中で体が震えていない者などいない。全員が半透明なモニターから顔を逸らし、セブンスドラゴンを凝視している。

「目覚めたってのか。……混沌の覇者が」

『ああ、完全に起きちゃったみたいだね』

溜息混じりに吐き出されたゼノの言葉に肯定するヴェールは『しかも』と付け加える。

『ムカつくことにアズに自分の“痕”^{しるし}までご丁寧に付けていきやがった』

「しるし?」

『首絞められるような感覚の中で焼けるような痛みを感じた。痕付けられると厄介だよ。どこまでも追いかけてくるから』

「……くそ。なんで今になって起きるんだ。アズに滅ぼされるまで眠っていてくれれば良かったのに……」

『ノワールが起こしたのか、それともセピアノスを感じ取ったのか。……どっちにしても、ブレイオスが起きたからにはこれからが本番ってとこだね。氣い引き締めて行かないと世界の終りだ。面倒くさいことに』

「……勘弁してくれ」

項垂れてくぐもって聞こえる泣きそうなゼノの声が、職員全員を不安にさせた。ルディアナ王国も認めるセピア・ガーデンの団長が

初めて見せる、弱気な姿。あんなにも勇ましく雄々しかったゼノ・ブランフェールをここまで突き落す、混沌の覇者ブレイオス――。

創造神グラン・グレイフォスにより、世界を護るために生み出された神竜セピアノスと対を成したと言われる、かつてのもう一頭の黒き神竜。

その神ですら邪竜と成り果て、世界の破滅を誰よりも望んでいるその覇者を、誰が神竜だったと信じるだろうか。誰が崇めるだろうか。

混沌の覇者の目覚めによって、世界は更なる混沌の渦の中に巻き込まれていく。

22 覇者の目覚め（後書き）

長ったらたらしく書き続け、ようやくここまでできました……。

話の内容的にはようやく一括り、第一章終わりの的な感じになります。

……これから本番ですよ。

ノワールやシャドウとの戦闘シーンも入れたいと思いますし、イベントもいろいろ入れていきます！新キャラ、敵キャラもモロモロ出します！

そして……全くなかった男女間のドキドキな展開とかも……書けたら……いい……な？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0881v/>

クリスタル・クロニクル

2011年10月26日23時15分発行